島本町文化財調査報告書

第 49 集

越谷遺跡(KT22-1 バンド山)発掘調査報告書

令和5年5月

島本町教育委員会



1. 東区第1遺構面 完掘全景(南から)

巻頭図版2



1. 西区 舌状地形堆積物 東壁断面(北西から)



2. 西区 舌状地形堆積物 東壁断面(南西から)

序 文

本報告書は、令和4年度に実施した越谷遺跡の埋蔵文化財調査成果をまとめたものです。

越谷遺跡では、昭和35年の名神高速道路建設時に、古墳の副葬品と考えられる須恵器、鉄器が採集され、その後の平成3~5年度の名神高速道路拡張工事に伴う調査では、縄文時代から中世にかけての遺構や多数の土器が出土しています。

今回の調査は、島本町 JR 島本駅西土地区画整理事業に伴い、令和4年6月から10月にかけて現地調査を実施しました。この調査において、鎌倉時代から室町時代のものと推定される溝や柱穴、畑の遺構などが発見され、当時の生活を偲ばせる土器が多数出土しました。いずれも、当地域における人々の生活や、土地利用を明らかにするものであります。

このような成果を得られましたのも、事業主をはじめ、調査地近隣の地元関係者や 関係諸機関の皆様のご理解とご協力の賜物です。ここに改めて、お礼を申し上げます とともに、引き続き本町の文化財行政に対し、今後とも変わらぬご支援を賜りますよ うお願い申し上げます。

本報告書が、歴史・考古学に携わる方々はもとより、町民の方々に広く活用され、 島本町の歴史と文化への関心を深める一助となれば幸いです。

令和5年5月31日

島本町教育委員会 教育長 中村りか



例 言

- 1. 本書は、島本町教育委員会が令和4年度に実施した、大阪府三島郡島本町桜井四丁目に所在する、越谷遺跡の埋蔵 文化財発掘調査報告書である。調査名は、「KT22-1 バンド山」である。
- 2. 本調査は、島本町 JR 島本駅西土地区画整理組合の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査 及び整理調査は、島本町教育委員会の指揮監督の下に株式会社島田組が行った。

【委託事業名称】島本町 JR 島本駅西土地区画整理事業に伴う越谷遺跡発掘調査

【調査面積】 372 m²

【委託契約期間】令和4年6月28日~令和5年5月31日

【現地調査期間】令和 4 年 6 月 29 日~令和 4 年 7 月 4 日 令和 4 年 9 月 12 日~令和 4 年 10 月 24 日

【整理調査期間】令和4年10月25日~令和5年5月31日

3. 現地調査及び整理調査の体制は、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下に、下記の体制(令和4年度役職名で記載)で実施した。

【島本町教育委員会】

島本町教育委員会 教育長 中村りか

島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課 課長 安藤鎌吾

同 担当者 主査 木村友紀、三井義勝、賀納章雄

【株式会社島田組】

代表取締役社長 岩立二郎

文化財事業本部長 利川 昇、同 工事部長 足立英彦、同 調査室長 安川賢太

監理技術者 山本 瞬、南山昌彦

主任調査員 辻 広志

調査員 日紫喜勝重

測量員・調査補助員 西条洋樹、加藤優弥、内田 徹、越智理奈、芦田吉史

整理員 木村靖子、田中羽留香、出口まゆみ、岡中喜代美、野村佳弘、井上昌子、山内千恵子、石守 瞳、吉村香織、岡田都代、斎藤早苗、森岡沙織、小室恵子、山野恵子、野出 操、東山 華

- 4. 発掘調査は辻、日紫喜が、測量は西条、越智が、写真撮影のうち遺構写真は日紫喜が、記録写真は辻が、遺物の取り上げと管理を日紫喜が実施した。整理作業及び報告書作成は、遺物台帳の管理と洗浄・注記・接合等を木村_靖、田中が、遺物実測・拓本・デジタルトレースを山内、石守、吉村、岡田、斎藤、森岡、小室、山野、野出、出口、岡中、野村、井上が、遺物観察表作成を木村_靖が、平面図・壁面図・個別遺構図等のデジタルトレースを越智、西条が、挿図作成を辻、木村_靖、田中が、遺物写真撮影を日紫喜が主に行った。
- 5. 本書の原稿執筆は、第1章第1節、第2章第2・3節は木村友紀が、第2章第1節は田中が、第6章はパレオ・ラボ AMS 年代測定グループ (伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・辻 康男) が、その他は辻が行った。編集は、島本町教育委員会の指示の下に辻が行い、東山がこれを補佐した。
- 6. 発掘調査及び整理調査、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご教示、ご協力をいただいた。 名前を記して、感謝の意を表します。(50 音順、敬称略)

足立佳代、井上満郎、小貫 充、岡田 賢、木村啓章、佐古愛己、辻 康男、豊田裕章、中塚 良、藤原昌史、前川佳代、 増田富士雄、馬淵和雄、村田路人、山川 均、山中 章、山中浩之、吉原忠雄

7. 本調査の記録及び出土遺物は、本町教育委員会において保管している。

月. 例

- 1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系平面直角座標系VI(測量成果 2011)に基づいており、方位は平面直角座標系に基づく座標北を北として表記し、本文中では単位の「m」を省略した。標高は、海抜高(東京湾平均海面高度)を使用し、本文中では「T.P.」を省略した。
- 2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(小山正忠他、2007 年) に準拠した。 粒度及び面積割合は、駿河湾団体研究グループの粒度表を適時使用した。
- 3. 使用地図は、2,500分の1の地形図「島本町全図」(昭和62年測量、平成23年修正図)を調整して用いた。
- 4. 遺構平面図や個別の遺構図は、各図にスケールを掲載し、縮尺は 40・80・100・200 分の 1 を基本とするが、遺構の規模や紙面に合わせて適時変更した。
- 5. 遺物実測図は、各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を4分の1とした。実測図の断面は、須恵器・陶磁器・ 鉄製品を黒塗りに、土師器・黒色土器・瓦器を白抜きに、瓦を斜線とした。遺物番号は、実測図・写真図版共に同 一番号である。
- 6. 椀の用字は、磁器のみ「碗」を用い、他の土器・木製品は「椀」を用いた。
- 7. 遺構の法量は、基本「m」を用いたが、0.2 m未満については「cm」を用いた。遺物の法量は、「cm」を用いた。
- 8. 本書に収録した図・資料等の引用・参考文献は、各節又は各章の文末に明記し、本書の体載に合わせて縮小又は拡大したものや、一部加筆したものを用いた。
- 9. 遺構番号は、各調査区毎に001で始まる3桁の通し番号とし、遺構の性格(種類・属性)は下記の呼称を遺構番号の後ろに付し、「跡」は付さない。

洪水溝 (洪水時溢流河川・自然河道)、溝 (人工(化)河川・流路)、柱穴、杭穴、穴 (ピット)、窪、土坑、落ち込み、段差(段)、杭列(柵・塀)、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、池泉、平坦面、畦畔、大畦(畦道)、小畦(手畦)、水口(給排水口)、水田(水田区画)、畑(畠)、耕作溝(畝溝・畝状窪み・素掘り溝)、池(溜池・湧水池)、耕作穴、谷地形(谷状地)、攪乱、不明遺構

- 10. 写真図版の撮影方向は、座標の東西南北を正確に示すものではなく、調査区のおよその東西南北で示した。
- 11. 本書で用いた出土遺物の年代観については、下記の文献を主に引用参照した。
 - ・田辺昭三『須恵器大成』(㈱角川書店、1981年
 - ・森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年−近畿編Ⅱ』(㈱木耳社、1990年
 - ・橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器の様相」『高槻市文化財年報 昭和 63 年・平成元年度』1991 年
 - ・九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』2000年
 - ・江戸遺跡研究会編『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房(株)、2001年
 - ・中世窯業の諸相実行委員会編『中世窯業の諸相-生産技術の展開と編年』2005年
 - ・田中元浩「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第 20 号、一般社団法人日本考古 学協会、2005 年
 - ・(財)大阪府文化財センター編『古式土師器の年代学』2006年
 - ・西村 歩「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和 資料集』2008 年
 - ・九州近世陶磁学会編『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』2008年
 - ・角谷江津子『近世京焼の考古学的研究』(株)雄山閣、2016年
 - ・平尾政幸「土師器再考」『史洛 研究紀要』第12号、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2019年
 - ・日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』 何真陽社、2022 年

目 次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第1章	調査の経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	2
第2章	地理的環境と歴史的環境	5
第1節	調査地の位置と地理的環境	5
第2節	調査地の歴史的環境	7
第3節	既往の調査	10
第3章	発掘調査と整理調査の方法	12
第4章	基本層序と遺構面	15
第1節	基本層序と各層の概要	15
第2節	調査地の地形と堆積状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
第5章	調査成果	26
第1節	東区の各遺構面の遺構と遺物	26
第2節	西区の各遺構面の遺構と遺物	45
第6章	自然科学分析	59
第1節	放射性炭素年代測定	59
第7章	総 括	69
第1節	越谷遺跡の時期別消長	69
第2節	舌状地形堆積物の堆積時期	76
第3節	舌状地形堆積物(第8層)と土石流・土砂流堆積物の成因	79
第4節	調査成果の意義	84

写真図版

報告書抄録

奥付

挿図目次

図 1.	調査地位置図	1	図 20-1.	東区 第 3 遺構面 208 土器溜り出土遺物	40
図 2.	島本町大字小字図	6	図 20-2.	東区 第 3 遺構面 208 土器溜り出土遺物	41
図3.	遺跡分布図	8	図 21.	東区 深掘り調査 平面図	43
図 4.	周辺の調査地	11	図 22.	西区 壁面図	46
図 5.	調査地の地区割と調査区名	13	図 23.	西区 東壁面·北壁面縦横変倍図	47
図 6.	土石流·土砂流模式図	17	図 24.	西区 西壁面·南壁面縦横変倍図	48
図 7-1.	調査区周辺柱状図	22	図 25.	西区 第1遺構面 平面図	49
図 7-2.	調査区周辺柱状図	23	図 26.	西区 第1遺構面 包含層及び遺構出土遺物	50
図8.	土師器段階区分と略年代(平尾 2019)	26	図 27.	西区第1遺構面舌状地形堆積物(第8層)	
図 9.	調査地詳細図	27		出土遺物	51
図 10.	東区 壁面図		図 28.	西区第2遺構面平面図	53
図 11.	東区 東壁面・南壁面縦横変倍図	29	図 29.	西区 第 2・3 遺構面 遺構図及び出土遺物	55
図 12.	東区 西壁面縦横変倍図	30	図 30.	西区第3遺構面平面図	56
図 13.	東区 第1遺構面 平面図	31	図 31.	西区 深掘り調査 平面図	57
図 14.	東区 第1遺構面 遺構図	32	図 32.	曆年較正結果	
図 15.	東区 第1遺構面 包含層及び遺構出土遺物	34	図 33.	マルチプロット図	
図 16.	東区第2遺構面平面図	35	図 34.	島本町内等高線図	
図 17.	東区 第 2 遺構面 遺構図	36	図 35.	小字「越谷」周辺詳細図	
図 18.	東区 第 3 遺構面 平面図		図 36.	土師器皿法量分布図	
図 19.	東区 第 3 遺構面 遺構図	39	図 37.	島本町周辺の断層図	81
		表目	次		
表 1.	既往調査地一覧		表 6-7.	遺物観察表	
表 2.	東区基本層序		表 6-8.	遺物観察表	
表 3.	西区基本層序			遺物観察表	
表 4.	測定試料および処理			遺物観察表	
表 5.	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果			遺物観察表	
表 6-1.	遺物観察表			遺物観察表	
表 6-2.	遺物観察表 ************************************			遺物観察表	
表 6-3.				遺物観察表	
表 6-4.	遺物観察表			遺物観察表	
表 6-5.	遺物観察表		衣 6-16.	遺物観察表	100
表 6-6.	退彻観佘衣	90			
	<u> </u>	写真	目次		
写真 1.	東区の設定(南から)	2	写真 9.	10/11 府教育庁岡田氏の調査指導(南から)	3
写真 2.	西区の設定(北から)	2	写真 10.	10/14 増田富士雄氏の調査指導(北から)	3
写真 3.	6/29 遺構面確認(北東から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2	写真 11.	10/15 山中 章氏他の視察(南から)	2
写真 4.	6/30 前川氏他視察(南西から)	2	写真 12.	10/18 豊田裕章氏他の視察(北から)	4
写真 5.	現場作業中断と養生作業(北から)	2	写真 13.	10/19 深掘調査と府教育庁木村氏の指導(南から)…	4
写真 6.	8/8 府教育庁岡田氏の調査指導(南から)	3	写真 14.	東区埋戻しの完了(北から)	4
写真 7.	8/9 文化財審議委員と山川氏他視察(南から)	3	写真 15.	西区埋戻しの完了(南から)	4
写真 8.	10/6 文全協小貫氏他の視察(南から)	3	写真 16.	測定試料写真	61

巻頭図版目次

巻頭図版1

1. 東区第1遺構面完掘全景(南から)

巻頭図版2

- 1. 西区 舌状地形堆積物 東壁断面(北西から)
- 2. 西区 舌状地形堆積物 東壁断面(南西から)

写真図版目次

図版1 航空写真

1-1. 調査地周辺航空写真(昭和30年撮影)

図版2 遺構

2-1. 東区第1遺構面 完掘全景(南から)

図版3 遺構

3-1. 東区第1遺構面遺構検出状況(南から)

3-2. 東区第1遺構面耕作溝、耕作穴等(南から)

図版 4 遺構

4-1. 東区第1遺構面完掘全景(北から)

図版 5 遺構

5-1. 東区第1遺構面遺構検出状況(北から)

5-2. 東区第1遺構面耕作溝、耕作穴等(北から)

図版 6 遺構

6-1. 東区第2遺構面完掘全景(北から)

図版7 遺構

7-1. 東区第2遺構面遺構完掘状況(北から)

7-2. 東区第2遺構面101溝、102土坑、103・104 耕作穴等(北から)

図版8 遺構

8-1. 東区第2遺構面完掘全景(南から)

図版 9 遺構

9-1. 東区第2遺構面105土坑、108耕作地・平場、 109谷埋立地等(南から)

9-2. 東区第2遺構面105土坑(東から)

図版 10 遺構

10-1. 東区第3遺構面完掘全景(北から)

図版 11 遺構

11-1. 東区第3遺構面遺構検出状況(南から)

11-2. 東区 深掘り調査全景(北東から)

図版 12 遺構

12-1. 西区第1遺構面完掘全景(南から)

12-2. 西区第1遺構面完掘全景(北から)

図版 13 遺構

13-1. 西区第1遺構面耕作溝(北東から)

13-2. 西区第1遺構面耕作溝(東から)

13-3. 西区 第1遺構面 耕作溝(東から)

13-4. 西区 第 1 遺構面 耕作溝(東から)

13-5. 西区第1遺構面耕作溝(東から)

図版 14 遺構

14-1. 西区第2遺構面遺構検出状況(南から)

14-2. 西区第2遺構面204・205柱穴(西から)

14-3. 西区第2遺構面202土坑、203・206柱穴(西から)

14-4. 西区第2遺構面検出壁面(西から)

14-5. 西区 第 2 遺構面 10-2 層遺物出土状況 (西から)

図版 15 遺構

15-1. 西区第3遺構面301~305土砂流下部抉込痕(北東から)

15-2. 西区 第 3 遺構面 301 \sim 305 土砂流下部抉込痕(北西から)

図版 16 遺構

16-1. 西区 第 3 遺構面 東壁壁面 306 後流の流路(北西から)

16-2. 西区 第 3 遺構面 北壁壁面 306 後流の流路 (南から)

図版 17 遺構

17-1. 西区 深掘り調査 (南西から)

17-2. 西区 深掘り調査(北から)

17-3. 西区 深掘り調査 (北西から)

17-4. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物全景(西から)

図版 18 遺構

18-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物南半 (西から)

18-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分①(西から)

図版 19 遺構

19-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分②(西から)

19-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分③(西から)

図版 20 遺構

20-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分④ (西から)

20-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分⑤(西から)

図版 21 遺物

21-1. 東区 208 土器溜り出土遺物 1 (土師器皿集合写真)

21-2. 東区 208 土器溜り出土遺物 2 (瓦器椀)

図版 22 遺物

22-1. 東区表採遺物(複弁8葉蓮華文軒丸瓦)

22-2. 東区 208 土器溜り出土遺物 3 (土師器甕、鉄滓、埴輪)

22-3. 東区 208 土器溜り出土遺物 4 (須恵器甕)

22-4. 東区 208 土器溜り出土遺物 5 (貿易陶磁器)

図版 23 遺物

23-1. 西区 舌状地形堆積物 第 8 層上位層 出土遺物(土師器皿・甕、瓦器椀)

23-2. 西区 舌状地形堆積物 第8層下位層 出土遺物 (土師器皿)

図版 24 遺物

24-1. 西区 第 2-1 \sim 10 層・第 10-2 層・第 11-1 層 出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、事業計画約 13ha の土地区画整理事業に伴う発掘調査である。この土地区画整理事業に伴い、平成 29 年度に道路予定地の確認調査を実施したが、遺構・遺物の存在が確認できなかった。このため当初、当該地周辺は、土地区画整理事業に伴う発掘調査の対象とならなかった場所である。

しかしながら、令和2年度に実施した当該地での工事立会の際に、鎌倉時代の遺物やそれ以前の造成土の存在を確認した。その位置は、当初の道路計画の南端付近であったが、道路計画がより南側に変更されたため、計画変更された南側の道路部分を対象として、令和3年度に再度、確認調査を行った。その結果、遺構・遺物の存在を確認したため、事業主と協議を行い、令和4年度に発掘調査を実施することとした。

なお、道路部分より南は、尾根を切土する計画となっていたが、協議中の令和3年度に立会調査を 実施した結果、遺構・遺物の存在が確認できなかったため、本調査の対象としなかった。

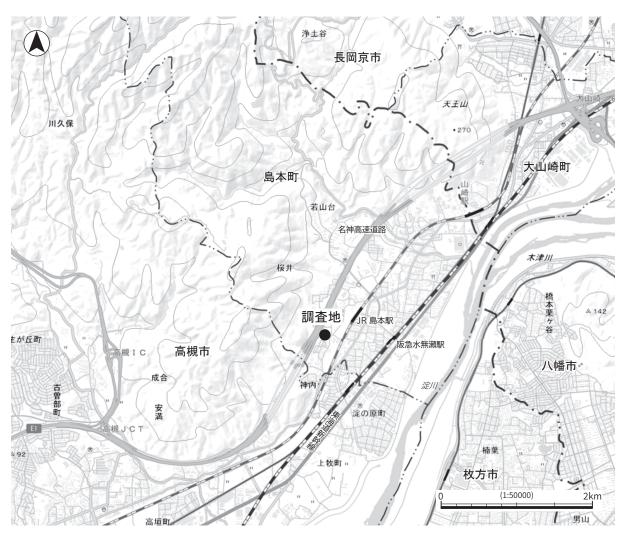


図 1. 調査地位置図

第2節 調査の経過

今回の発掘調査(KT22 - 1 バンド山)は、6月の調査着手直後に調査の中断があり、9月中旬より再開して、10月末に終了した。現地調査の経過概要は、以下の通りである。

【令和 4 年 (2022)】

6月29日 午前、尾山遺跡から越谷遺跡へ資材・重機の搬送準備。午後、東区に調査トレンチを設定し、写真撮影後に表土掘削を開始する。本日は、東区の南端から8m余りを表土掘削終了。明日、来客のため西区に重機を移動し、表土掘削を準備。

6月30日 午前11時頃、大阪府教育庁文化財保護課課長補佐岡田 賢 氏、奈良女子大学研究員前川佳代氏、島本町議会議員永山優子氏が視察 のため来跡。西区の掘削範囲位置を確認した後、表土掘削を開始。本 日、西区の半分程度を終了。

7月1日 西区・東区共に汚水桝や汚水本管等による攪乱が確認されたため、施工業者と協議を行う。この問題が解決するまで、7月5日から発掘調査を一時中断することとなる。西区は表土掘削終了後、遺構検出と写真撮影実施。

7月4日 東区の重機による表土掘削終了。

7月5日 現場作業中断。以後、現場にて遺物洗浄および注記作業を、 7月22日まで行う。

8月5日 8月9日の見学会のため、現場の清掃を実施。西区にて排水作業、流入土の除去、壁面の精査後、遺構検出を実施。壁面分層と検出遺構に白線を入れ、検出写真撮影。東区にて排水作業後、流入土の除去開始。

8月8日 東区にて遺構検出実施。壁面分層と検出遺構に白線を入れ、 検出写真撮影。西区にて、試掘坑の再掘削を実施。大阪府教育庁文化財 保護課岡田 賢氏が来跡し、調査状況を確認。

8月9日 来跡者用の導線整備。午前、島本町文化財保護審議会委員である大阪大谷大学非常勤講師吉原忠雄氏、京都市歴史資料館館長井上満郎氏、神戸女子大学教授村田路人氏、佛教大学准教授佐古愛己氏が視察。午後、立正大学博物館学芸員足立佳代氏、奈良女子大学研究員前川佳代氏、大阪大学招へい研究員豊田裕章氏、文化財保存全国協議会小貫充氏、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会山川均氏が視察のため来跡。終了後にシート養生実施。

9月12日 現地調査を再開。東区の壁面清掃後、西壁面分層作業。作業完了後に写真撮影。土層断面図作成後、汚水桝掘込と拡張トレンチの



写真1. 東区の設定(南から)



写真 2. 西区の設定(北から)



写真 3.6/29 遺構面確認 (北東から)



写真 4. 6/30 前川氏他視察(南西から)



写真 5. 現場作業中断と養生作業 (北から)

掘削開始。拡張トレンチから溝状の攪乱を検出。

9月13日 東区西側汚水桝掘込の攪乱掘削終了。

9月14日 東区南壁・東壁の壁面清掃作業。完了後に写真撮影と土層 断面図作成。

9月15日 東区の第1遺構面遺構検出。完了後に写真撮影、遺構掘削 開始。

9月16日 東区の遺構掘削終了。全景写真撮影、平面図作成終了。台 風14号対策のための養生を実施。

9月20日 台風14号が九州・中国地方に上陸し大雨となるが、通過後に快晴となる。排水作業後、遺構掘削実施。土層断面図作成。

9月21日 東区第1遺構面の遺構完掘、完掘写真撮影、平面図作成。 第2遺構面包含層掘削、遺構検出。遺構検出写真撮影、遺構掘削、土 層断面図の作成。

9月22日 東区第2遺構面の遺構掘削終了後、完掘写真撮影。3面目 遺構包含層掘削。㈱パレオ・ラボ辻 康男氏来跡。複弁8葉蓮華文軒丸 瓦を表採。台風15号接近、東海地方を通過。

9月26日 東区第3遺構面包含層掘削終了。遺構検出と遺構掘削。遺構の半裁写真撮影、完掘全景写真撮影。遺構平面図、断面図の作成。

9月27日 東区第3遺構面の谷状地掘削終了。深掘り調査を実施し、 土層断面図追加作成。¹⁴C サンプル採取。壁面を雨対策のため養生。

9月28日 本日より西区再開。東壁土層断面精査。基準点移設。東区の埋戻し開始。

9月29日 西区土層断面精査。東区の東側汚水桝掘削終了。東区埋戻し。

9月30日 西区の西側汚水桝掘込掘削開始。東区埋戻し完了。

10月3日 西区西側汚水桝掘込掘削。

10月4日 西区西側汚水桝掘込掘削。北側の試掘西1を再掘削。

10月5日 西区南側の試掘西2を再掘削。完了後、西壁土層断面図作成。汚水本管掘削。

10月6日 北側攪乱除去。完了後、遺構検出、終了後に検出写真撮影。 検出状況図作成。奈良女子大学研究員前川佳代氏、文化財保存全国協議 会小貫 充氏が視察のため来跡。

10月11日 西区第1遺構面の耕作溝掘削。完了後、写真撮影、平面図作成。北側包含層掘削。大阪府教育庁文化財保護課岡田 賢氏が来跡し、調査状況を確認。

10月12日 西区第2構面の遺構掘削後、土層断面図作成。作成後完掘 撮影。第3遺構面包含層掘削開始。

10月13日 第3遺構面遺構検出。検出完了後に写真撮影。遺構掘削。 第11-1層包含層から土師器の摂津型鍋が出土。

10月14日 西区第3遺構面の遺構掘削。遺構半裁掘削後、土層断面図



写真 6.8/8 府教育庁岡田氏の調査指導(南から)



写真 7.8/9 文化財審議委員と山川氏他視察(南から)



写真 8. 10/6 文全協小貫氏他の視察(南から)



写真 9. 10/11 府教育庁岡田氏の調査指導(南から)



写真 10. 10/14 増田富士雄氏の調査指導(北から)

作成。完掘全景写真撮影。京都府埋蔵文化財調査研究センター理事増田 富士雄氏による土砂流の確認と調査指導。(株)パレオ・ラボ辻 康男氏・ 石川 智氏が調査補助。

10月15日 向日市埋蔵文化財センター中塚 良氏による堆積物の確認。 三重大学名誉教授山中 章氏、島本町議会議員永山優子氏が視察。調査 区を養生し、18日の来跡者用導線の整備。

10月18日 来跡者は、8月9日と同じく奈良女子大学研究員前川佳代 氏、大阪大学招へい研究員豊田裕章氏、文化財保存全国協議会小貫 充 氏、鎌倉・中世文化研究センター馬淵和雄氏、その他に産経新聞社と朝 日新聞社が視察のため来跡。

10月19日 深掘り調査開始。土層断面を写真撮影後、断面図作成。大阪府教育庁文化財保護課木村啓章氏、(公財)向日市埋蔵文化財センター中塚良氏、(㈱パレオ・ラボ辻康男氏が来跡し、堆積物の再確認を実施。¹⁴C サンプル採取。

10月20日 西区西壁包含層の遺物を採取。北壁の精査と写真撮影、土層断面図作成。西区の埋戻しを開始。

10月21日 西区埋戻しを継続。

10月24日 西区の埋戻しを完了。調査備品の撤収を完了。



写真 11. 10/15 山中 章氏他の視察(南から)



写真 12. 10/18 豊田裕章氏他の視察(北から)



写真 13. 10/19 深掘調査と府教育庁木村氏の指導 (南から)



写真 14. 東区埋戻しの完了(北から)



写真 15. 西区埋戻しの完了(南から)

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 調査地の位置と地理的環境

本町は、大阪府の北部、京都府の境に位置し、その東側は北から京都府京都市、長岡京市、大山崎町、八幡市、西側は大阪府高槻市、南側は淀川をはさんで枚方市に隣接する。町域は、概ね南北約8.9 km、東西約3.3 kmの範囲に南北に細長く広がり、その面積は約16.81 kmである。標高は一番低い所が淀川河床で標高4m、一番高い所が釈迦岳の標高631 mである。町の北側から西側が山地・丘陵地であり、町域の約7割を占めている。市街地は、天王山の南側に広がる平坦地に形成されている。

山地部北側にはポンポン山山地が連なり、その東南側に一段低い天王山山地がある。これらの山地は主に丹波層群によって形成されている。天王山山地の南側には狭い範囲ながら山崎・桜井丘陵とよばれる丘陵地がみられ、主に大阪層群によって形成されている。また、平野部は9~13 m程度の標高で広がり、主に河川堆積物によって構成され、淀川低地とよばれる。本町南東の山崎狭隘部においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となり大阪平野を南西に流れる。淀川低地は、主に淀川からの供給物によって構成されるが、山地・丘陵地を源とする水無瀬川等や他の河川からの堆積物によっても形成され、小河川付近には扇状地が広がる。そして現在、島本町域では平野部から丘陵部にかけて宅地や工業用地として開発が進んでいる。

淀川は琵琶湖・淀川水系を作り、古来日本最大の内陸水運路の一つとして重要な役割を果たしてきた。特に長岡京・平安京の遷都以降その重要性を更に増していった。平野部においても、京と西国とを結ぶ山陽道(西国街道)が通り、陸路においても重要な幹線路が貫いていた。現在も町内には、JR 東海道新幹線、JR 東海道本線、阪急京都線といった鉄道や、名神高速道路、国道 171 号といった重要な交通幹線が通っている。

越谷遺跡は、本町内の南西部の山麓に位置している遺跡で、南北は御所池から桜井三丁目、桜井四丁目、桜井台、大字桜井に広がっている。その大部分は緩やかな南東下がりの段丘上(沖積扇状地上位面)で、近年まで水田や畑としての土地利用が顕著な地域であった。昭和40年に作成された図2の島本町大字小字図からみてみると、大字桜井の小字「御所内」と「バンド山」、「六条殿」等にあたる。今回の調査地は、桜井四丁目の小字「バンド山」にあたる。

<引用参考文献>

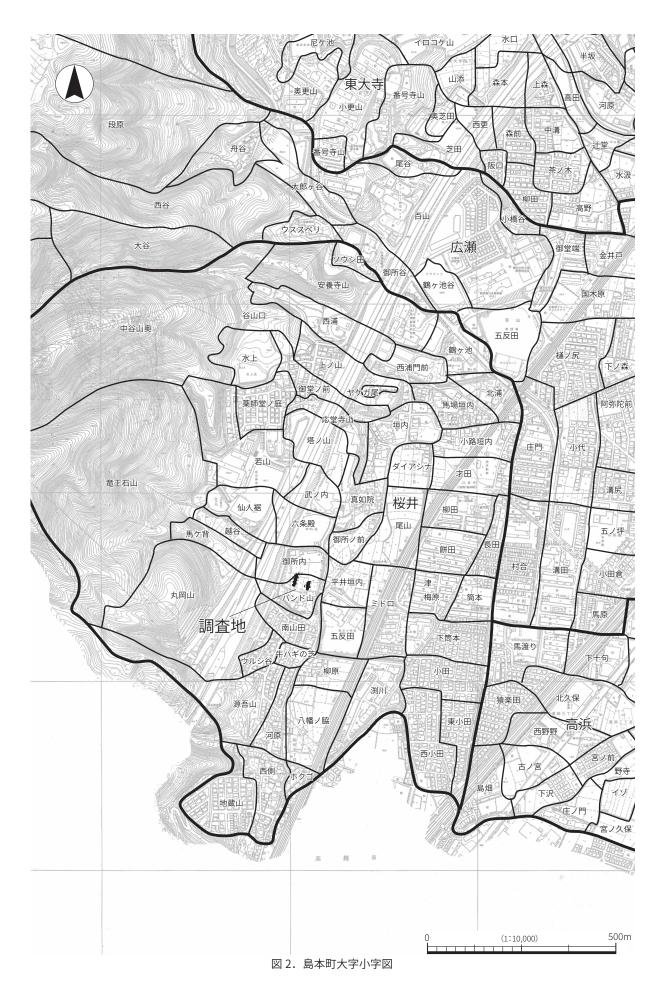
島本町史編さん委員会編『島本町史』本文篇・史料篇、島本町役場、1975・1976 年

島本町教育委員会編『島本町文化財調査報告書』第1集~第42集、第44集~第47集、2002~2023年

島本町教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター編『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第 43 集、(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第 316 集、2022 年

名神高速道路内遺跡調査会編『水無瀬荘跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第 1 輯、1996 年

名神高速道路内遺跡調査会編『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯、1997年



第2節 調査地の歴史的環境

本町における人々の活動の痕跡を、図3の遺跡分布図よりたどると、最も古くは旧石器時代にまで さかのぼる。段丘上に位置する山崎西遺跡では、国府型ナイフ形石器やサヌカイトの剥片を数点採集し ており、後期旧石器時代におけるキャンプサイトなどの存在を想定することができる。

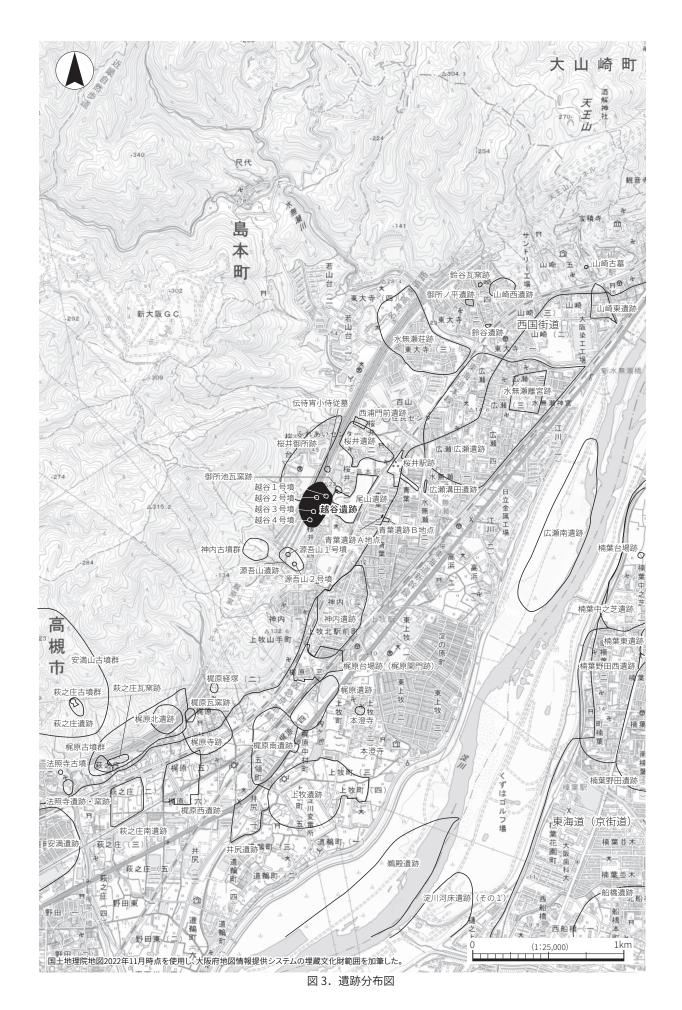
縄文時代になると、段丘上に位置する越谷遺跡において縄文時代中期の土器片が多数出土している。また、越谷遺跡に接して、丘陵裾部から平野部にかけて広がる尾山遺跡においても、縄文時代後期から晩期にかけての遺物が出土し、谷地形の埋没土からは縄文時代後期の土器片がまとまって出土している。このほか、平野部に広がる広瀬遺跡では縄文時代晩期の竪穴建物を確認しており、集落が展開していた可能性が考えられる。

次に弥生時代では、尾山遺跡において、弥生時代前期から後期にかけての遺物の出土が見られ、後期の銅鏃なども出土している。そして、弥生時代中期以降、水田跡や溝など耕作に関わる遺構が多く検出されている。また、桜井駅跡の周辺で弥生時代前期の遺物が出土しているが、弥生時代中期になると、青葉遺跡A地点・B地点において竪穴建物や溝を検出しており、桜井駅跡・広瀬溝田遺跡では耕作溝を確認している。これらは、いずれも沖積部に位置する遺跡であり、この付近一帯においては、弥生時代中期に集落や耕作地が広がっていたものと考えられる。また、弥生時代後期になると、段丘上に位置する越谷遺跡や伝待宵小侍従墓において当該期の遺物の出土を確認している。

古墳時代においては、これまでのところ集落に関わる明確な遺構の検出は少ないが、尾山遺跡では、 古墳時代初頭の水田跡が確認されているほか、円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪等の破片が出土している。ま た、隣接する越谷遺跡では、名神高速道路建設工事に伴い出土した遺物の中に、古墳の副葬品と考えら れる須恵器杯・壺、刀等の遺物が存在した。さらに、源吾山遺跡と神内古墳群は、平野部を南に望む丘 陵上に位置し、一続きの古墳群であろうと推定されている。源吾山遺跡は、横穴式石室の一部と考えら れる石材の散布と、名神高速道路建設工事に伴い出土した副葬品と考えられる須恵器から古墳の存在が 想定されており、島本町と高槻市をまたいで広がる神内古墳群においては、高槻市側で横穴式石室が確 認されており、ほかに墳丘のような形状の地形が存在している。

飛鳥時代から奈良時代になると、鈴谷瓦窯跡や御所池瓦窯跡が操業した。鈴谷瓦窯跡は、これまでに2基の瓦窯が発掘調査において確認されており、出土瓦の特徴から7世紀末から8世紀初頭にかけてのものと考えられている。また、鈴谷瓦窯跡の南西側にある御所ノ平遺跡では竪穴建物を確認しており、建物内から鈴谷瓦窯跡と同様の瓦や粘土塊が出土していることから、瓦製作の工房の可能性がある。御所池瓦窯跡は、飛鳥時代末から奈良時代前半の瓦を焼成した瓦窯であり、この瓦窯で焼かれたものと考えられる軒瓦の中には、明日香村・飛鳥寺東南禅院や高槻市・梶原寺の瓦と同笵のものが見つかっている。今後、御所池瓦窯跡の周辺において、瓦を供給した寺院等が見つかる可能性があるが、同笵瓦の多さから御所池瓦窯跡の瓦を供給した候補地としては、梶原寺が有力であろう。このほか、奈良時代中期には、水無瀬川の右岸に東大寺領水無瀬荘が存在していたことが、正倉院に伝わる天平勝宝8年(756)「摂津国嶋上郡水無瀬絵図」によって知ることができ、その付近一帯が水無瀬荘跡として埋蔵文化財包蔵地となっている。

ところで、前節で本町は水運・陸路とも交通の要衝であったと述べたが、『続日本紀』和銅4年 (711) には、平城京と西国とを結ぶ古代山陽道に駅伝制の駅が置かれたとあり、本町には大原駅が設置



-8-

されたと考えられている。大原駅は平安時代前期のうちには廃止になったようであるが、長岡京・平安 京遷都を経て、平安時代になると、京と西国とを結ぶ交通の要衝としての本町の立地の重要性は増して いった。広瀬遺跡においては、西国街道沿いでの発掘調査で小石敷きの路面をもつ中世の道路状遺構を 検出している。そこには平安時代の遺物も含まれ、その整備が古代にまで遡る可能性がある。また、淀川河川敷にある広瀬南遺跡では、河道中より須恵器の大甕が見つかっており、これは淀川の水運により 運ばれてきたものの可能性がある。

さて、このような地勢にある本町においては、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇や貴族が度々遊行に水無瀬の地へ訪れるようになった。桓武天皇や嵯峨天皇は遊猟に訪れ、文徳天皇の子である惟喬親王はこの地に御殿を築いている。広瀬遺跡においては平安時代前期の建物群を検出しているが、これは、惟喬親王の水無瀬離宮関連施設の可能性がある。また、鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元年(1199)に水無瀬離宮の造営を行った。この水無瀬離宮は建保4年(1216)の洪水で倒壊したが、翌年には山上に再建されている。広瀬遺跡では、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連するものと考えられる建物遺構や所用瓦を検出しており、また、丘陵上にある西浦門前遺跡では、庭園と考えられる遺構を検出している。桜井地区においては、鎌倉時代後半の遺構を広く確認することができ、この時期に桜井地区が大きく開発されていることが伺える。尾山遺跡では池泉なども見つかっており、有力者の関与が伺えるが、後鳥羽上皇配流後の本町域をどのような人物が開発を行ったのかは明らかとなっていない。

その後、南北朝期から室町時代へと時代が動くとき、楠木正成・正行父子が別れた場所として『太平記』に記述のある桜井宿が、現在桜井駅跡として国史跡に指定されている。父子別れの場面は『太平記』という軍記物語の一場面であり、事実であるかどうかは不明であるが、発掘調査で『太平記』の記述を裏付けるような資料は得られていない。また、桜井駅の前身として、近辺に大原駅があったと考えられているが、これまでのところ、これら駅に関連する資料についても確認していない。ただし、桜井駅跡における発掘調査では、前述の弥生時代の遺構・遺物のほか、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺構・遺物を検出しており、特に、室町時代から江戸時代にかけての井戸を複数まとまって確認している。

近世以降になると、発掘調査で得られた資料では、山崎東遺跡において地下貯蔵庫の痕跡と考えられる石組み遺構を検出している。

<引用参考文献>

島本町町史編さん委員会編『島本町史』本文篇、1975年

島本町教育委員会編『島本町文化財調査報告書』第 1 集~第 42 集・第 44 集~第 47 集、 $2002\sim2023$ 年

島本町教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター編『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第43集・(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第316集、2022年

名神高速道路内遺跡調査会編『水無瀬荘跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第1輯、1996年

名神高速道路内遺跡調査会編『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯、1997年

第3節 既往の調査

当該地は、古墳時代の集落跡である、埋蔵文化財包蔵地「越谷遺跡」の範囲内である。昭和 39 年 (1964) の名神高速道路敷設工事時には、古墳時代の須恵器や刀の出土したことが知られている。

また、名神高速道路拡幅工事の際には、平成3年度(1991)及び平成4年度(1992)に名神高速道路内遺跡調査会によって表1及び図4の発掘調査及び試掘調査が実施されており、縄文時代の遺物包含層、弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物を検出している。

平成29年度(2017)の土地区画整理事業に伴う確認調査では、遺構・遺物の存在は確認できず、基本的には山土が堆積していたが、北側では一部において水成堆積物の存在を確認した。

令和2年度(2020)に実施した立会調査の際には、鎌倉時代の遺物を多く含む包含層とその直下に 造成土と考えられる土層を確認した。

令和3年度(2021)に実施した確認調査では、2時期の遺構面を確認し、弥生時代、平安時代~鎌倉時代に属すると考えられる遺物が出土したため、令和4年度(2022)に実施した今回の調査では、東区・西区ともに2面調査として実施したものである。

なお、令和3年度(2021)に実施した当該地から南に位置する尾根の切土の立会調査では、遺構・遺物の存在は確認できず、地表面からすぐ大阪層群と考えられる土層が堆積していることを確認した。

<引用参考文献>

島本町教育委員会編『島本町文化財調査報告書』第1集~第42集・第44集~第47集、2002~2023年 名神高速道路内遺跡調査会編『水無瀬荘跡遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第1輯、1996年 名神高速道路内遺跡調査会編『越谷遺跡他発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2輯、1997年

表 1. 既往調查地一覧

所収遺跡名	調査面 積(㎡)	調査期間	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
① 越谷遺跡 第4トレンチ	48	平成3年2月試掘					
② 越谷遺跡 第5トレンチ	511	平成4年1月試掘 1月~翌年3月全面調査	集落・		縄文・弥生土器・埴 輪・土師器・須恵器・	中世の土坑から早島式土器 (吉備系土師質椀)出土	
③ 越谷遺跡 第6トレンチ	3710	平成4年5月試掘 5月~翌年3月全面調査	田畑	溝28	瓦器・陶磁器		
④ 越谷遺跡 第7トレンチ	262	平成4年9月試掘					
⑤ 桜井御所跡 第8トレンチ	650	平成4年7月試掘					
⑥ 御所池瓦窯跡 第3トレンチ	100	平成4年11月試掘					
⑦ 伝待宵小侍従墓 第2トレンチ	108	平成5年4月試掘 10月から全面調査			石組遺構1	弥生土器 (包含層から)	
越谷遺跡 (桜井二〜五丁目の各一部)	84	平成30年2月~3月確認	散布地			弥生土器・土師器・須 恵器・瓦器・陶磁器・ 瓦・泥面子・加工杭	遺物包含層を確認

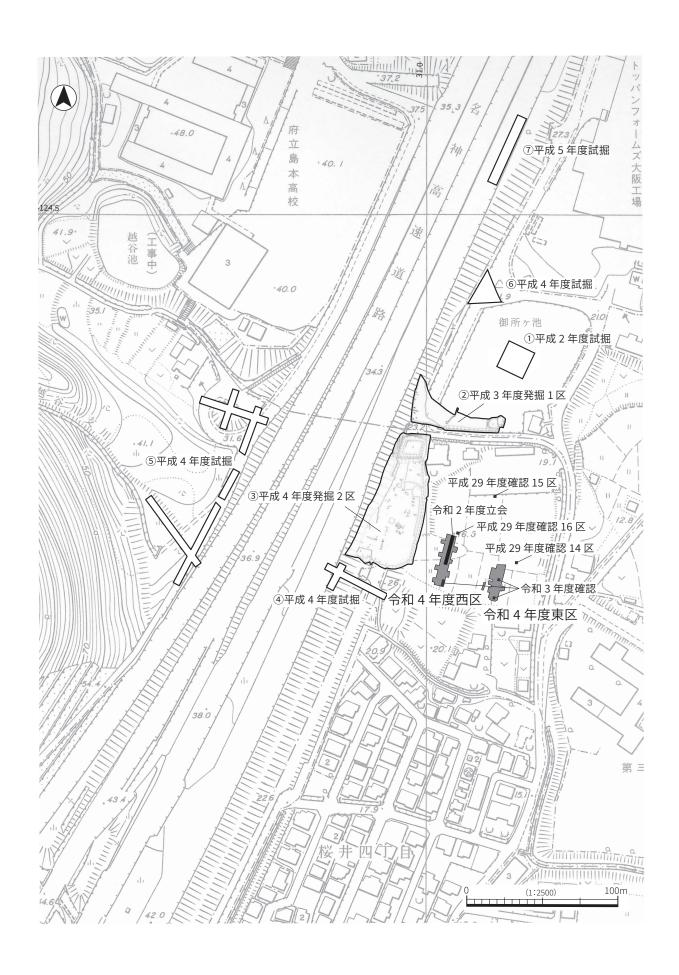


図4. 周辺の調査地

第3章 発掘調査と整理調査の方法

今回対象となった越谷遺跡の発掘調査は、中央自動車道西宮線(名神高速道路)拡幅工事に伴い、平成3~5年度に名神高速道路内遺跡調査会が、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下に実施した前回の調査(以下、「前回調査」という。)と、今回が発掘としては2回目の調査(以下、「今回調査」という。)である。発掘調査及び整理調査は、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下に、本町教育委員会が実施した。

1. 調査名・調査区名

調査名は、越谷遺跡「KT22-1 バンド山」を使用し、出土遺物への注記は、「KT22-1」を記した。 調査区名は、図5の東区と西区の2地区であるため、これを調査区名(トレンチ名)として用いた。

2. 地区割名

地区割名は、公益財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』(2010)に準拠し、世界測地系(測地成果 2000)の平面直角座標系第VI系を用いた。調査地の地区割名は、第 I 区画が「L7」、第 II 区画が「5」、第III区画が図 6 の下図に示す「14N・14O」の範囲にあたる。なお、今回の調査における遺物の取り上げ範囲は、調査区を基準として行った。

3. 層名・遺構面

層名の呼称は、上層からの通し番号とし、各調査区内の地層を土質・土色や出土遺物等から、東区 と西区をそれぞれ 13 層に細別した。

なお、層名においては、層準を表す数字に、自然堆積した岩屑が動植物や人為による撹拌と有機物の混入により団粒という堆積構造をもつ土壌化作用を受けた地層(土壌層・耕作土・作土・耕土)を「a 層」、そうでない岩屑の地層(自然堆積層)を「b 層」、岩屑に少し土壌化作用が及んでいる地層を「a'層」として用いられることが多いが、一覧表には参考として記入しているが層名には付加していない。

また、調査の進展に従い、基本層序間に挟在する間層や、その層より掘り込まれた遺構やその埋土等が存在した場合は、枝番を付した。

調査深度は、最終の深掘り調査を、法令に定められた掘削方法に従いながら、中段を設けるなどして表土から約3mを限界として行った。遺構面は、東区では第3-1層、第10-1層・第11-1層、第13-1層の上面で、西区では第3層、第10-2層、第12-1層・第13-1層の上面で検出した。それぞれ第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面と呼称した。なお、この第13層以下については、限界深度に注意を払いながら深掘り調査を実施した。

4. 遺構名

遺構番号は、各調査区の遺構面毎に3桁の通し番号とし、凡例に示す遺構の属性は遺構番号の後に付け、「番号+遺構属性」という形で表現した。

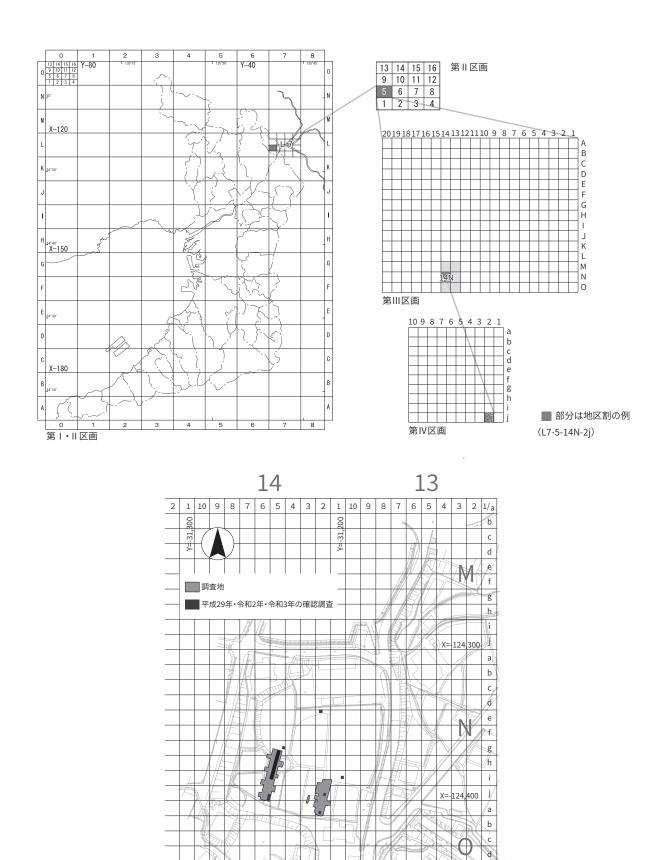


図 5. 調査地の地区割と調査区名

(1:2500)

70

e f

100m

5. 発掘調査

調査体制は、1班体制で行った。発掘調査にあたっては、重機で盛土層・攪乱層・表土層等を掘削 したのち、包含層掘削と遺構の検出、埋土の掘削を人力掘削で行った。

6. 測量作業・写真撮影

平面図や個別遺構図等は、トータルステーションを用いた電子平板測量と、Agisoft 社 Metashape Professional によるオルソ写真測量を併用して行った。壁面図・断面図は、オルソ写真測量で作成した。縮尺は、基本 20 分の 1 で全て作成し、適宜縮小して使用した。

遺構の写真撮影は、Nikon 社製一眼レフレックスタイプデジタルカメラ D610(有効画素数 2,426 万画素)を用いて、RAW と JPEG にて記録し、同時に Nikon 社製 35 mmフィルムカメラ F3 を用いて、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムによる記録も行った。

7. 整理作業と報告書作成

遺物は、袋台帳を作成し、洗浄・注記の基礎整理を行った。洗浄は出土遺物の大半を現地で洗浄し、整理事務所にて注記した。注記の記載内容は、「KT22-1 +台帳登録番号」とした。この内、抽出作業を行った重要な遺物については、実測・拓本・デジタルトレース・写真撮影等を順次行って、挿図・遺物観察表・遺物写真図版等を作成した。

報告書作成では、遺構平面図・壁面図・個別遺構図・遺物実測図等をスキャニングしたのち、Adobe 社製 Illustrator を用いて浄書・調整して、写真を Photoshop で調整して挿図・図版を作成した。また、その他の調査記録の整理を進め、これらから本文原稿や表・挿図等を作成し、InDesign で編集して印刷製本を行い、本書を刊行した。

8. 出土遺物及び成果品の保管

整理調査終了後の出土遺物は、報告書掲載遺物と対象外の遺物に分けて収納を行い、図面・写真・ 台帳・調査日誌等の成果品とともに、本町教育委員会において保管・管理している。

第4章 基本層序と遺構面

第1節 基本層序と各層の概要

今回の調査地では、現代盛土層(第1層)以下、深掘り調査における現地表下 3m までの各調査区の地層を、東区では表 2 に、西区では表 3 に記したように、各 13 層に細別した。これらを、耕作土層(以下、「作土」という。)等の土壌層(a 層)や自然堆積層(b 層)の連続性、地層から出土した遺物の年代等から再検討し、本報告書では下記の基本層序で実施した。また、粒度や色調については、場所によって同一層内でも異なるため、代表例を記載し、幅をもたせて記述した。なお、第 4 ~ 8 層は、一過性の短期間の堆積である土砂流堆積物であり、層序では分層したが、本文中では 8 層で一括し、分層名は記載していない。

また、層序については、増田富士雄氏、中塚良氏、辻康男氏に現地確認していただき、堆積状況についてご教示をいただいた。

以下には、基本層序と微地形変化を把握しやすくするため、調査で確認された層序のうち、堆積時期の最も古い層から順に記述する。

【東区】(表 2)

第13層

第 13 層は、にぶい黄橙色~灰黄褐色の礫 (ϕ ~ 7 cm)を 10~50%含むシルト質粘土~粗砂質シルトと、灰黄褐色~暗灰黄色の礫 (ϕ ~ 6 cm)を 30~50%含むシルト質粗砂~シルト質極粗砂などからなる。この第 13 層は、小字「越谷」という開析谷を埋める大阪層群の砂礫や粘土と、丹波帯の岩屑(岩片)や風化土が堆積した堆積物が、土石流や土砂流として流下したことにより堆積した土砂流堆積物¹⁾で、調査地では層理状の構造を持つ。図 6 に土石流・土砂流模式図を掲げ、概要を示す。東区では、越谷と小字「馬ケ背」の尾根との間の開析谷が明確に確認でき、堆積層の切り合いが数多く見られる。枝番は 9 層を確認した。この第 13 層上面を、第 3 遺構面とした。

この第 13 層は、平成 4 年度発掘調査を行った前回調査²⁾ の成果から、縄文時代後期以降の堆積物と考えられる。

なお、第 13 層の下部層については、前回調査の下層調査から、およその層順が明らかとなっている。第 13 層(第 V 層)は無遺物層で層厚は約 0.8m、この下に暗青灰色シルト層(第 VI a 層)が層厚約 0.2m で堆積し、さらにこの下に黒褐色粘土層(第 VI b 層)が層厚約 10 cmで堆積する。さらにこの2 層の縄文時代後期(北白川上層式 1 ・ 2 期)遺物包含層下に、遺物を包含しない暗青緑灰色砂礫層(第 VII 層)が層厚約 0.6 m堆積し、その下に無遺物の黄橙色粘土層(第 VIII 層)に達する。この黄橙色粘土層(第 VIII 層)は、大阪層群の堆積物と考えられる。

第 12 層

第 12 層は、土石流や土砂流の流下後に流れる、後流の流路 ³⁾ の堆積物で、葉理(ラミナ)構造を持つ。東区では確認していない。

表 2. 東区基本層序

地層番号	土 色 ・ 土 質	堆積時期と性格	堆積成因	a=土壌(化)層 b=自然堆積層	備考	遺構面
1-2 1-3	10 YR5/1褐灰 礫($\phi\sim10$ cm)を 40 %含むシルト質細砂~極粗砂 10 YR7/6明黄褐~5Y6/3オリーブ黄 礫($\phi\sim10$ cm)を 30 %含むシルト質細砂~極粗砂 7.5 YR2/1黒褐 砕石($\phi\sim3$ cm)を 50 %含むシルト質細砂 10 YR6/3にぶい黄橙 礫($\phi\sim16$ cm)を $40\sim50$ %含むシルト質細砂	現代/攪乱層 現代/客土造成層 現代/攪乱層 現代/客土造成層	攪乱層 客土層 客土層 客土層			
2-2	2.5Y5/2暗灰黄~7.5GY6/1緑灰 シルト質極細砂 ~細砂 2.5Y4/1黄灰 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質極細砂~細砂 5Y6/1灰 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質細砂	(近世)~現代/水田作土層 (近世)~現代/水田作土層 近世/水田作土層	土壌層 土壌層 土壌層	а	遺物包含 遺物包含 遺物包含	
2-5	10 YR5/3にぶい黄褐 礫 $(\phi \sim 2$ cm $)$ を 10 %含むシルト質極細砂〜細砂 10 YR6/2灰黄褐 礫 $(\phi \sim 5$ cm $)$ を $40\sim 50$ %含むシルト質粗砂 7.5 YR5/2灰褐 礫 $(\phi \sim 3$ cm $)$ を 10 %含むシルト質極細砂〜中砂とシルトプロックの混層	(中世)〜近世/畑作土化層 (中世)〜近世/自然堆積層 (中世)〜近世/畑作土層ヵ	土壌化層 土砂流堆積層 土壌層	b	遺物包含 遺物包含 遺物包含	
	2.5Y7/1灰 礫(φ〜3cm)を10%含むシルト質細砂 10YR5/2灰黄褐 礫(φ〜3cm)を10%含むシルト質中砂とシルトプロックの混層	中世~(近世)/自然堆積層 中世~(近世)/作土化層	土砂流堆積層 土壌化層	b a'	遺物包含、希薄	- ⇒1面
(4~7) 8	未確認 10YR5/1褐灰 礫(φ~6cm)を30~40%含むシルト質粗砂~極粗砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	b	遺物包含	
(9)	未確認					⇒2面
10-2 10-3 10-4 10-5	10 YR6/2灰黄褐 シルト質中砂とシルトプロックの混層 10 YR8/4浅黄橙 シルト質細砂とシルトプロックの混層 10 YR7/3にぶい黄橙 シルト質細砂~中砂とシルトプロックの混層 10 YR5/2灰黄褐 礫(ϕ ~4cm)を 10 %含むシルト質細砂~中砂とシルトプロックの混層 10 YR5/3にぶい黄褐 礫(ϕ ~4cm)を 20 ~30%含むシルト質極粗砂 7.5 YR5/3にぶい褐 礫(ϕ ~1cm)を 10 %含むシルト質粘土	中世/109谷埋立層① 中世/109谷埋立層② 中世/109谷埋立層③ 中世/109谷埋立層④ 中世/109谷埋立層⑤ 中世/109谷埋立層⑥	土壌層 客土層 客土層 客土層 土砂流堆積層 再堆積層	a' a' a' b	遺物包含、13世紀中葉以降 遺物包含 遺物包含 遺物包含 11層の再堆積層ヵ	
	10YR3/2黒褐 礫(φ~6cm)を20~30%含むシルト質中砂~粗砂	中世/作土化層	土壌化層	∄	遺物包含層、b層(11-2層)を 土壌化、13世紀中葉以降	
(11-2)	未確認					- ⇒3面
13-2 13-3 13-4 13-5 13-6 13-7 13-8	10YR5/4にぶい黄褐 礫(φ~4cm)を40%含む中砂質シルト 2.5Y5/2暗灰黄 礫(φ~3cm)を30%含むシルト質極粗砂 10YR5/2灰黄褐 礫(φ~2cm)を10%含む粗砂質シルト 10YR5/3にぶい黄褐 礫(φ~6cm)を30%含むシルト質極粗砂 10YR5/4にぶい黄褐 礫(φ~7cm)を20%含む起砂質シルト 10YR6/2灰黄褐 礫(φ~6cm)を50%含むシルト質粗砂 10YR5/2灰黄褐 礫(φ~1cm)を40%含むシルト質細砂 10YR6/3にぶい黄橙 礫(φ~1cm)を30%含むシルト 10YR6/4にぶい黄橙 礫(φ~5cm)を50%合むシルト質粘土	調文後期以降/自然堆積層 調文後期以降/自然堆積層 調文後期以降/自然堆積層 調文後期以降/自然堆積層 調文後期以降/自然堆積層 調文後期以降/自然堆積層 調文後期以降/自然堆積層 調文後期以降/自然堆積層 調文後期以降/自然堆積層	土砂流堆積層 土砂流堆積層層 土砂流堆積層層 土砂流堆積層層 土砂流堆積層層 土砂流堆積層層 土砂流堆積層層 土砂流堆積層層 土砂流堆積層層	b b b b b		

第11層

第 11-1 層は、黒褐色の礫 ($\phi \sim 6$ cm) を $20 \sim 30\%$ 含むシルト質中砂〜粗砂である。本来は、下層の自然堆積層 (b 層) である第 11-2 層と分離されるべきであるが、極めて似通っていたため分層ができなかった。このため第 11-1 層の層厚は、 $0.5 \sim 0.9$ m の厚さとなっている。第 11-1 層は土壌化層(a' 層)であるが、これに周辺の第 11 層を盛土した可能性もある。

西区では、下層の土壌化層である第 11-1 層から弥生時代後期後半、古墳時代後期、平安時代前期の遺物が混在して出土している。これは前回調査の第 2 遺構面検出遺構や包含層の遺物の年代と同じであることから、前回調査区第 2 遺構面の土砂流堆積物と考えることができる。

第10層

第 10 層は、谷の自然堆積物と、開析谷を人為的に埋める客土層である。枝番は、6 層からなる。第 10-1 層は、東区の南端に堆積した、第 10-2 ~ 4 層の客土層の上面を覆う最上層の土壌層である。第 10-2 ~ 4 層は、主に山土で人為的に埋めた客土層である。第 10-5 層は小規模な土砂流堆積層で、にぶ

い黄褐色の礫 $(\phi \sim 4 \text{ cm})$ を $20 \sim 30\%$ 含むシルト質極粗砂である。第 10-6 層は土壌化層で、第 11-1 層と土色等が似ていることから、谷側に落下した第 11-1 層の再堆積層である可能性がある。この谷を埋める第 10 層上面と第 11 層の上面を、第 2 遺構面とした。

第9層

第9層は、自然堆積層である土砂流堆積物と、これを土壌化した作土層から成る堆積層である。東 区では確認していない。

第8~4層

第8層は、褐灰色の礫 ($\phi \sim 6$ cm)を $30 \sim 40\%$ 含むシルト質粗砂~極粗砂である。西区の舌状地形堆積物とつながる、土砂流の下流域に堆積する洪水流堆積物で、西壁では厚さ $17 \sim 36$ cmの南側傾斜で平たく堆積し、東壁でも厚さ $16 \sim 40$ cmと厚い堆積である。図6 に模式図を掲げる。なお、本報告書では、土石流、土砂流、さらに洪水流(氾濫流)への含有粒子濃度の低下に伴う、堆積物の細粒化・薄層化に代表されるモデル変化を、分析値として数字で示していないので、土砂流と洪水流(氾濫流)については、特に断らない限り土砂流として一括記載する 4)。第8層には、遺物を僅かに含む。

第7(8)~4(8)層は、土砂流堆積物である。東区では確認していない。

第3層

第3層は、灰色の礫 (ϕ ~3 cm)を 10%含むシルト質細砂である。土砂流堆積物(b層)とその土壌 化層 (a'層)である。第2層の床土層的な堆積物である。枝番は2層からなる。この第3-1層(畑作

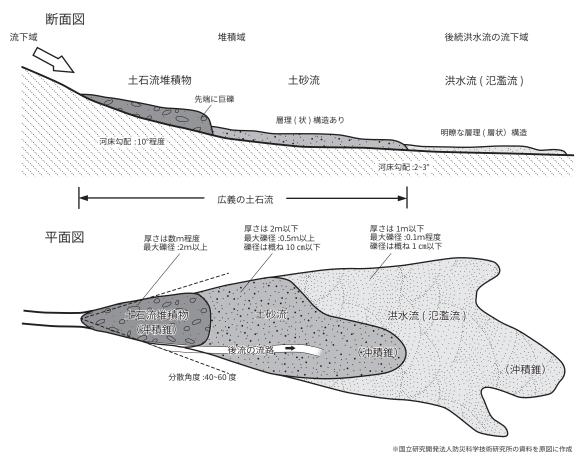


図 6. 土石流・土砂流模式図

土層)の上面を、第1遺構面とした。

第2層

第2層は、暗灰黄色の礫 (ϕ ~3 cm) を 10%含む灰色のシルト質極細砂〜細砂で、土壌層と自然堆物の互層である。第2-1~3層は、水田にかかる堆積層で、第2-4~6層は畑作にかかる堆積層である。 枝番は6層からなる。

第1層

調査地の土地利用は、近年まで水田または畑としての土地利用が顕著であったが、調査時には、客 土層による盛土が厚く覆っていた。枝番は4層からなる。

【西区】(表 3)

第13層

第 13 層は、にぶい黄橙色~灰黄褐色の礫 (ϕ ~ 20 cm) を 40 ~ 50%含むシルト質中砂~粗砂と、褐色~灰黄褐色の礫 (ϕ ~ 5 cm) を 10 ~ 40%含むシルト~シルト質細砂などからなる。この第 13 層は、東区同様に、越谷という谷を埋める、大阪層群の砂礫や粘土と、丹波帯の岩屑(岩片)や風化土が堆積した堆積物が、土石流や土砂流として流下したことにより堆積した土砂流堆積物で、調査地では層理状の構造を持つ。枝番は 18 層を確認した。

この第 13 層は、前回調査の成果から、縄文時代後期以降の堆積物と考えられ、第 13 層の下部層については、東区で記述したとおりである。

第12層

第12層は、土石流や土砂流の流下後に流れる、後流の流路の堆積物で、葉理(ラミナ)構造を持つ。西区の北壁より東壁にかけて、第13層の堆積後に流れた溝1条を検出した。枝番は4層からなる。この第13層上面と第12層上面を、第3遺構面とした。

第11層

第 11-1 層は、黒褐色の礫 ($\phi \sim 6$ cm) を 20 ~ 30 %含むシルト質中砂~粗砂である。第 11-1 層は土壌化層 (a' 層) である。西区では下層の第 11-2 層は、上層の第 11-1 層と分層が可能で、暗灰黄色の礫 ($\phi \sim 6$ cm) を 40 ~ 50 %含むシルト質中砂~粗砂である。第 11-2 層は、土砂流堆積物である。

西区においても、東区同様に上層の土壌化層である第 11-1 層から、弥生時代後期後半、古墳時代後期、平安時代前期から中期の遺物が混在して出土している。

第10層

第 10-1 層は、灰黄褐色のシルト質中砂とシルトブロックの混層である。この第 10-1 層は、土壌層である。第 10-2 層は、浅黄橙色のシルト質細砂とシルトブロックの混層である。第 10-2 層は、山土を多く含んだ客土造成層で、この層中にも遺物を含んでいる。この第 10-2 層の上面で、柱穴などの遺構を複数検出した。この第 10-2 層上面を、第 2 遺構面とした。この第 10 層の枝番は、2 層からなる。

第10-2層に含まれる遺物は、13世紀中葉の遺物であった。

第9層

第9層は、自然堆積層である土砂流堆積物と、これを土壌化した作土層が少なくとも2回以上繰り返される堆積層で、東区と同様な堆積がみられる。枝番は4層からなる。

表 3. 西区基本層序

土層	土 色 ・ 土 質	堆積時期と性格	堆積成因	a=土壌(化)層	備考	遺構面
番号				b=自然堆積層		
1-1	10YR5/1褐灰 礫(φ~10cm)を40%含むシルト質細砂~極粗砂	現代/攪乱層	攪乱層			
	10YR7/6明黄褐~5Y6/3オリーブ黄 礫(φ~10cm)を30%含むシルト質細砂~極粗砂	現代/客土造成層	客土層			
	7.5YR2/1黒褐 砕石(φ~3cm)を50%含むシルト質細砂	現代/攪乱層	客土層			
	10YR6/3にぶい黄橙 礫(め~12cm)を40~50%含むシルト質細砂	現代/客土造成層	客土層			
			•			
	7.5Y4/1灰 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質極細砂〜細砂	令和2年度立会/埋戻層	攪乱層			
1-6	5Y5/1灰 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質細砂〜粗砂	令和3年度確認/埋戻層	攪乱層			
0.1	0 FVE (000 CT + 10VE (1 C - 4 E a + 1864 L) 98/ (1 - 1) 4 10 0/ (4 L) 4 186 C (000 L)	05III) 1875 / LEP/E LEP	1140		1944 F1 A	1
	2.5Y5/2暗灰黄~10Y5/1灰 多量の有機物と礫(φ~1cm)を10%含むシルト質極細砂~細砂	(近世)~現代/水田作土層	土壌層	a	遺物包含	
	2.5Y4/1黄灰~N5/1灰 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質極細砂~細砂	(近世)~現代/水田作土層	土壌層	а	遺物包含	
	5Y6/1灰 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質細砂	近世~/水田作土層	土壌層	а	遺物包含	
2-4	2.5Y7/3浅黄 礫(φ∼1cm)を10%含むシルト質細砂	近世~/作土層	土壌層	а	遺物包含	
2-5	2.5 Y 6 / 2 灰黄 $ Ref{\phi} \sim 1$ cm)を 10 %含むシルト質細砂	近世~/自然堆積層		b		
						-
2-6	10Y5/1灰 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質細砂	(中世)~近世/畑作土層	土壌層	а	遺物包含	
2-7	2.5Y7/2灰黄 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質細砂	(中世)~近世/畑作土化層	土壌化層	a'	遺物包含	
2-8	10YR7/1にぶい黄橙 礫($\phi\sim3$ cm)を 10% 含むシルト質細砂	(中世)~近世/自然堆積層		b		
2-9	$5Y6/1$ 灰 磔 $(\phi \sim 3cm)$ を 10% 含むシルト質細砂	(中世)~近世/畑作土層	土壌層	а	遺物包含	
2-10	10YR6/2灰黄褐 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質細砂	(中世)~近世/自然堆積層		b		
				: 	:	⇒1面
3	2.5Y7/4浅黄 礫(φ∼3cm)を10%含むシルト質極細砂〜細砂	(中世)~近世/作土化層・床土層	土壌化層	a'	遺物包含	
						1
4(0)						
	10YR4/2灰黄褐 礫(φ~4cm)を30~40%含むシルト質細砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	Ь	舌状地形堆積物	
5(8)	10YR6/3にぶい黄橙 礫(φ~6cm)を20%含むシルト質細砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	b	舌状地形堆積物	
6(8)	10YR5/3にぶい黄褐 亜角礫27cmと礫(φ~10cm)を30~40%含むシルト質細砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	b	遺物包含、舌状地形堆積物	
7(8)	10YR6/2灰黄褐 礫(φ~1cm)を40%含むシルト質極細砂~細砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	b	遺物包含、舌状地形堆積物	
8(8)	10YR4/2灰黄褐 礫(φ~3cm)を30~40%含むシルト質細砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	b	遺物包含、舌状地形堆積物	
		-				
0.1	… 7.5YR6/1褐灰 礫(φ∼6cm)を40∼50%含むシルト質細砂~中砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	ь		
				:	1 12/2 // ,	
	7.5YR5/1褐灰 礫(φ~6cm)を20%含むシルト質極細砂〜細砂	中世/土壌化層	土壌化層	a'	土壌化	
	7.5Y8/2灰白 礫(φ~1cm)を10%含むシルト質細砂~中砂	中世/自然堆積層	1 = 1 = 1 = 1 = 1	b		
9-4	10YR6/1褐灰 礫(φ~6cm)を40%含むシルト質細砂~中砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
-						
10-1	10YR6/2灰黄褐 シルト質中砂とシルトブロックの混層	中世/作土層	土壌層	а	遺物包含、13世紀中葉以降	
					1	⇒2面
10-2	10YR8/4浅黄橙 シルト質細砂とシルトプロックの混層	中世/客土造成層	客土層	b	遺物包含、13世紀中葉以降	
-						1
11-1	10YR3/2黒褐 礫(φ~6cm)を20~30%含むシルト質中砂~粗砂	中世/土壌化層	土壌化層	a'	遺物包含、b層を土壌化	
11-2	2.5Y5/2暗灰黄 礫(φ~6cm)を40~50%含むシルト質中砂~粗砂	中世/自然堆積層	土砂流堆積層	ь	遺物包含	
				ļ		⇒3面
12-1	2.5Y5/3黄褐 礫(φ~5cm)を40%含むシルト質粗砂~極粗砂	306後流の流路堆積層①	水成層	b		
	2.5Y5/2暗灰黄 礫(φ~14cm)を50%含むシルト質細砂~中砂	306後流の流路堆積層②	水成層	:	ラミナ	
	10YR6/4にぶい黄橙 礫(φ~12cm)を50%含むシルト混ざり細砂~中砂	306後流の流路堆積層③	水成層	Ē	ラミナ	
	10YR4/1褐灰 礫(φ~20cm)を50%含むシルト混ざり粗砂~極粗砂	306後流の流路堆積層④	水成層	b	ラミナ	
17-4	- 2011年/12 Felix	500 区/パッノ/ルロ4性恒/管性/	小水淵	U	/ _ /	_
12 1	10VP5/3に さい苦想	細寸後期以除。. /白針拼往屋	+加法##8			
	10YR5/3にぶい黄褐 礫(φ~1cm)を40%含むシルト質中砂~粗砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
	10YR4/2褐 礫(φ~1cm)を10%含むシルト	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	Ь		
	10YR4/2灰黄褐 礫(φ~4cm)を40%含むシルト質細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
	10YR5/2灰黄褐 礫(φ~3cm)を40~50%含むシルト質中砂~粗砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
	2.5YR5/4黄褐 礫(φ~3cm)を20%含むシルト質中砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
	10Y4/2灰黄褐 礫(φ~5cm)を30%含むシルト質細砂~中砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
	2.5Y5/3灰黄褐 礫(φ~13cm)を40~50%含むシルト質中砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
13-8	10 YR4/2灰黄褐 $礫(\phi\sim2$ cm)を 10 %含むシルト質細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
13-9	10 YR5/2灰黄褐 礫($\phi\sim13$ cm)を $40\sim50$ %含むシルト質中砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
13-10	10YR5/3にぶい黄褐 礫(φ∼3cm)を10∼20%含むシルト質細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
13-11	10 YR 5 / 4 にぶい黄褐 磔 $(\phi\sim2$ cm $)を10$ %含むシルト質極細砂〜細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
13-12	10 YR 4 / 3 にぶい黄橙 礫 $(\phi\sim2$ cm $)を20$ %含むシルト質極細砂〜細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
13-13	10YR4/2灰黄褐 礫(φ~4cm)を40%含むシルト質細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
13-14	10YR5/4にぶい黄褐 礫(φ~3cm)を10%含むシルト質極細砂~細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
13-15	10YR5/2灰黄褐 礫(φ~1cm)を10%含むシルト質極細砂~細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
	10YR5/3にぶい黄褐 礫(φ~20cm)を40~50%含むシルト質中砂~粗砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	b		
	2.5YR6/3にぶい黄 礫(φ~1cm)を30~40%含むシルト質細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	ь		
	10YR6/3にぶい黄橙 礫(φ~1cm)を10%含むシルト質細砂	縄文後期以降~/自然堆積層	土砂流堆積層	ь		
10 10	The state of the s	-02 NAVAT / HWALDON	エッ //07年19代目			
		£	<u> </u>	<u> </u>	<u>:</u>	<u> </u>

第8~4層

第8~4層は、礫を多く含むシルト質極細砂~細砂の5層からなり、舌状地形堆積物を形作る土砂流堆積物 $^{5)}$ である。これらの層は、土砂流堆積物の層理であることから、第8層として一括して本文中では表記する。断面図の記載は、第8~4層を8(8)~4(8)とした。

第8(8) 層は、礫 (ϕ ~3 cm) を 30 ~ 40%含むシルト質細砂で、西壁で遺物を多く包含する舌状地形 堆積物の最下層の堆積物である。

第 7(8) 層は、礫 $(\phi \sim 1 \text{ cm})$ を 40%含むシルト質極細砂〜細砂で、東壁で遺物を僅かに含む舌状地形堆積物の最下層の堆積物である。

第 6(8) 層は、亜角礫 27 cmが堆積層上部に立つ、典型的な土砂流堆積物構造である。主な堆積物は礫 $(\phi \sim 10 \text{ cm})$ を $30 \sim 40\%$ 含むシルト質細砂で、層の上部に大型の礫を多く含み、遺物も僅かに含む東壁の堆積物である。

第 5(8) 層は、礫 $(\phi \sim 6 \text{ cm})$ を 20%含むシルト質細砂で、東壁で下層第 6(8) 層と上層第 7(8) 層の間に、部分的に挟在して堆積する。

第 4(8) 層は、礫 (ϕ ~4 cm) を 30 ~ 40%含むシルト質細砂で、東壁で残存する舌状地形堆積物の最上層の堆積物である。

この第 $8(8) \sim 4(8)$ 層は、発生域の方向(西南西方向からの堆積)を示唆する層理(状)構造をもち、
礫径は概ね 10 cm以下で、比較的大きな礫が層の上部で立っている状態が確認できた。土砂流堆積物の
先端は、流下域の勾配が緩くなった本調査付近で沖積錘を形成し、舌状の形をした堆積物として残った
ものである。残存する土砂流堆積物による沖積錘(土石流堆)の大きさは、西区の東壁で基底幅約 10 m、厚さ $0.7 \sim 0.94$ m、西壁で基底幅約 11 m、厚さ $0.3 \sim 0.85$ mである。

また、第 $8(8) \sim 6(8)$ 層は遺物を包含するが、西側ほど多く含み、東側では僅かしかみられなかった。 包含する遺物は、いずれも前回調査区の遺物相と同じものである。

第3層

第3層は、浅黄色の礫 $(\phi \sim 3 \text{ cm})$ を 10%含むシルト質極細砂〜細砂である。土壌化層 (a') 層)で、第2層の床土層となっている。

第2層

第1層

調査地の土地利用は、近年まで水田や畑としての土地利用が顕著であったが、調査時点では客土層による盛土が厚く覆っていた。枝番は6層からなる。

第2節 調査地の地形と堆積状況

本町の地勢は、大阪層群下部及び最下部が見られる北-北東側からの緩い主傾斜と、本山寺コンプレックスの山麓堆積からなる西-北西側の山麓からの急な傾斜よりなる。堆積物は、北-北東側の礫・砂・シルト及び粘土が堆積する後背湿地・沖積地性堆積物と、西-北西側山麓部の礫や砂が堆積する扇状地性堆積物からなる。越谷遺跡は、この内の京都西山断層帯-神内断層西側の、斜面裾部に上方から徐々に移動してきた岩屑や風化土が堆積して形成された緩斜面である麓屑面を、洗刻した開析谷が埋没した後に作られた遺跡である。谷の下流部では、土砂流(洪水流)により扇状地を形成し、さらに裾部は浸食を受け段丘化している。越谷遺跡東側に隣接する尾山遺跡の微高地は、沖積地上に堆積した扇状地性の堆積物の上に形成された居住域である。

今回の調査地の地形を、越谷遺跡の平成 4 年度に発掘調査を実施した前回調査 6 と令和 2 年度に発掘調査を実施した尾山遺跡 $^{7)}$ の柱状図を用いて、東西柱状図を図 7-1 の A-A' に、南北柱状図を図 7-1 の B-B' と図 7-2 の C-C' に示した。柱状図の延長距離は、東西幅約 290 m、南北幅約 270 mである。

この内、尾山遺跡の鍵層となる中世(13世紀中葉以降)の第 3-1a 層上面、弥生時代後期~古墳時代前期の第 4-1a 層上面、弥生時代中期前葉の第 5a 層上面、大阪層群の黄橙色粘土層(前回調査第VIII層 =地山層)上面の変化を中心に見てみる。

東西柱状図を作成した地点は、名神高速道路拡幅工事第2地区の南西端から、JR 東海道本線に近い 尾山遺跡9区東端までの、図7-1の東西柱状図A-A'の8地点で、直線距離にして約290m分である。各地点は、西からNo.1(前回調査2区南西端)-No.2(前回調査2区深掘Eトレンチ)-No.3(今回調査西区)-No.4(今回調査東区)-No.5(尾山遺跡12区)-No.6(尾山遺跡7区南西端)-No.7(尾山遺跡7区東端)-No.8(尾山遺跡9区東端)で、鍵層のおよその高さ(標高)を以下に示す。なお、数値を()書きするものは、欠層による復元値である。

No.1~4 は谷の中に堆積した堆積物である。No.1 は谷の南側、小字「バンド山」尾根北側の斜面に位置しており、堆積物は表土上面から 0.7 mで地山層(第四層)に達する。No.2 は谷の中央部よりも僅かに南側斜面に位置する深掘 E トレンチで、土砂流堆積物に上下に挟まれた中間層から、縄文時代後期の遺物が出土している。No.3 は今回調査の西区、No.4 は今回調査の東区で、いずれも表土上面から 3 m下まで掘削したが、地山層は検出していない。また、No.3・4 の第 13 層土砂流堆積物は、層位や堆積層の高さ等から、前回調査の第 V 層に相当する層である可能性が高い。

 $No.5 \sim 8$ は、尾山遺跡の沖積地の堆積物である。このため、 $No.1 \sim 4$ と $No.5 \sim 8$ の堆積層が直接繋がるものはなく、基本的には $No.3 \cdot 4$ の堆積物の上に、 $No.5 \sim 8$ の堆積物がのるものと考えられる。

第5a層の各標高は、東側の沖積地No.5~8で確認でき、〔西〕未堆積-未堆積-未堆積-未堆積-

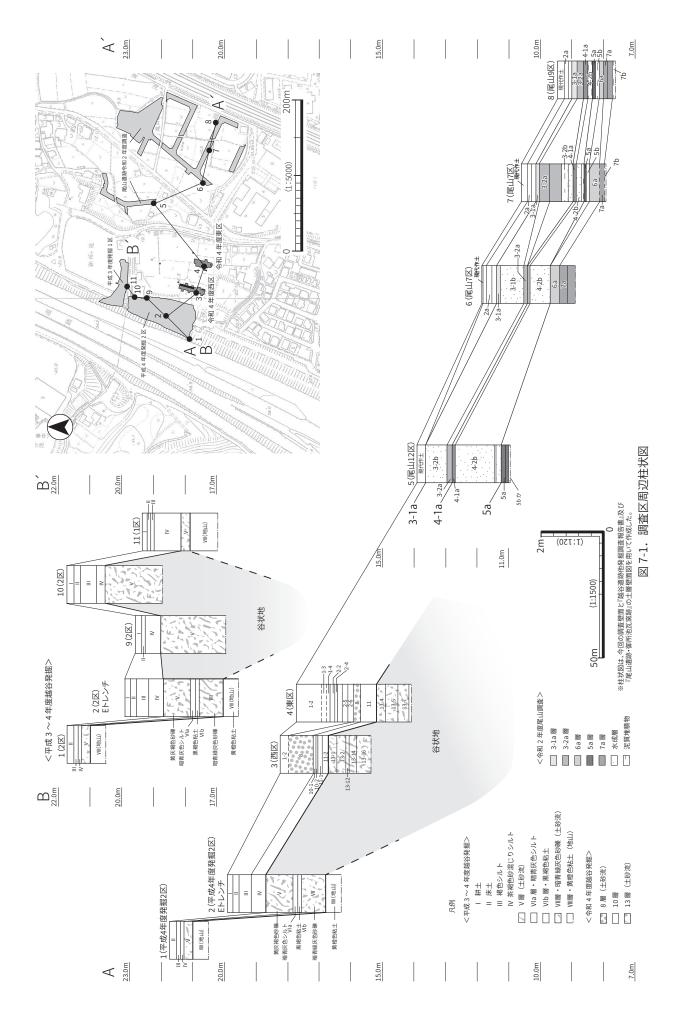


図7-2.調査区周辺柱状図

-23-

11.26m - (9.7m) - 8.63m - 8.36m 〔東〕である。No.6 \sim 8 は沖積地上の堆積で、No.5 は段丘裾部の堆積であるが、第 5a 層が段丘裾部にまで堆積しているのを確認できる。

第 4-1a 層の各標高は、東側の沖積地 No.5 \sim 8 で確認でき、〔西〕未堆積-未堆積-未堆積-未堆積-12.81m-10.4m-8.97m-8.63m 〔東〕である。堆積状況は、第 5a 層と同じである。

第 3-1a 層の各標高は、東側の沖積地 No.5 \sim 8 で確認でき、〔西〕未堆積-未堆積-未堆積-未堆積-13.7m - 11.41m - 10.1m - 9.03m 〔東〕である。堆積状況は、第 5a 層・第 4-1a 層と同じである。

これらのことから、谷を形作る地山層(第 阿層)の位置は、今回調査の調査区周辺においては、その傾斜角度から No.2(前回調査 2 区深掘 E トレンチ)よりもさらに深い、標高 7 m前後に存在するものと推測された。

次に南北柱状図を図 $7-1\cdot 2$ より、B-B' と C-C' の 2 列について堆積状況を見てみる。

南北柱状図 B - B'を作成した地点は、名神高速道路拡幅工事第 2 地区の南西端から、御所ヶ池南側の前回調査 1 区南端までの、図 7-1 の 5 地点で、直線距離にして約 110 m分である。各地点は、西から No.1(前回調査 2 区南西端) - No.2(前回調査 2 区深掘 E トレンチ) - No.9(前回調査 2 区東端) - No.10(前回調査 2 区北東端) - No.11(前回調査 1 区南端)で、鍵層のおよその高さ(標高)を以下に示す。

この内、No.1・2 は東西柱状図にも用いた地点で、先述した。No.9・10 は、中層から下層に土砂流 堆積物(第V 層)があるが、地山層の把握までは行われていない地点であるため、その深さは明らかで ない。No.11 は御所ヶ池南側の前回調査 1 区南端で、ここでは地山層が表土下 1.6 mで検出されている。地山層の標高は、〔南〕21.0m – 16.8m –未確認–未確認–17.87m〔北〕である。

この南北柱状図 B – B'の位置は、開析谷の谷口部にあって、その幅が約 110~mであることが明らかにできたことは重要である。残念ながら、谷の深さについては明らかにできていない。

南北柱状図 C-C'を作成した地点は、沖積地内の令和 2 年度調査尾山遺跡の最も段丘側に近い地点から選定し、尾山遺跡 10 区の南西端から、4 区北端までの、図 7-2 の 8 地点で、直線距離にして約 270 m分である。各地点は、南から No.12(尾山遺跡 10 区南西端) - No.6(尾山遺跡 7 区南西端) - No.13(尾山遺跡 7 区東端) - No.14(尾山遺跡 7 区中央) - No.15(尾山遺跡 6 区西端) - No.16(尾山遺跡 3 区西端) - No.17(尾山遺跡 3 区中央) - No.18(尾山遺跡 4 区北端)で、鍵層のおよその高さ(標高)を以下に示す。

第 5a 層の各標高は、〔西〕 8.5m - (9.66m) - (10.18m) - 10.47m - 9.6m - 8.77m - 7.78m - 8.1m 〔東〕 である。 No.2 \sim 6 の南側にややよった高さ 2.4m余りの高まりが、確認できる。

第 4-1a 層の各標高は、〔西〕 9.12m - (10.28m) - 10.33m - 10.87m - 11.43m - (10.6m) - 8.84m - 9.13m 〔東〕 である。No.6 \sim 16 の北側にややよった高さ 2.3 m余りの高まりが、確認できる。

第 3-1a 層 の 各 標 高 は、〔 西 〕 10.38 m - 11.36m - 11.38m - (11.52m) - (11.9m) - 10.78m - (9.6m) - 9.41m〔東〕である。No.12 の南側にも堆積が及び始めており、高さは 2.5m 余りと落差がさらに大きくなっている。

この南北柱状図 C-C' の位置は、B-B' の開析谷の谷口部から、東側の沖積地に出て堆積が広がった地点で、大きく段を作る高まり No.6 から No.16 までの幅約 170 mが、谷のおよその土砂流堆積物の幅であると推測できる。地山層を確認していないため、谷の層厚を直接に知ることはできないが、今後ボーリング調査資料等からこれらを確認することは可能であろう。

<註・引用文献>

- 1) 増田富士雄「神戸市兵庫区祇園遺跡で観察された土石流と土砂流堆積物」『祇園遺跡第 17・18 次発掘調査報告書』神戸市教育委員会、94-101p、2016 年
 - 増田富士雄『ダイナミック地層学』近未来社、2019年
- 2) 大塚 隆・川端博明ほか『越谷遺跡他発掘調査報告書-伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群-』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2集、名神高速道路内遺跡調査会、1997年
- 3) 土石流や土砂流の流下後に、残った沢水が川状に流れる流路をいう。
- 4) 土石流と河川流(洪水流・氾濫流)、その中間的な土砂流("土石流様")も存在するが、その明確な分類は、流体中の懸濁粒子の濃度と堆積物の特徴との対応が必要であるが、詳細な分析が行えないので「土砂流」として一括表記する。
- 5) 前掲1)
- 6) 前掲 2)
- 7) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第43集・(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第316集、2022年

辻 広志「尾山遺跡の時期別消長」『島本町文化財調査報告書-尾山遺跡発掘調査報告書』島本町文化財調査報告書第 48 集、 85-87p、2023 年

第5章 調查成果

調査成果を記述する前に、本書の遺物の年代観や型式については、主に下記の文献及び凡例に示した参考文献により記述した。

【土師器皿・椀】平尾政幸「土師器再考」『史洛 研究紀要』第12号、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2019年 ※以下、上記文献の編年を「平尾編年」という。各段階を図8に示す。

【瓦器椀】 佐藤亜聖「畿内産瓦器椀」『新版 概説 中世土器・陶磁器』2022 年

【貿易陶磁器】 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『新版 概説 中世土器・陶磁器』2022 年

ここでは、図9の調査地詳細図に位置する、東区と西区の各遺構面検出の遺構や出土遺物について概要を報告し、調査区を縦覧した総括的な内容は、第7章総括において遺構変遷として記述することにする。

第1節 東区の各遺構面の遺構と遺物

東区 (図 9 ~ 21)

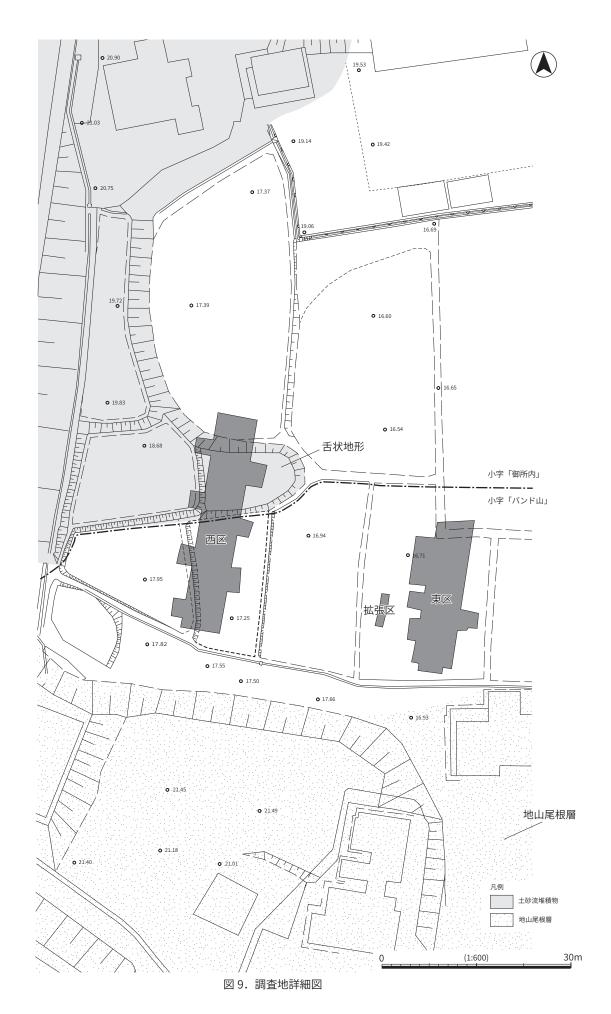
東区では、3面の遺構面調査と深掘り調査を実施した。第1遺構面は第3-1層上面で、耕作溝14条、耕作穴18基、耕作穴よりも浅い窪15基、土坑1基を検出した。第2遺構面は第10層・第11層上面で、溝1条、耕作穴2基、土坑2基と、谷埋立地1か所等を検出した。第3遺構面は第13層上面で、溝1条、耕作穴2基、窪1基、土坑1基、谷状地1か所等を検出した。また、下層調査のため、調査区の南側谷部を中心に深掘り調査を実施した。

なお、図 15 の 001 軒丸瓦は、現地調査開始時に表採されたものである。復元される瓦当径は約 15 cmで、瓦当厚は 3 cmである。文様は複弁 8 葉蓮華文で、複弁内を棒状の 4 子葉に表し、蓮弁は互いに接し間弁を持たず、弁中央の凸線もなく、子葉を輪郭線で囲む。突出した中房に 1 + 8 の蓮子を配し、中房縁部に圏線があり子葉・輪郭線が連結する。外区には界線、珠文は残存 25 (推定 56)がある。周縁は素文直立縁とする。瓦当裏面溝付丸瓦挿入成形で、笵は B 型である。瓦当が厚く、瓦当側面・裏面共にヨコナデで平坦、文様の彫りは浅く凸線で表し、焼成は黄灰色で軟質である。周辺の調査では初見の軒丸瓦で、時期は平安時代と考えられる。

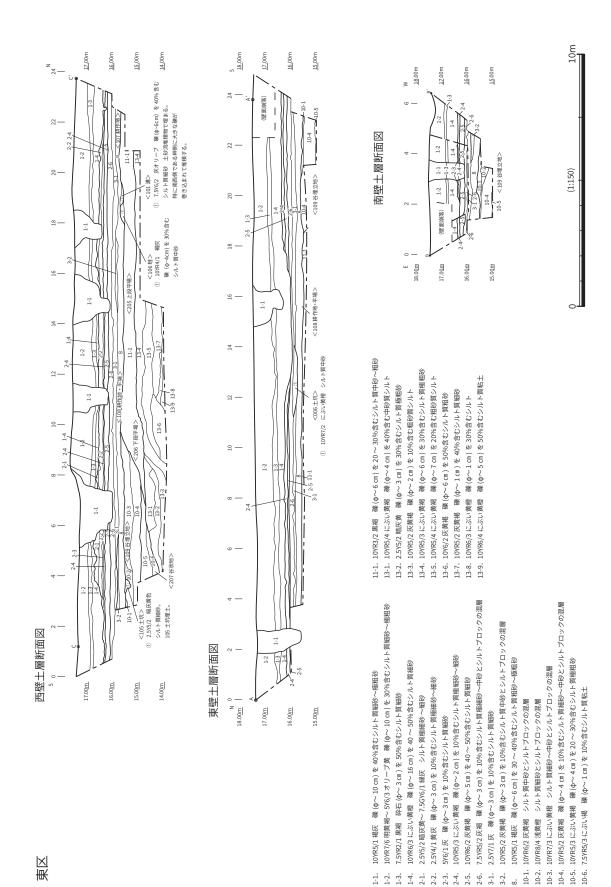
上層の包含層である第 2-4・5 層からは、図 15 の 002 ~ 004 土師器皿の他に、弥生時代後期後半の壺・甕、長岡京期~平安時代前期の須恵器蓋・壺、鎌倉時代の土師器皿・瓦器椀、時期不明の瓦・鞴・鉄製釘等の実測できなかった小片が出土している。比較的大きな破片である 3 点の土師器皿の時期は、002 が 6C・7A 段階、003・004 が 6C 段階で、13 世紀中葉~後葉の遺物と考えられる。

,	150 1	go e	,0 ,	9 OA	510	,00 o	30 o	60 0	, og	1020	, ⁰⁵⁰	080	170	, wo	,10	200	230	260 <	290 3	0 3	550 -38	نه, ه	20 20	O , 270	,500 .	,530 .	560	300 1	o20 76	50 76	380 -11	,0 ,1	no 170.	, es, os
段階区分と 略年代	Α	В	С	Α	В	С	Α	В	С	А	В	С	А	В	Α	В	С	Α	В	С	Α	В	Α	ВС	А	В	С	Α	В	С	Α	В	АВ	АВ
		1		2				3		4		5			6		7			8		9		10				11		12		13	14	
			I期					Ⅱ期						III期							IV期				V期									
時代区分	奈良時代	·								鎌倉時代					北朝		室町時代				安土・树山	:	江戸時代											

図8. 土師器段階区分と略年代(平尾2019)



-27-



黑区

図 10. 東区壁面図

1-1. 1-2. 1-3. 1-4. 2-2. 2-4. 2-5. 3-3.1.

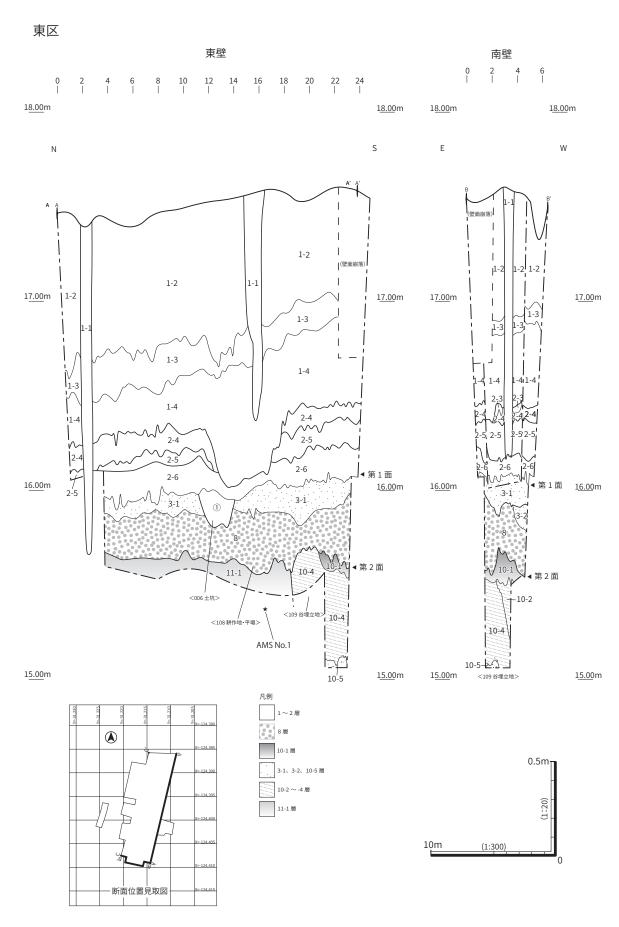


図 11. 東区 東壁面・南壁面縦横変倍図

東区

1-4.

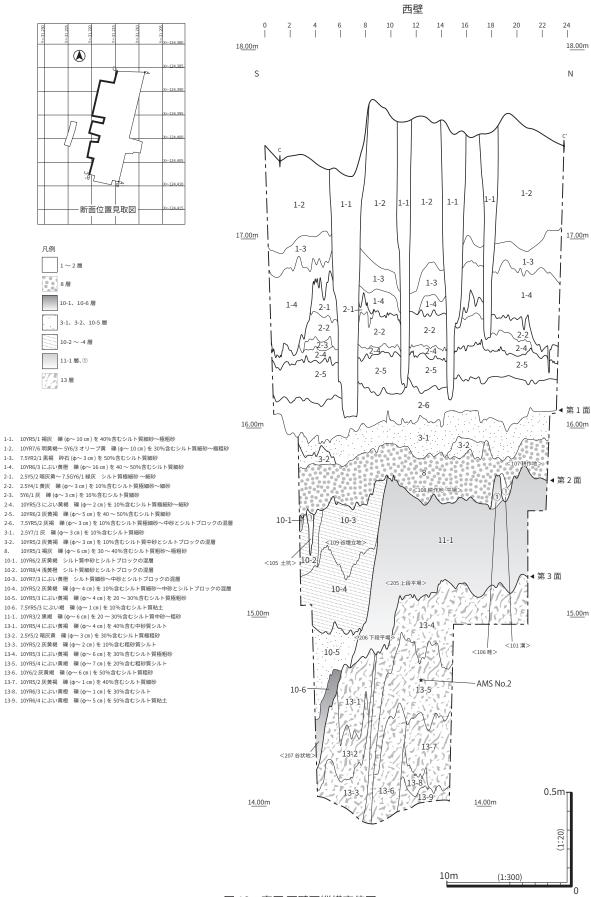
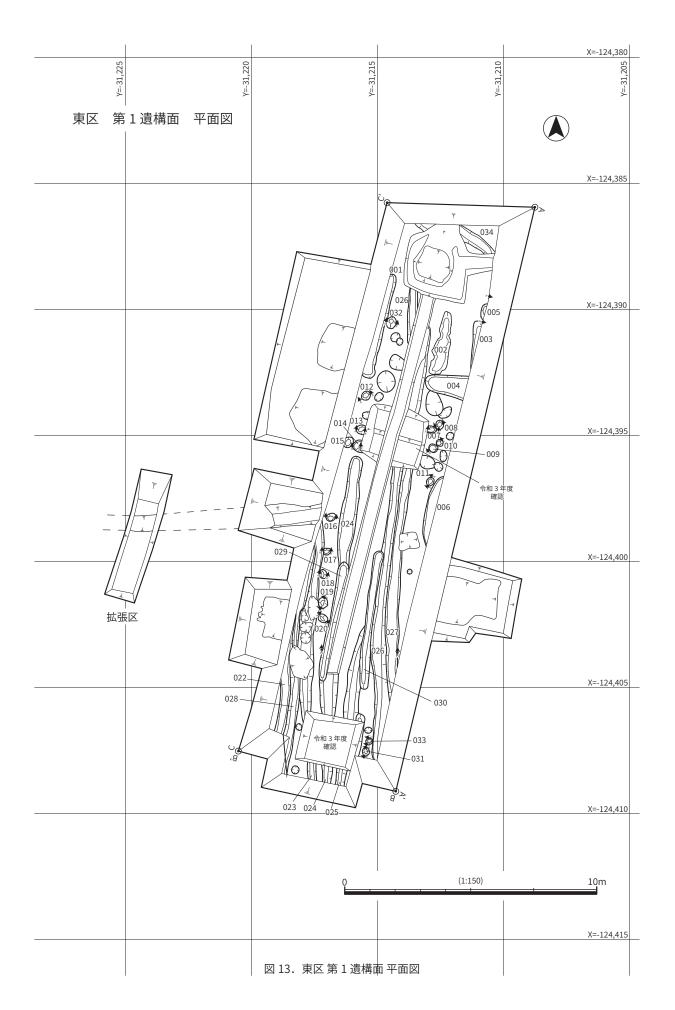


図 12. 東区 西壁面縦横変倍図



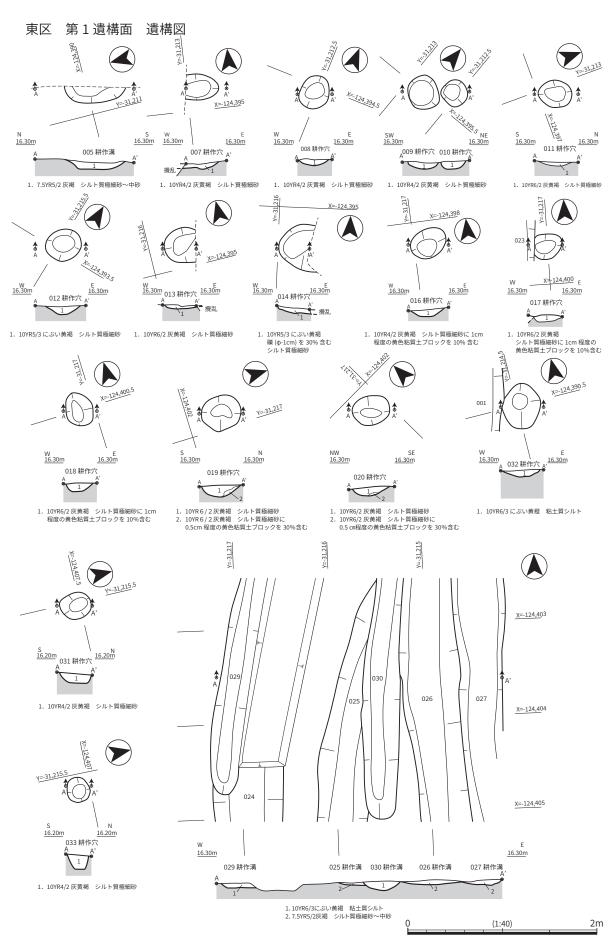


図 14. 東区第1遺構面遺構図

[第1遺構面]

第1遺構面(図13・14)は、水田や畑の6層の堆積が重なる作土を除去した、第3-1層上に検出した、第3-1層を上面とする遺構面である。遺構面全体に、耕作溝や耕作穴等がみられた。

なお、第 1 遺構面の包含層である第 2-1 \sim 6 層からは、図 15 の 13 世紀中葉 \sim 後葉の 6C・7A 段階の $006\sim010$ 土師器皿、16 世紀末 \sim 17 世紀前半の 11A・B 段階の 005 土師器皿、長岡京期 \sim 平安時代前期の 011 土師器丸底甕、12 世紀中葉 \sim 後半の龍泉窯系 D 期の 012 青磁櫛目文皿、16 世紀末以降の $013\sim015\cdot017$ 平瓦や $016\cdot018$ 丸瓦、時期不明の 019 鉄製釘等が出土した。

 $001 \sim 005 \cdot 022 \sim 030 \cdot 034$ 耕作溝(図 $10 \sim 15$ 、写真図版 $2 \sim 5$)

東区の第2-6層(a層)を畑作土とする耕作溝で、第3-1層(b層)上面で検出した。

耕作溝の方向は、主に南北方向 N-5 ~ 8°-E であるが、004 耕作溝については直交する東西方向で、034 耕作溝は斜め方向の溝である。溝の切り合いと埋土の違いから 2 時期が想定され、001・022 ~ 027 耕作溝の溝群から、028 ~ 030 耕作溝の僅かに東に N-8 ~ 12°-E 振る溝群に変わる。また、東西溝である 004 耕作溝の北側にも南北方向の 002・003 耕作溝の溝群がみられる。これらから東区の土地区画は、南北に長い 027 耕作溝を境として、西側の南北に長い溝群の区画と、東西溝 004 耕作溝北側の南北に短い溝群の区画、004 耕作溝南側の耕作溝が確認できない区画の、3 区画に分けて土地利用されていた可能性がある。

耕作溝の規模及び形状は、検出した最も長いものが 026 耕作溝の延長約 18.8 mで、溝の上幅は 0.3 $\sim 1 \, \mathrm{m}$ 、深さは $2 \sim 10 \, \mathrm{cm}$ 、断面形状は浅い皿状である。

埋土は、第 2-6 層が灰褐色のシルト質極細砂~中砂で、新しい 028 \sim 030 耕作溝の一群がにぶい黄褐色の粘土質シルトである。

なお、004 耕作溝から、図 15 の 020 平瓦が 1 点出土している。この瓦の表面には、粘土塊(タタラ)を針金の張った弓で瓦一枚分の厚さに切断することをコビキというが、このコビキ方法で瓦に残る平行条の痕跡を「コビキ B」、斜め平行条の痕跡を「コビキ AB」 10 、それ以前の糸引きによる弧状の痕跡を「コビキ A」という。005 平瓦には凸凹両面に「コビキ AB」が残り、凸面にはコビキの上に縦縄目叩き痕が残る。平行条や斜め平行条の痕跡を残す「コビキ B」や「コビキ AB」の使用は、地域により使用開始時期が異なるが、一般的には 16 世紀末頃には始まっていたと考えられている 20 。

 $007 \sim 020 \cdot 031 \sim 033$ 耕作穴・窪(図 $10 \sim 14$ 、写真図版 $2 \sim 5$)

東区の耕作溝の間にみられる、第 2-6 層(a 層)を作土とする耕作に伴う耕作穴と、耕作穴の浅い痕跡程度のものを窪とするもので、第 3-1 層(b 層)上面で検出した。これらは、耕作溝間に細長く存在して、前後の間隔は曖昧ではあるが、各耕作穴が直線的に並ぶなど、何らかの作付けや植栽に伴う穴の痕跡と考える。

東区南側には南北溝である 023 耕作溝と 024 耕作溝の幅 $0.5 \sim 0.8$ mの間に、南北に並ぶ $016 \sim 020$ 耕作穴がある。南北溝である 025 耕作溝と 026 耕作溝の幅 $0.3 \sim 0.6$ mの間にも、南北に並ぶ $031 \cdot 033$ 耕作穴と窪 1 基がある。北側には南北溝である 001 耕作溝と 024 耕作溝の約 3.1 mの間に、南北に並ぶ $012 \sim 015$ 耕作穴と窪 1 基が並ぶ。 001 耕作溝と 026 耕作溝の幅 $0.6 \sim 1$ mの間には、南北 方向にランダムに並ぶ 032 耕作穴と窪 5 基がみられる。さらに、北東側の東西溝である 004 耕作溝の 南側、南北溝である 027 耕作溝の東側に、 $007 \cdot 009 \cdot 011$ 耕作穴、 $008 \cdot 010$ 耕作穴・窪 1 基、窪 2 基で、それぞれが南側に延長する、南北方向に接して並走する 3 列が想定される。

耕作穴や窪の規模及び形状は、検出した最も長い並びは $016\sim020$ 耕作穴の延長約 $4\,\mathrm{m}$ で、耕作穴の形状は一辺が $0.2\sim0.66\,\mathrm{m}$ 、深さ $5\sim16\,\mathrm{cm}$ で、窪の形状は一辺が $10\,\mathrm{cm}\sim0.88\,\mathrm{m}$ 、深さ $4\,\mathrm{cm}$ 以下で、いずれも平面が円形から楕円形、断面形状は浅い皿状である。出土遺物はなかった。

[第2遺構面]

第2遺構面(図16・17)は、厚く被った第8層土砂流堆積物の下に検出した、第10層・第11層の上面を遺構面とする。東区の北側に107耕作地があり、106 畦畔の東側に101溝、102土坑、103・104耕作穴がみられる。中央には108耕作地・平場とした、南側の谷と北側の耕作地の間に平場がある。南側には南側に広がる谷を人為的に埋めた109谷埋立地があり、この上にも105土坑やこの第2遺構面全体を覆っていたと考えられる第10-1層(a層)土壌層が一部残存している。

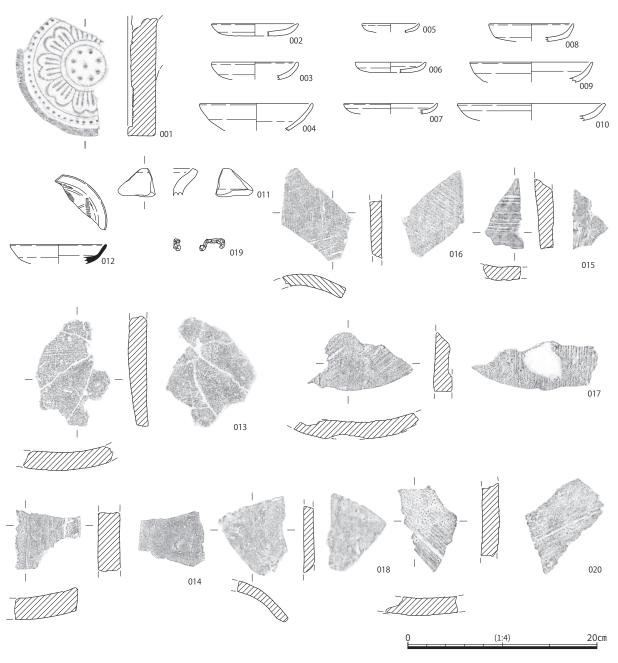


図 15. 東区 第 1 遺構面 包含層及び遺構出土遺物

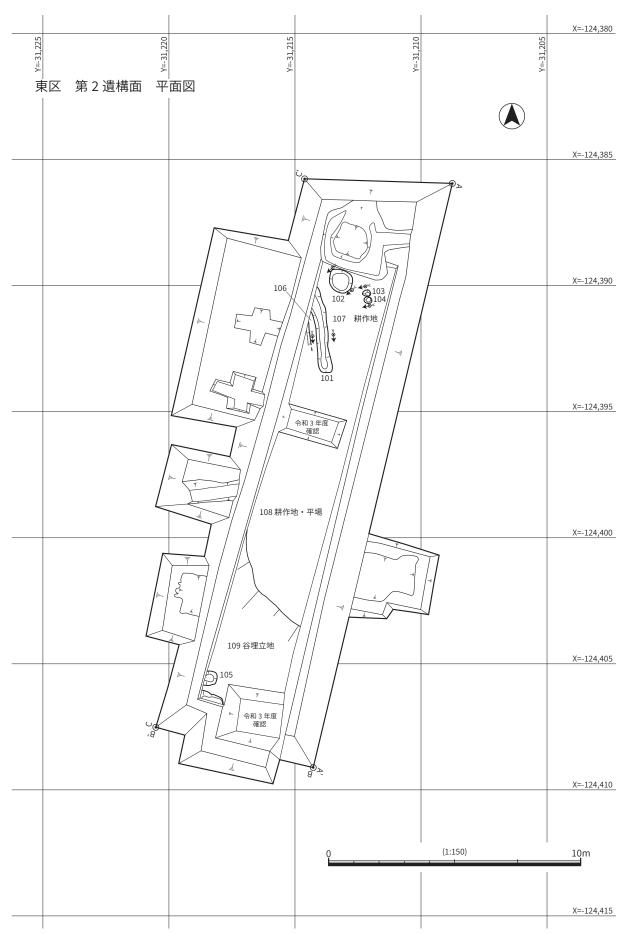


図 16. 東区第2遺構面平面図

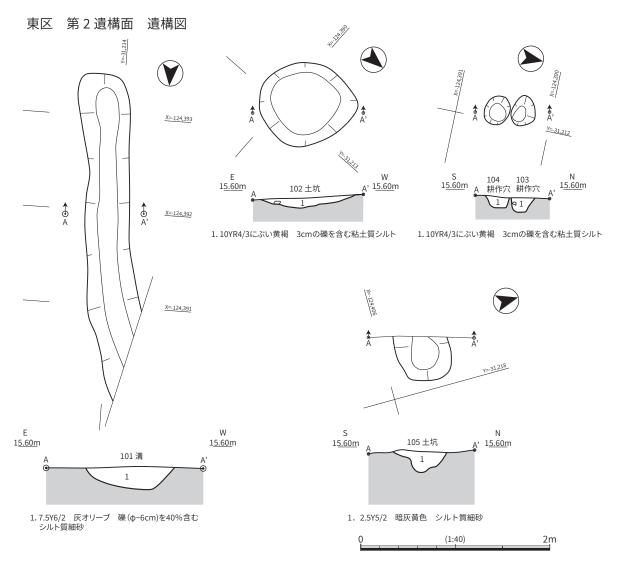


図 17. 東区第2遺構面遺構図

101 溝(図 $10 \sim 12 \cdot 16 \cdot 17$ 、写真図版 $6 \sim 9$)

東区北側の 107 耕作地の西壁際で検出した、南北方向 N-9°-W の用水路と考えられる溝で、西側に 106 畦を伴い、北側延長は調査区外に延びる。検出できた規模は、延長約 2.9 m、幅は $0.44 \sim 0.63$ m、深さ $7 \sim 14$ cm余りで、北側に延びる。埋土は 1 層で、①灰オリーブ色の礫 ($\phi \sim 6$ cm) を 40%含むシルト質細砂で、106 畦側に大きな礫が巻き込まれて堆積していた。出土遺物はなかった。

102 土坑(図 10~12・16・17、写真図版 6・7)

東区北側の 101 溝の東側に、103・104 耕作穴に隣接して検出された土坑である。検出できた規模は、平面形状が楕円形で、長軸 1.42 m、短軸 0.9 m、深さ 11 cm余りで、断面形状は浅い皿状であった。埋土は 1 層で、①にぶい黄褐色の礫 (ϕ ~3 cm)を 10%含む粘土質シルトである。耕作に係る遺構と考えている。出土遺物はなかった。

$103 \cdot 104$ 耕作穴(図 $10 \sim 12 \cdot 16 \cdot 17$ 、写真図版 $6 \cdot 7$)

東区北側の 102 土坑の東側で隣接して検出した、北側が 103 耕作穴で南側が 104 耕作溝である。103 耕作穴の規模は、長軸 0.23 m、短軸 0.26 m、深さ 16 cm余りの楕円形で、断面形状はU字状であった。104 耕作穴の規模は、長軸 0.32 m、短軸 0.26 m、深さ 11 cm余りの楕円形で、断面形状はU字状

であった。埋土は $103 \cdot 104$ 耕作穴共に 1 層で、①にぶい黄褐色の礫 ($\phi \sim 3$ cm) を 10%含む粘土質シルトで、102 土坑と同じ埋土であった。出土遺物はなかった。

105 土坑 (図 10 ~ 12・16・17、写真図版 8・9)

東区南側の109 谷埋立地上の、南西壁際で検出した。平面形状は楕円形と思われるが、西側が西壁に入るため明確な形状は不明である。検出できた規模は、長軸0.53 m以上、短軸0.51 m、深さ0.26m余りで、断面形状は逆台形であった。埋土は1層で、①暗灰黄色のシルト質細砂である。出土遺物はなかった。

106 畦(図 $10 \sim 12 \cdot 16$)

東区 101 溝の西側に伴う、南北方向の畦である。検出できた規模は、延長約 1.1 m、幅 $0.24 \sim 0.32$ m、高さ $18 \sim 22$ cm余りで、北側は調査区外へと延びる。残存する盛土は 1 層のみで、①褐灰色の礫 $(\phi \sim 4$ cm)を 30%含むシルト質中砂であった。断面形状は台形である。出土遺物はなかった。

107 耕作地 (図 $10 \sim 12 \cdot 16$ 、写真図版 $6 \cdot 7$)

東区の北側にある 107 耕作地は、西側を南北方向の 106 畦と 101 溝で段状に囲い、その東側の標高 $15.7 \sim 15.8$ mの高まりを耕作地とする遺構であったと考える。南側は、西側の様に段を設けていたかは不明確であるが、現況では 108 耕作地・平場になだらかに接合している。出土遺物はなかった。

108 耕作地・平場(図 10 ~ 12・16、写真図版 8・9-1)

東区の中央部で検出した。107 耕作地の西側にあって、 $0.1\sim0.2$ mの段下である標高 $15.6\sim15.7$ mにあり、109 谷埋立地との間である幅 $3\sim5$ mを平場状の干渉地としていたか、耕作地としていたものと思われる。出土遺物はなかった。

109 谷埋立地(図 10 ~ 12・16、写真図版 9-1)

東区の南側で検出した。小字「馬の背」の尾根の東側延長部である小字「バンド山」の尾根と、谷に堆積した堆積物との間、上幅 $14 \sim 18 \text{m}$ 余りを流れる東西方向の開析谷を、人工的に埋めて土地開発を行ったことを示す埋立遺構である。検出できた規模は、延長約 7 m余りで、南北の幅約 5 m、深さ約 1.5 mである。確認できる埋土は 6 Mで、上層から①灰黄褐色のシルト質中砂とシルトブロックの混層、②浅黄橙色のシルト質細砂とシルトブロックの混層、③にぶい黄橙色のシルト質細砂と~中砂とシルトブロックの混層、④灰黄褐色の礫($\phi \sim 4 \text{ cm}$)を 10%含むシルト質細砂~中砂とシルトブロックの混層、⑤にぶい黄褐色の礫($\phi \sim 4 \text{ cm}$)を $20 \sim 30\%$ 含むシルト質極粗砂、⑥にぶい褐色の礫($\phi \sim 1 \text{ cm}$)を 10%含むシルト質粘土である。この内、①層の第 10-1 層は、先述した 109 谷埋立地や第 2 遺構面を覆っていた土壌層である可能性が高い層である。②~④層の第 $10-2 \sim 4$ 層は、主に南側の尾根のものと思われる山土と周辺土を用いた埋立の客土層である。⑤層の第 10-5 層は、土砂流堆積物である。⑥層の第 10-6 層は、谷の当初の堆積物か、斜面上部の第 11 層堆積物が斜面を滑り落ちた再堆積物かは不明である。埋土からの出土遺物はなかった。

[第3遺構面]

第3遺構面は(図18・19)、厚い第11-1層(a層)を除去した、第13層土砂流堆積物の上面で検出した遺構面である。調査区の中央部から北側にかけて205上段平場があり、北側に201溝、南側に203・204耕作穴と窪、東壁際に202土坑がみられる。南側には205上段平場の斜面と、その下に206下段平場と207谷状地がある。

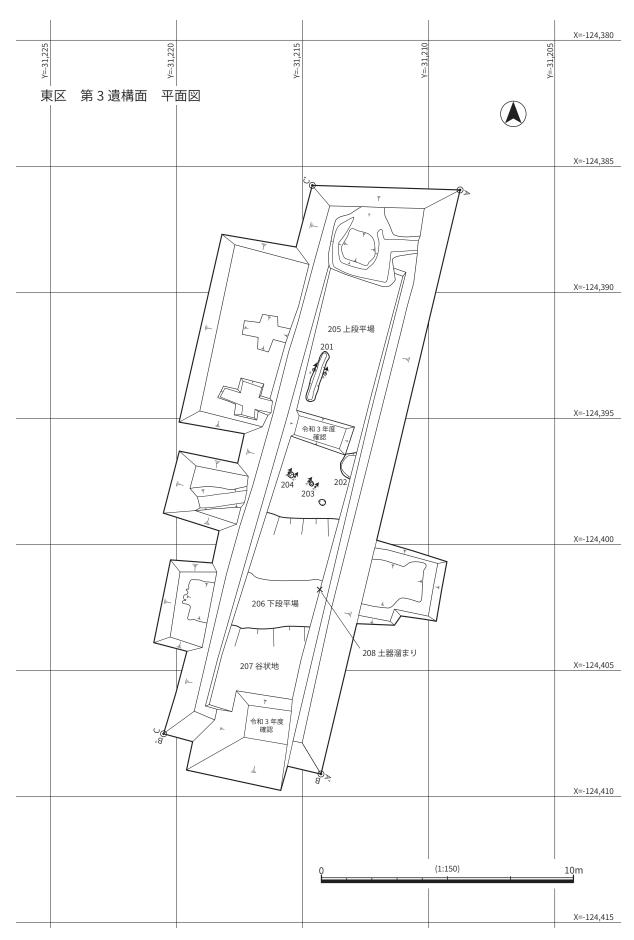


図 18. 東区第3遺構面平面図

東区 第3遺構面 遺構図

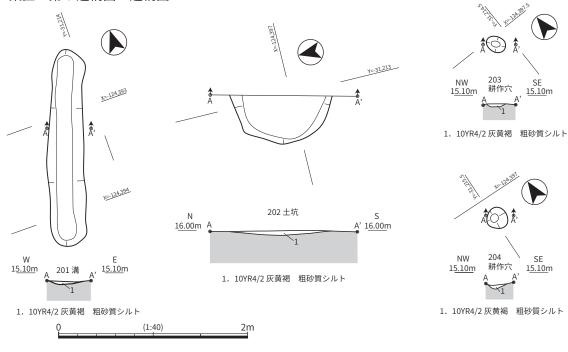


図 19. 東区 第 3 遺構面 遺構図

201 溝(図 10 ~ 12 · 18 · 19、写真図版 10-1、11-1)

東区の北西で検出した。検出できた規模は、延長約 $2.12~\mathrm{m}$ 、幅 $0.36\sim0.4~\mathrm{m}$ 、深さ $2\sim8~\mathrm{cm}$ 余り、南北方向 N-18°-E の短い溝である。残存する埋土は $1~\mathrm{em}$ で、①灰黄褐色の粗砂質シルトであった。断面形状は、浅い皿状である。出土遺物はなかった。

202 土坑(図 10 ~ 12 · 18 · 19、写真図版 10-1)

東区の中央部東壁の調査区外に入る遺構で、極めて浅い遺構であるが土坑とした。検出できた規模は、長さ 0.53 m以上、幅 1.12 m、深さ 4 cmである。断面形状は浅い皿状である。堆積は 1 層で、201 溝と同じ①灰黄褐色の粗砂質シルトである。遺構の性格は不明であるが、堆積物が 201 溝と同じであり、耕作に係る遺構とみられる。出土遺物はなかった。

203・204 耕作穴・窪(図 10~12・18・19、写真図版 10-1、11-1)

東区の中央部で、205 上段平場の南端にみられる。204 耕作穴・203 耕作穴・窪は、東西方向約 1.8 mに並ぶ耕作に伴う遺構と考えられる。耕作穴・窪の規模と形状は、203 耕作穴が長軸 0.23 m、短軸 17 cm、深さ 3 cm、204 耕作穴が長軸 0.23 m、短軸 0.24 cm、深さ 4 cmで、窪が長軸 0.22 m、短軸 0.2 cm、深さ 2 cm、平面形状はいずれも円形から楕円形、断面形状は浅い皿状である。出土遺物はなかった。

205 上段平場 (図 10 ~ 12・18・19、写真図版 10-1)

東区の中央部から北部の、標高 $15.1 \sim 15.2$ mに 205 上段平場がある。下段の 206 下段平場との間には、南側に幅 2.6 m余りの斜面がある。201 溝、202 土坑、 $203 \cdot 204$ 耕作穴、窪等の遺構は、この上段の平場にある。出土遺物はなかった。

206 下段平場(図 10 ~ 12 · 18、写真図版 11-1)

東区の南側には斜面の下の標高 14.7~14.8 mには、幅 1.8~2.2 m余りの 206 下段平場がある。

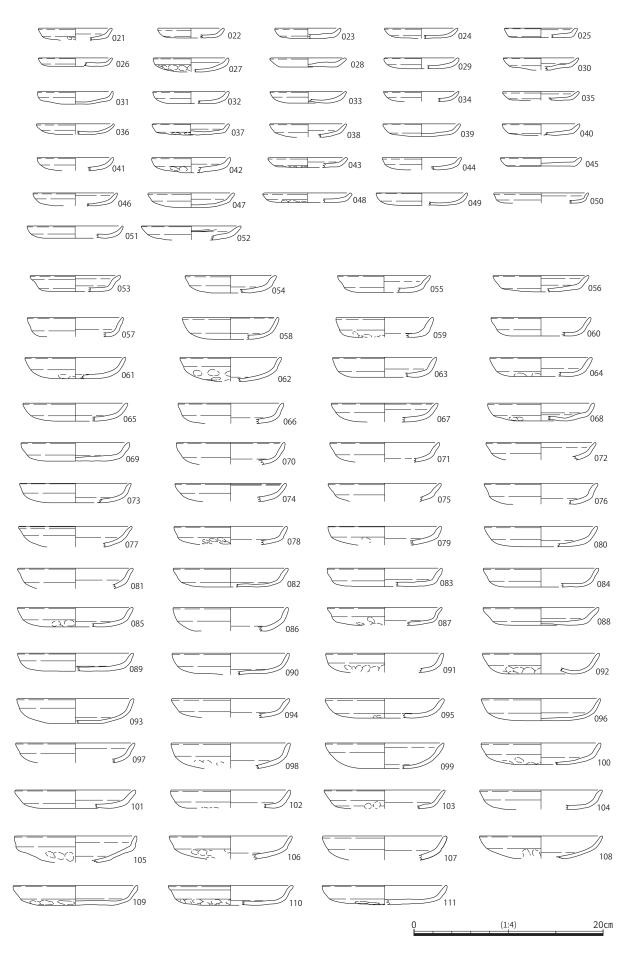


図 20-1. 東区 第 3 遺構面 208 土器溜り出土遺物

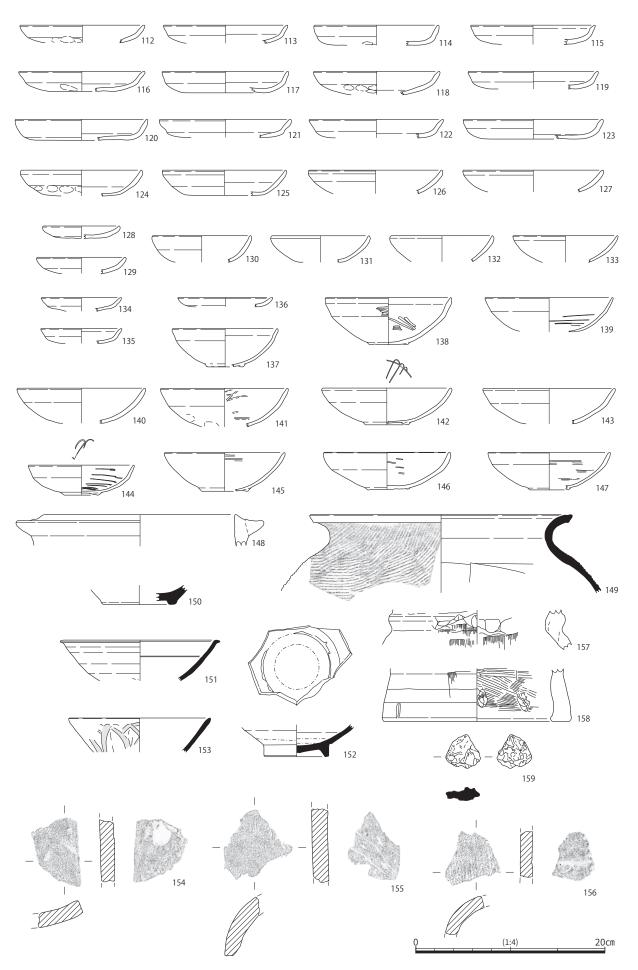


図 20-2. 東区第3遺構面208土器溜り出土遺物

208 土器溜りは、206 下段平場とその北側の斜面下の一か所に、東壁際や壁面内の第 11-1 層中から、まとまって出土した。遺構とは考えられず、第 13 層上に集め置かれた状態であったと考えられる。他には、検出遺構も出土遺物もない。

207 谷状地(図 10 ~ 12 · 18、、写真図版 11-1)

東区の南側端の 207 谷状地で、検出した幅は 3.5 m余りで、最も深い所で標高 14.1 mである。出土遺物はなかった。

208 土器溜り (図 10 ~ 12・18・20-1・2)

206下段平場においても既述したように、205上段平場の斜面下から206下段平場の傾斜変換地点で、東壁壁面内の第11-1層中から、比較的まとまって出土した遺物群である。図20-1・2に示す。

遺物の種類は、土師器の皿、瓦器の皿・椀、土師器の鍋、東播系須恵器の甕、貿易陶磁器の青磁碗・ 白磁碗、平瓦・丸瓦、朝顔形埴輪・円筒埴輪、鉄滓で、様々な遺物から成っている。

 $021\sim052$ は、N系列の口径が $6.8\sim10.4$ cm、器高が 1.5 cm以内の浅い土師器皿である。 $053\sim127$ は、N系列の口径が $9.3\sim14.7$ cm、器高が $1.7\sim2.7$ cmの土師器皿である。 $128\cdot129$ は、S系列の小皿(Ss)の口径が $8.0\sim9.2$ cm、器高が $1.3\sim1.7$ cmの浅い土師器皿である。 $130\sim133$ は、S系列の口径が $10.3\sim11.0$ cm、器高が $1.3\sim1.7$ cmの浅い土師器皿である。 $134\sim136$ は、口径が $1.4\sim10.0$ cm、器高が $1.0\sim1.6$ cmの瓦器皿である。 $137\sim147$ は、口径が $11.0\sim13.8$ cm、器高が $3.2\sim4.1$ cmの楠葉型瓦器椀である。148 は口径 20.0 cm余りの摂津型土師器鍋(羽釜)である。149 は東播系須恵器甕である。 $150\sim153$ は貿易陶磁器である。150 は小片であるが釉調や底部の形状等から、越州窯系 $1.2\sim10$ この青磁碗と思われる。151 は福建省系VIII-3 類の白磁碗である。152 は福建省系V-4b 類の白磁碗である。153 は龍泉窯系 11 b 類の片彫り蓮弁文青磁碗である。154 は平瓦、 $155\cdot156$ は丸瓦で、凸面はタテ縄目タタキ、凹面は布目が残る。157 は土師質の朝顔形埴輪のくびれ部である。158 は土師質の円筒埴輪の底部とみられる。159 は鉄滓である。

208 土器溜りの遺物は、古墳時代から鎌倉時代までの、年代幅のあるものが含まれている。埴輪片 である $157 \cdot 158$ は、川西編年 V 期 3 の 6 世紀代に位置付けられるもので、尾山遺跡 4 においても破 片が散見している。148 土師器鍋(羽釜)は、10 世紀後半頃の遺物である。149 東播系須恵器甕は、11 世紀末~12世紀前半頃のもので、出土破片を全て集めても半分程度の個体であったものと思われる。 貿易陶磁器 ⁵⁾ の内、150 の青磁碗は B 期の 10 世紀後半~ 11 世紀中頃に、151 と 152 の白磁碗は D 期 の12世紀中頃~後半に、153の片彫り蓮弁文青磁碗はE期の13世紀初~前半に比定される。154平 瓦と 155・156 丸瓦や 159 鉄滓は、時期不明である。これら上記のものは、破片で完形に近いものはな い。137~147 瓦器椀は、137・138 が楠葉型Ⅲ-2 型式の 13 世紀前葉、139~ 143 が楠葉型Ⅲ-3 型式 の 13 世紀中葉、144 ~ 147 が楠葉型IV -1 型式の 13 世紀後葉と考えられる。よって 134 ~ 136 瓦器皿 についてもこの頃の遺物とみられる。021~052と053~123の土師器皿は、成形調整法から、口縁 端部を横に摘まみだすもの、屈曲させるもの、斜め上に真っすぐ上げるものなど、製作地や年代により 変化が見られる。これらの土師器皿は、口径や器高を小さくしながら 6A ~ 7C 段階まで見られるもの である。124~127 は、口径が 12.6~ 14.7 cmと大きく深いもので、斜めに内湾ぎみに上げた端部の先 端を上に摘まみ、端部外側に面を作る一群である。これらも 5A ~ 7C 段階まであり、口径や器高を小 さくしながら見られるものである。 $128\cdot 129$ は、S 系列の小皿(Ss)で、6B 段階に出現する。130 ~ 133 は、S 系列の椀型タイプの土師器皿で、6B ~ 7C 段階ぐらいまで残るが、口径と形状から 6C ~ 7B

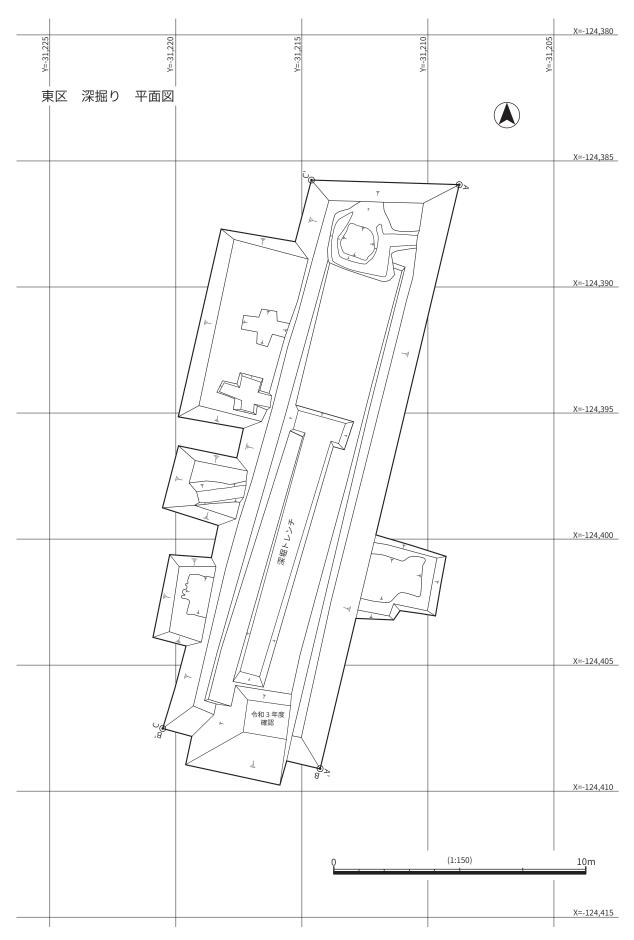


図 21. 東区 深掘り調査 平面図

段階のものと見られる。土師器皿の変化は極端には変化しない漸移的なもので、最も出土傾向の多いものは、6C・7A 段階の 13 世紀中葉~後葉と考えられる。しかし、7A 段階のある時期には、へそ皿(Sh)が出現するが、これに繋がるものや、口縁立ち上がり部の極端な屈曲と屈曲部器壁の薄いものを、208 土器溜りからは確認できなかった。それ以前の遺物群であることを傍証するものである。これらのことから、208 土器溜りの中心的で、最終時期の遺物群は、6C 段階の 13 世紀中葉頃の遺物群と考えられる。

208 土器溜りの性格は、出土状況が木箱や壺・甕等を埋納した土坑などでないこと、出土遺物に年代幅があること、ある時期のものについては完形に近い土器が多く含まれること、石を多く含むことなどから、何らかの共食などに伴う遺物群と、畑の耕作に伴い障害となった石を含む遺物群が合わさったもので、畑の斜面下に二次的に集積された遺物群であったと考える。

[**深掘り調査**](図 10 ~ 12・21、写真図版 11-2)

東区の谷寄りの 11.4m について、表土下約 4.3m、標高 13.9m までの深掘り調査(図 21)を実施した。前回調査のVIII層に相当する層は確認できなかったが、第 13 層が、次第に南側の谷部を埋積していく過程を確認できた。出土遺物はなかった。

第2節 西区の各遺構面の遺構と遺物

西区 (図 9・22 ~ 31)

西区では、3面の遺構面調査と深掘り調査を実施した。第1遺構面は第3層上面で、耕作溝12条を検出した。第2遺構面は第10-2層上面で、窪2基、柱穴4基を検出した。第3遺構面は第13層上面で、土砂流下部抉込痕5条を検出した。また、下層調査のため、調査区の中央部において深掘り調査を実施した。

なお、上層の包含層である第 2-1~9 層から、図 26 の鎌倉時代 13 世紀中葉~後葉の 6C・7A 段階の 160~ 175 土師器皿、広東省・福建省系IV -1a 類で C 期(11 世紀後半~ 12 世紀前半)の 178 玉縁白磁碗、鎌倉時代 13 世紀後葉の楠葉型IV -1 型式の 176 瓦器椀、弥生時代後期後半の 177 壺底部が出土している。この他にも古墳時代後期の須恵器壺、長岡京期~平安時代前期の須恵器杯身、江戸時代後期の京焼椀、時期不明の鉄製釘等が出土している。

[第1遺構面]

第1遺構面(図25)は、水田や畑の10層の堆積が重なる作土を除去した、第3層上に検出した、第3層を上面とする遺構面である。第8層土砂流堆積物である舌状地形堆積物が占める北側を除く、南側で耕作溝を検出した。

001 ~ 012 耕作溝(図 22 ~ 26、写真図版 12 ⋅ 13)

西区の第 2-10 層(a 層)を畑作土とする耕作溝で、第 3 層(b 層)上面で検出した。近年まで舌状 地形堆積物の西側から南側に沿って、第 2-4 \sim 10 層の畑作土層を、第 2-1 \sim 3 層の水田作土層が帯状 に深く掘り込んで水田化している部分があり、この間に第 3 層の段差が生じている。

耕作溝の方向は、南北方向から西に N-0 \sim 5°-W 傾く $001 \sim 005 \cdot 011 \cdot 012$ 耕作溝が古く、やや東に傾く N-12°-E の $006 \sim 010$ 耕作溝が新しい。

耕作溝の規模及び形状は、検出した最も長いものが 012 耕作溝の延長約 8.2 mで、溝の上幅は 0.3 \sim 0.6 m、深さは 2 \sim 8 cm、断面形状は浅い皿状である。

埋土は、第 2-10 層が灰黄褐色の礫 (ϕ ~ 3 cm) を 10%含むシルト質細砂で、新しい一群が灰黄褐色の礫 (ϕ ~ 3 cm) を 10%含むシルト質極細砂~細砂である。

東区の様な耕作穴や窪は、検出されなかった。

なお、第 2-2 層から、図 26 の信楽焼 5 期 ⁶⁾ で 19 世紀中頃~後半の 179 蓋物鉢の小片が、第 2-10 層からは、平安時代 12 世紀中葉の楠葉型 II -2 型式頃の 180 瓦器皿が出土している。

舌状地形堆積物(図 22 ~ 24・27、写真図版 17-4、18 ~ 20)

西区周辺において、長さが $25 \, \text{m}$ 余り、幅が最大 $10 \, \text{m}$ 余り、基部で $18 \, \text{m}$ 余り、高さ $1 \, \text{m}$ 余りが残存していた堆積物である。これは、舌状地形に堆積する第 $8 \, \text{層の土砂流堆積物から成る沖積錐で、舌状の形をした堆積物として残ったものである。この堆積物と同じものは、図 <math>9 \, \text{の調査地詳細図の西側発生域側にも } 10 \, \text{m}$ 余りの幅で堆積し、 $40 \, \text{m}$ 余り北側にも、長さが $30 \, \text{m}$ 近い土砂流堆積物から成る沖積錐が確認できる。残存する土砂流堆積物による沖積錐(土石流堆)の大きさは、西区の東壁で基底幅約 $10 \, \text{m}$ 、厚さ $0.7 \sim 0.94 \, \text{m}$ 、西壁で基底幅約 $11 \, \text{m}$ 、厚さ $0.3 \sim 0.85 \, \text{m}$ である。

また、第8層は遺物を包含するが、西側ほど多く含み、東側では僅かしか見られない。これは、西区から 20 m の田上流部で、前回調査地区 70 m の田土遺物を巻き込んでいるからに他ならない。

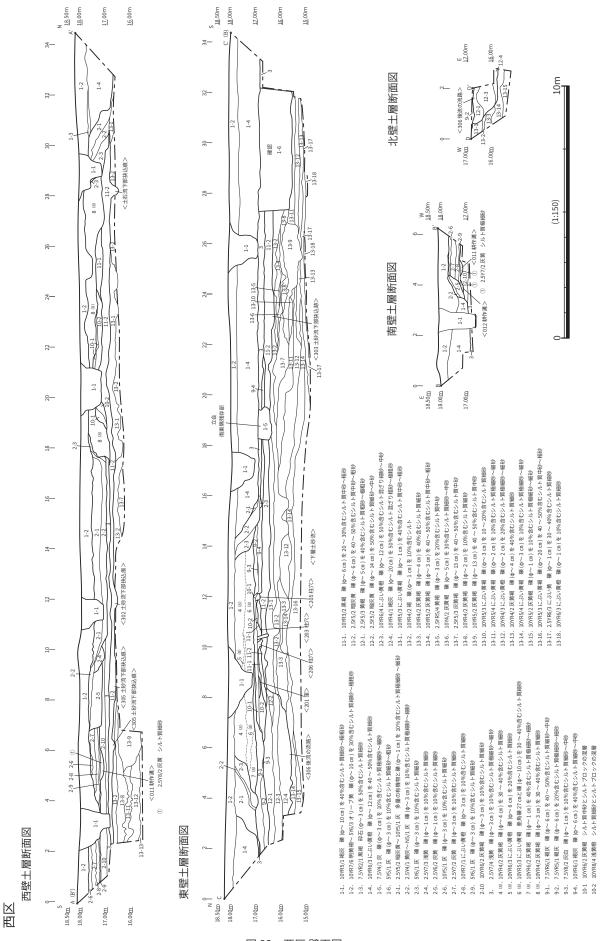


図 22. 西区壁面図

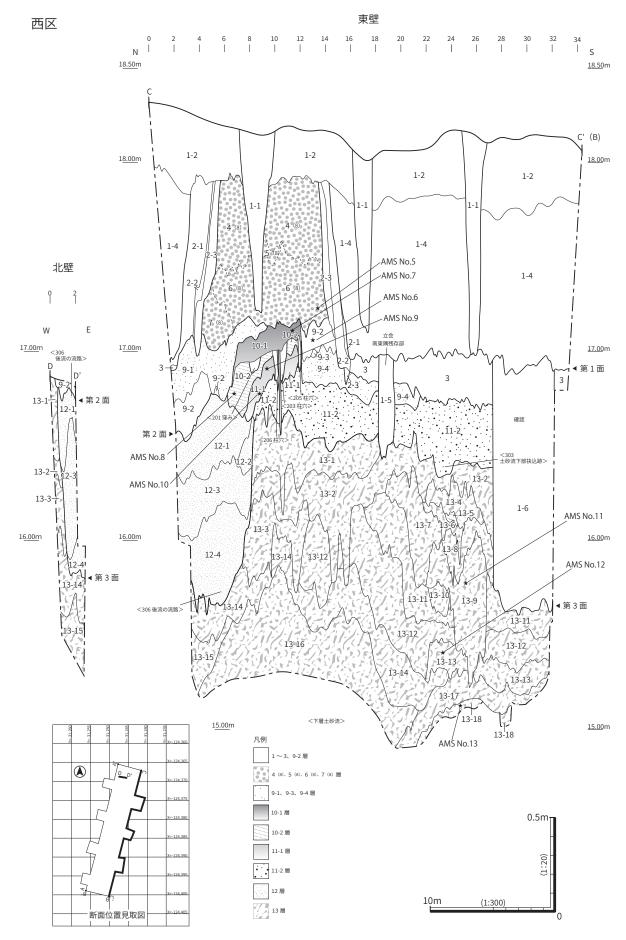


図 23. 西区 東壁面・北壁面縦横変倍図

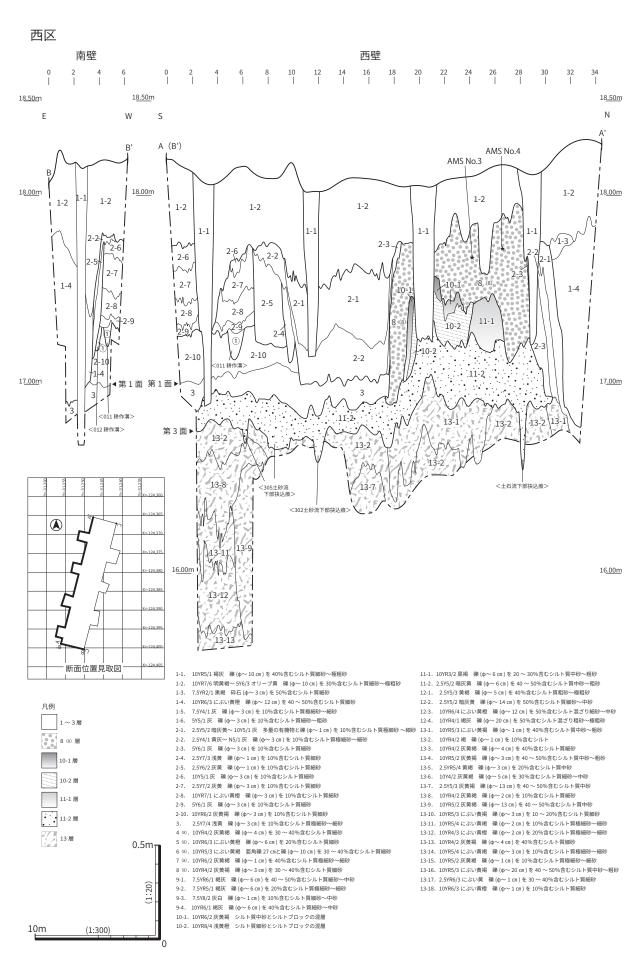


図 24. 西区 西壁面・南壁面縦横変倍図

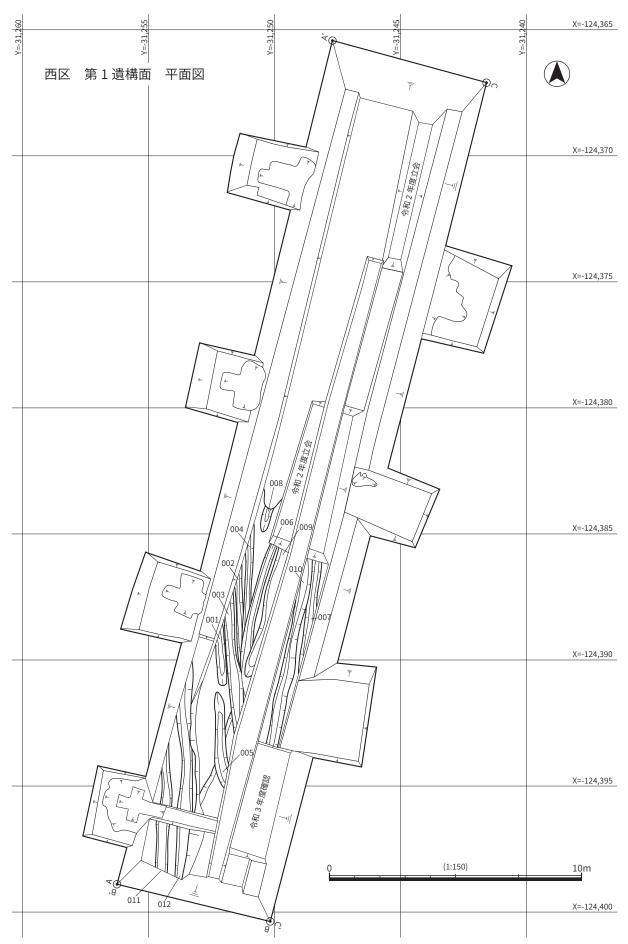


図 25. 西区 第1遺構面 平面図

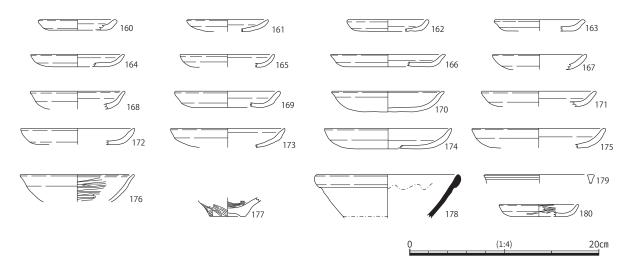


図 26. 西区 第1遺構面 包含層及び遺構出土遺物

第8層包含層の遺物は、年代差等が無いかを見比べることを目的として、調査区の西壁において、任意に上位層と下位層に分けて採集を行った。上位層の遺物は $181 \sim 216$ で、下位層の遺物は $217 \sim 250$ である。図 27 に示す。

上位層の遺物の種類は、土師器皿、瓦器椀、土師器甕である。

 $181\sim191$ は、N 系列の口径が $7.0\sim11.5$ cm、器高が $0.8\sim1.5$ cm以内の、口縁端部を丸くおさめるものと上に屈曲する、浅い土師器皿である。 $192\sim199$ は、N 系列の口径が $8.0\sim12.1$ cm、器高が $1.3\sim2.1$ cmの、口縁端部を横に摘まみだすもの、斜め上に上げるものなどの土師器皿である。 $200\sim211$ は、N 系列の口径が $9.0\sim13.7$ cm、器高が $1.6\sim2.3$ cmの、以後 N 系列の主流となる底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつ土師器皿である。 $200\sim205$ は、器壁が薄く、口縁立ち上がり部が外傾し、内面の上部に稜をもち、外端面を丸くおさめるものである。 $206\sim211$ は、器壁が厚く、口縁立ち上がり部が外反し外端面を上に摘まみ上げ面を残すもので、口縁立ち上がり部の屈曲部器壁が薄くなり始めた時期の土師器皿である。212 は、N 系列の口径が 12.7 cm、器高が 2.9 cmの深手の土師器皿である。213 は口径 23.2 cmとやや大きいもので、三河型甕(清郷型鍋)と思われる土師器の破片である。 $214\sim216$ は楠葉型の口径が $14.0\sim14.9$ cmの瓦器椀である。

下位層の遺物の種類は、土師器皿のみであった。

 $217 \sim 225$ は、N系列の口径が $6.0 \sim 8.8$ cm、器高が $0.8 \sim 1.2$ cm以内の、口縁端部を丸くおさめるものと上に屈曲する、浅い土師器皿である。 $226 \cdot 227$ は、N系列の口径が $8.0 \sim 11.1$ cm、器高が 1.2 cmの、平らで大きく広がる厚い端面を上に摘まむ、茶托型の土師器皿である。 $228 \sim 239$ は、N系列の口径が $8.4 \sim 12.4$ cm、器高が $1.4 \sim 2.3$ cmの、口縁端部を横に摘まみだすもの、斜め上に上げるものなどの土師器皿である。 $240 \sim 250$ は、N系列の口径が $10.6 \sim 12.0$ cm、器高が $1.6 \sim 2.5$ cmの、底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつ土師器皿である。 $240 \sim 243$ は、器壁が薄く、口縁立ち上がり部が外傾し、内面の上部に稜をもち、外端面を丸くおさめるものである。 $244 \sim 250$ は、器壁が厚く、口縁立ち上がり部が外反し外端面を上に摘まみ上げ面を残すもので、口縁立ち上がり部の屈曲部器壁が薄くなり始めた時期の土師器皿である。

第8層包含層の遺物には、平安時代から鎌倉時代までの遺物が含まれている。213 は三河型甕(清郷型鍋)⁸⁾ で、口縁部の形態が I 類で、第 II 段階第 2 小期の 10 世紀後半頃の遺物である。愛知県・静岡

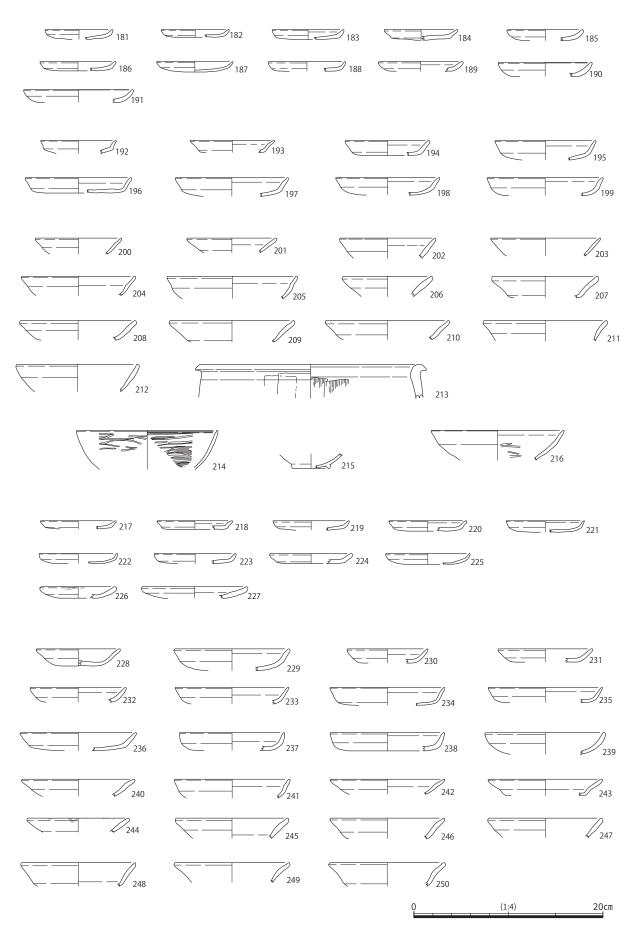


図 27. 西区 第 1 遺構面 舌状地形堆積物 (第 8 層) 出土遺物

県・岐阜県・三重県では出土が知られていたが、淀川流域とはいえ極めて珍しい遺物である。瓦器椀は、214・215 が楠葉型Ⅱ-3 型式の12 世紀後葉、216 が楠葉型Ⅲ-3 型式の13 世紀中葉と考えられる。

土師器皿については、上位層も下位層も口径や器高では、大きく異なっていない。浅い土師器皿は、上位層が口径 $7.0 \sim 8.7$ cm、器高 $0.8 \sim 1.2$ cm、下位層が $7.0 \sim 8.8$ cm、器高 $0.8 \sim 1.1$ cmである。口縁端部を横に摘まみだすもの、斜め上に上げるものなどの土師器皿は、上位層が口径 $8.0 \sim 12.1$ cm、器高 $1.3 \sim 2.1$ cm、下位層が $8.4 \sim 12.4$ cm、器高 $1.4 \sim 2.3$ cmである。底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつ土師器皿では、上位層が口径 $9.0 \sim 13.7$ cm、器高 $1.6 \sim 2.3$ cm、下位層が $10.6 \sim 12.0$ cm、器高 $1.7 \sim 2.5$ cmであった。上位層の $181 \sim 212$ も、下位層の $217 \sim 250$ の土師器皿も、成形調整法からみると、口縁端部を横に摘まみだすもの、屈曲させるもの、斜め上に真っすぐ上げるもの、底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつものが出土している。これらの土師器皿は、口径や器高を小さくしながら、 $6A \sim 7C$ 段階まで見られるものである。

器種については、上位層のみで出土している 226・227 の茶托型の土師器皿 9 は、特異なものではあるが、7A 段階前後に出土が知られている。上位層の 212 は、口径が 12.7 cmと大きく、2.9 cmと深いもので、斜めに内湾ぎみに上げた端部の先端を上に摘まみ、端部外側に面を作る、 $6A \sim 7C$ 段階までみられる一群であるが、1 点のみの出土であった。また、上位層と下位層共にS 系列の出土はなかった。

東区 208 土器溜りの遺物と第8層包含層の遺物を比較してみると、東区 208 土器溜りの遺物は、浅い土師器皿の口径が7.6~10.4 cm、器高が1.5 cm以内である。口縁端部を横に摘まみだすもの、斜め上に上げるものなどの土師器皿は、口径が9.3~14.7 cm、器高が1.7~3.0 cmである。いずれをとっても208 土器溜りの遺物の方が、口径・器高共に大きく、第8層包含層の遺物の方が小さくなっていることは明らかである。さらに、東区208 土器溜りの遺物には存在しなかった、底部から外傾ないしは外反する口縁部をもつ土師器皿や、茶托型の土師器皿の存在など、後続する時期の遺物に引き継がれる新しい要素が入ってきている。土師器皿の変化は極端には変化しない漸移的なもので、最も出土傾向の多いものは、6C・7A段階の13世紀中葉~後葉と考えられる。しかし、口縁立ち上がり部の極端な屈曲と屈曲部器壁の薄いものが存在するにもかかわらず、7A段階のへそ皿(Sh)が無いことなどから、それ以前の遺物群であることを傍証するものである。これらのことから、第8層包含層の遺物の中心的で、最終時期の遺物群は、6C段階に近い7A段階の13世紀後葉頃の遺物群と考えられる。

[第2遺構面]

第 2 遺構面(図 28)は、第 8 層土砂流堆積物である舌状地形堆積物の下で、第 9-1 ~ 4 層下、第 10-1 層土壌層(作土層)下の、客土造成層である第 10-2 層の上面において検出した遺構面である。この遺構面は、狭い範囲に山土を主にして土壌層を混ぜて客土とした第 10-2 層の遺構面で、当初は小規模な掘立柱建物等が存在していた可能性があるが、その後は耕作地となっていったようである。客土造成された範囲は、東壁では幅約 5.9 m、客土厚 $9\sim29$ cm、西壁で幅約 5.3m、客土厚 $13\sim30$ cmであった。遺構を検出したのは、この内の東壁下の犬走上で残存していたのみで、西壁では残っていなかった。第 10-2 層上面で検出した遺構は、第 10-1 層土壌層が入り込む $201\cdot202$ 窪が 2 基と、 $203\sim206$ 柱穴が 4 基である。この第 10-2 層には、客土時に土器を包含している。

201 · 202 窪、203 ~ 206 柱穴(図 22 ~ 24 · 28 · 29、写真図版 14)

201 窪と 202 窪は、第 10-1 層土壌層が入り込むもので、形状は 201 窪が不定形で浅いものであるのに対し、202 窪は棒状のもので引っ掻いたような形を残す。図 29 の 203 ~ 206 柱穴の内、204 柱穴の

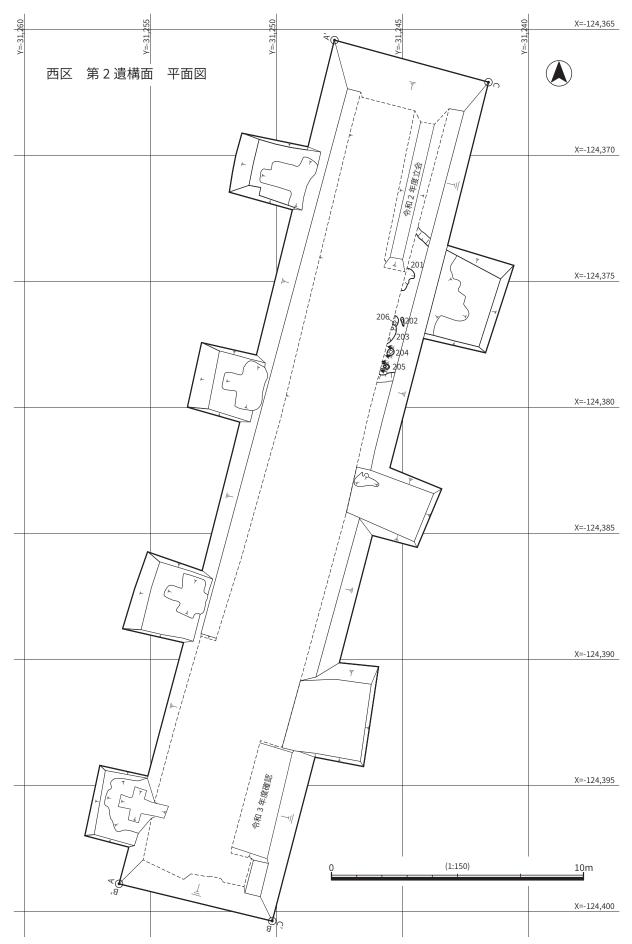


図 28. 西区 第 2 遺構面 平面図

みが形状の明らかな遺構である。204 柱穴の形状は、長辺 0.3m、短辺 0.26 m、深さ 17 cmの楕円形で、柱痕跡の直径は 12 cm余りであった。柱痕跡の直径は、残っているものは全て、直径 12 cm余りであった。203 柱穴のように異常な沈下を起こしているものもあり、地盤は固くなかったようである。建物がこの柱穴で建てられていたとするなら、小規模なものであったと想像され、作業小屋的なものが想起される。

第10-2 層・客土層(図 22 ~ 24・28・29、写真図版 14-5)

第10-2層は、山土と土壌層が混った客土層である。

東壁から 5 点の土師器皿が、西壁から 3 点の土師器皿と 1 点の瓦器椀底部が出土している。東壁の図 29 の 251 は口径 8.9 cm、器高 1.3 cmの茶托型の土師器皿、252 は口径 8.1 cm、器高 1.3 cmの浅い土師器皿、 $253 \sim 255$ は口径 $9.2 \sim 13.9$ cm、器高 $1.9 \sim 2.7$ cmの、斜め上に上げる土師器皿である。西壁の $256 \cdot 257$ は口径 $8.9 \sim 9.3$ cm、器高 $1.5 \sim 1.6$ cmの、口縁端部を横に摘まみだす土師器皿で、258 は口径 8.9 cm、器高 1.5 cmの斜め上に上げる土師器皿である。土師器皿は、6C 段階の 13 世紀中葉頃の遺物群と考えられる。259 は瓦器椀の底部で、底径 4.0 cmの貼付け高台の形状や体部のカーブ等から、楠葉型III -3 型式前後と考えられる。

「第3遺構面」

第3遺構面(図30)は、土砂流堆積物第11-2層の土や石が、土砂流堆積物第13層上面を通過するときに傷つけた痕跡である、土砂流下部抉込痕5条と後流の流路1条を、調査区の南側で検出した。 土砂流下部抉込痕5条と後流の流路1条である。いずれも自然現象で生じたものである。

301~305 土砂流下部抉込痕(図 22~ 24・29・30、写真図版 15)

この痕跡は、土砂流堆積物第 11-2 層の土や石が、下層の土砂流堆積物第 13 層上面を通過するときに、特に大きめの石が転がることによって発生するものである 10 。流れた方向は、西北西から東南東である。抉込痕内には、粗い礫が残る。検出されたのは、 $301\sim305$ 土砂流下部抉込痕で、全て不定形な形状で、横方向に転がったことによって生じた痕跡と思われる。

なお、第 11-2 層土砂流堆積物上層の土壌層である第 11-1 層と思われる層から、図 29 の 260 土師器鍋が 1 点出土している。摂津型の 9 世紀前半~ 10 世紀前半の遺物と思われる。

306 後流の流路(図 22 ~ 24・29・30、写真図版 16)

土石流や土砂流の流下後に流れる自然発生的な流路で、堆積層である第 12 層は葉理(ラミナ)構造を持つ。調査区の北壁より東壁にかけて、第 13 層の堆積後に流れた 306 後流の流路 1 条を検出した。 検出した延長は約 5m 余りで、幅は 4 m以上、深さ約 1.1 mである。流下方向は、N-82°-E の南南東方向で、蛇行しているものとみられる。

[**深掘り調査**](図 22 ~ 24・31、写真図版 17 ~ 20)

西区の中央約30mについて、表土下約3.2m、標高14.9mまでの深掘り調査(図31)を実施した。 西区においても、前回調査WI層の地山層は確認できなかったが、第13層が次第に南側の谷部を埋積していく過程を確認できた。第13層からの、出土の遺物はなかった。

西区 第2遺構面 遺構図 S 1<u>7.30</u>m S 1<u>7.30</u>m 205 柱穴 1<u>7.30</u>m 204柱穴 1<u>7.30</u>m 203 柱穴 N 1<u>7.00m A</u> , S 1<u>7.00</u>m 206 柱穴 1. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト質細砂 1. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト質細砂 1.10YR6/3 にぶい黄橙 シルト質細砂 2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質細砂 2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質細砂 2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質細砂 (1:40) 3. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質細砂 東壁 西壁

西区 第3遺構面 遺構図

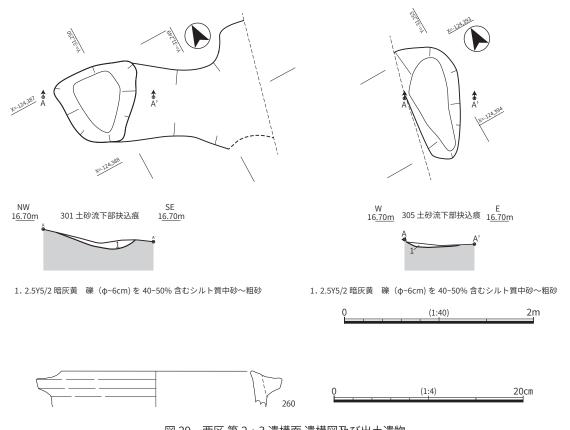


図 29. 西区第2・3遺構面遺構図及び出土遺物

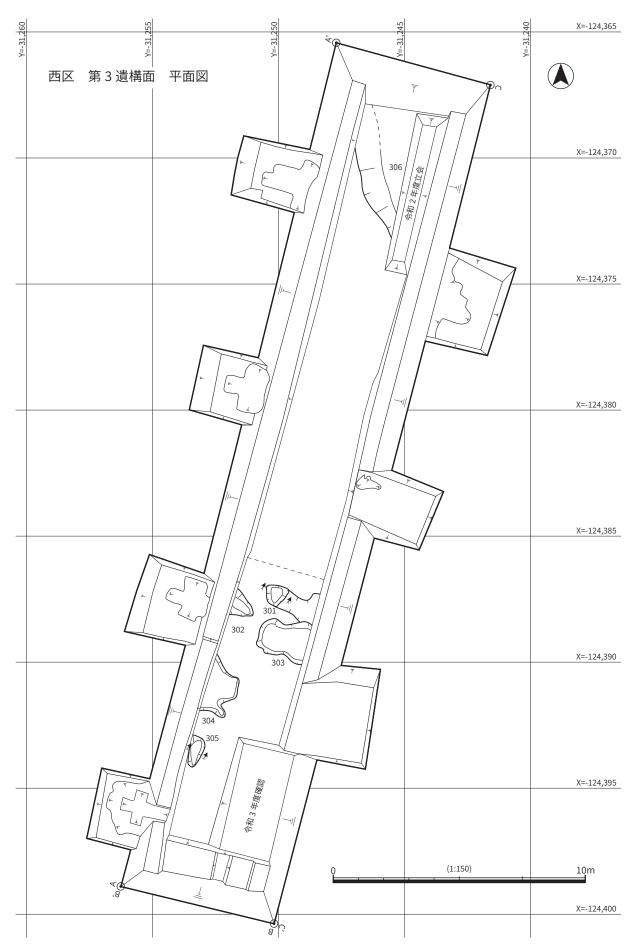


図30. 西区第3遺構面平面図

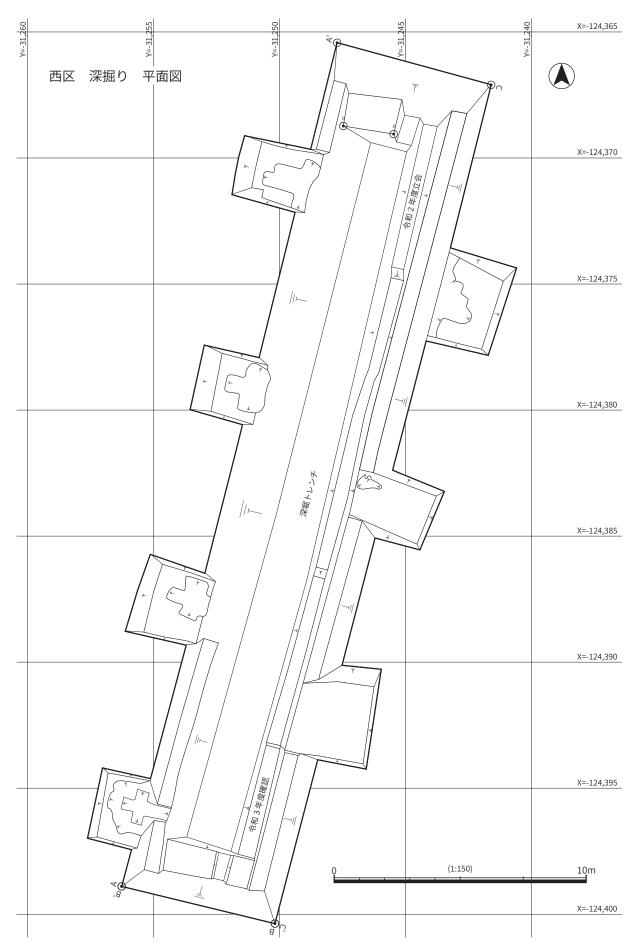


図 31. 西区 深掘り調査 平面図

<註・引用文献>

- 1) 山口誠司「製作技法からみた織豊期城郭の瓦」『中世城郭研究』第31号、中世城郭研究会、2017年
- 2) 山崎信二「近世瓦におけるコビキ B(鉄線切り)出現の年代-地域別の実年代について-」『考古学論究』(有) 真陽社、2007 年 森田克行「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市教育委員会、1984 年
- 3) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、1978年
- 4) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第 43 集・(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第 316 集、2022 年
 - 辻 広志「尾山遺跡の時期別消長」『島本町文化財調査報告書-尾山遺跡発掘調査報告書』島本町文化財調査報告書第 48 集、85-87p、2023 年
- 5) 山本信夫「貿易陶磁器」『新版概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編、(有) 真陽社、2022 年
- 6) 畑中英二『信楽焼の考古学的研究』 サンライズ出版、2003 年
- 7) 大塚 隆・川端博明ほか『越谷遺跡他発掘調査報告書-伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群-』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2集、名神高速道路内遺跡調査会、1997年
- 8) 北村和弘「古代「三河型甕」考」『研究紀要』第2号、攵劇愛知県埋蔵文化財センター、2001年
- 9) 辻 広志「土坑 187SK の土器」『植物園北遺跡』㈱四門、2021 年
- 10) 増田富士雄『ダイナミック地層学』近未来社、2019 年

第6章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

越谷遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 4 に、測定試料採取地点は図 11・12・23・24 の壁面図のとおりである。測定試料を写真 16 に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた 14 C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 14 C 年代、暦年代を算出した。

3. 結 果

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比(8 ¹³C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ¹⁴C 年代を、図 32 に暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

 14 C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 14 C 年代(yrBP)の算出には、 14 C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14 C 年代誤差(\pm 1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14 C 年代がその 14 C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14 C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14 C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14 C 濃度の変動、および半減期の違い(14 C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

 14 C 年代の暦年較正には OxCal4.4(較正曲線データ:IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14 C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考 察

(1) 測定結果

今回得られた年代値は、5つの年代グループに分けられる。5つの年代グループについて、年代が新しいグループから順に整理する。

表 4. 測定試料および処理

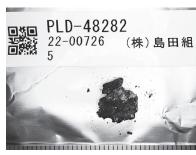
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-48278	試料No. 1 調査区:東区 採取位置:東壁面 層位:土壌化層 208土器溜り 第11-1層 取上No. ①	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリ ウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48279	試料No. 2 調査区:東区 採取位置:西壁面 層位:土砂流堆積物 第13-5層 取上No. ②	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外 部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48280	試料No. 3 調查区: 西区 採取位置: 西壁面 層位: 舌状地形堆積物 第8層(上位層) 取上No. ③	種類:炭化材 試料の性状:最終形成年輪以外 部位不明 状態:wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48281	試料No. 4 調査区: 西区 採取位置: 西壁面 層位: 舌状地形堆積物 第8層(上位層) 取上No. ②	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48282	試料No. 5 調查区: 西区 採取位置: 東壁面 層位: 舌状地形堆積物 第8層(下位層) 取上No. ③	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48283	試料No. 6 調査区: 西区 採取位置: 東壁面 層位: 土壌化層 第9-2層 取上No. ④	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 有機溶剤処理:アセトン が・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48285	試料No. 7 調査区: 西区 採取位置: 東壁面 層位: 作土層 第10-1層 取上No. ⑤	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48287	試料No. 8 調査区: 西区 接取位置: 東壁面 層位: 容土層 第10-2層 取上No. ⑨	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48284	試料No. 9 調查区:西区 採取位置:東壁 層位:土壌化層 第11-1層 取上No. ⑥	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリ ウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48286	飲料No. 10 調查区:西区 採取位置:東壁 層位:土壌化層 第11-1層 取上No. ⑦	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48289	試料No. 11 調查区:西区 採取位置:東壁面 層位:土砂流堆積物 第13-9層 取上No. ①	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリ ウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48288	試料No. 12 調查区:西区 採取位置:東壁面 層位:土砂流堆積物 第13-13層 取上No. ⑩	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリ ウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48290	試料No. 13 調查区:西区 採取位置:東壁面 層位:土砂流堆積物 第13-18層 取上No. ①	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: wet	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリ ウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)

























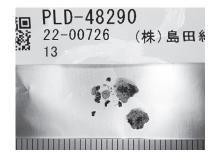


写真 16. 測定試料写真

表 5. 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

一原本	S 13 C	曆年較正用年代	14C 年代	140年代を暦年代に	¹ C年代を暦年代に較正した年代範囲	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	蛟正した年代範囲
· H - 1/2/2	(%0)	(yrBP±1σ)	(yrBP±1σ)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	10暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-48278 武将No. 1	-24, 78±0, 23	788±20	790±20	1228-1246 cal AD (36.58%) 1254-1269 cal AD (31.69%)	1223-1273 cal AD (95.45%)	722-704 cal BP (36,58%) 696-681 cal BP (31,69%)	727-677 cal BP (95,45%)
PLD-48279 部料No. 2	-24.98±0.24	2757±21	2755±20	922-895 cal BC (30.43%) 874-838 cal BC (37.84%)	976-953 cal BC (6.08%) 934-830 cal BC (89.37%)	2871-2844 cal BP (30.43%) 2823-2787 cal BP (37.84%)	2925-2902 cal BP (6.08%) 2883-2779 cal BP (89.37%)
PLD-48280 配料No. 3	-25.03±0.31	787±20	785±20	1228-1246 cal AD (35.84%) 1254-1270 cal AD (32.43%)	1223-1274 cal AD (95.45%)	722-704 cal BP (35.84%) 696-680 cal BP (32.43%)	727-676 cal BP (95.45%)
PLD-48281 試料No. 4	-24.00±0.22	885±21	885±20	1160-1182 cal AD (31.25%) 1185-1213 cal AD (37.02%)	1050-1080 cal AD (14.29%) 1154-1220 cal AD (81.16%)	790-768 cal BP (31.25%) 765-737 cal BP (37.02%)	900-870 cal BP (14.29%) 797-730 cal BP (81.16%)
PLD-48282 意代料No. 5	-25.30±0.35	861±23	860±25	1175-1196 cal AD (33.93%) 1198-1219 cal AD (34.34%)	1054-1059 cal AD (0.97%) 1157-1230 cal AD (91.82%) 1243-1258 cal AD (2.66%)	775-754 cal BP (33.93%) 752-731 cal BP (34.34%)	896–891 cal BP (0.97%) 793–720 cal BP (91.82%) 707–692 cal BP (2.66%)
PLD-48283 武料-No. 6	-23.65±0.22	777±21	775±20	1230-1244 cal AD (26.67%) 1257-1275 cal AD (41.60%)	1225-1277 cal AD (95.45%)	721-706 cal BP (26.67%) 693-675 cal BP (41.60%)	725-673 cal BP (95.45%)
PLD-48285 試料No. 7	-27.58±0.20	840±19	840±20	1178-1192 cal AD (18.58%) 1202-1228 cal AD (42.08%) 1246-1254 cal AD (7.62%)	1167-1261 cal AD (95.45%)	772-758 cal BP (18.58%) 748-722 cal BP (42.08%) 704-696 cal BP (7.62%)	783-689 cal BP (95,45%)
PLD-48287 歌料No. 8	-30.12 ± 0.17	846±22	845±20	1175-1195 cal AD (27.69%) 1199-1225 cal AD (40.58%)	1164-1233 cal AD (83.29%) 1239-1261 cal AD (12.16%)	775-755 cal BP (27.69%) 751-725 cal BP (40.58%)	786-717 cal BP (83,29%) 712-690 cal BP (12.16%)
PLD-48284 歐特No. 9	-27.69±0.15	2002±21	2000±20	39-11 cal BC (31.58%) 2-27 cal AD (28.00%) 47-57 cal AD (8.69%)	46 cal BC-71 cal AD (95.45%)	1988-1960 cal BP (31.58%) 1948-1923 cal BP (28.00%) 1903-1893 cal BP (8.69%)	1995-1879 cal BP (95.45%)
PLD-48286 試料No. 10	-25.08±0.18	819±20	820±20	1220-1233 cal AD (27.37%) 1240-1260 cal AD (40.90%)	1180-1188 cal AD (2.56%) 1210-1269 cal AD (92.89%)	731-718 cal BP (27.37%) 711-690 cal BP (40.90%)	770-762 cal BP (2.56%) 740-681 cal BP (92.89%)
PLD-48289 試料No. 11	-26.41±0.44	3147±25	3145±25	1491–1483 cal BC (5.57%) 1448–1402 cal BC (62.70%)	1497-1470 cal BC (12.57%) 1465-1385 cal BC (75.60%) 1338-1319 cal BC (7.28%)	3440-3432 cal BP (5.57%) 3397-3351 cal BP (62.70%)	3446-3419 cal BP (12.57%) 3414-3334 cal BP (75.60%) 3287-3268 cal BP (7.28%)
PLD-48288 試料No. 12	-25.24±0.24	3110±23	3110±25	1420-1385 cal BC (42.26%) 1339-1316 cal BC (26.01%)	1438-1369 cal BC (54.54%) 1357-1296 cal BC (40.91%)	3369-3334 cal BP (42.26%) 3288-3265 cal BP (26.01%)	3387-3318 cal BP (54.54%) 3306-3245 cal BP (40.91%)
PLD-48290 試料No. 13	-27.29±0.20	3059±21	3060±20	1385-1339 cal BC (38.31%) 1317-1281 cal BC (29.96%)	1407-1260 cal BC (94.79%) 1240-1236 cal BC (0.66%)	3334-3288 cal BP (38,31%) 3266-3230 cal BP (29,96%)	3356-3209 cal BP (94.79%) 3189-3185 cal BP (0.66%)

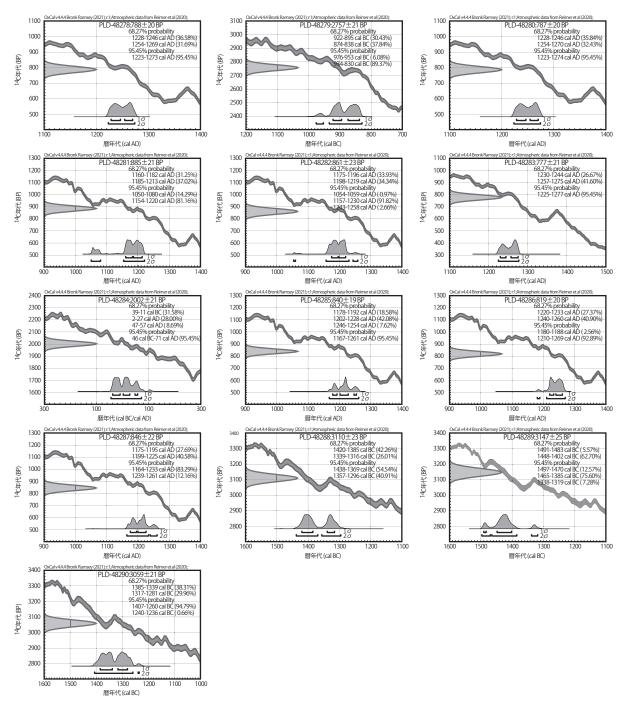
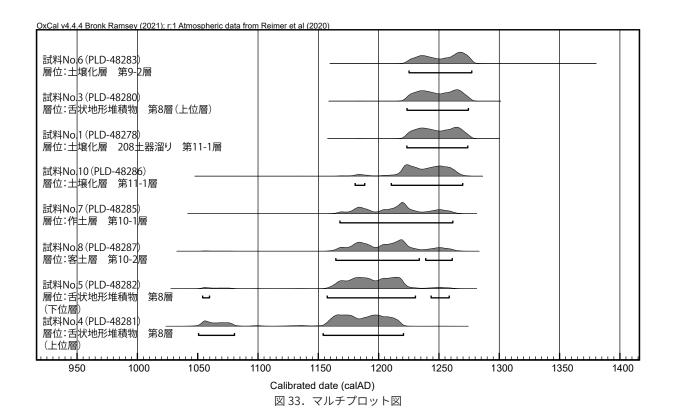


図 32. 暦年較正結果

最も新しい年代値を示す年代グループは、 14 C 年代が 775 ~ 790 BP 前後、 2σ の較正年代(以下、同様)が $1220\sim1280$ cal AD 前後で、紀元後 13 世紀前半~後半に相当するグループである。東区・第 11-1 層・208 土器溜りの試料 No.1(PLD-48278)、西区・第 8 層上位層・舌状地形堆積物の試料 No.3(PLD-48280)、西区・第 9-2 層・土壌化層の試料 No.6(PLD-48283)の 3 試料である(図 32)。

次に新しい年代値を示す年代グループは、 14 C 年代が 820 ~ 885 BP 前後、較正年代が 1050 ~ 1270 cal AD 前後で、紀元後 11 世紀中頃~ 13 世紀後半に相当するグループである西区・第 8 層上位層・舌状地形堆積物の試料 No.4(PLD-48281)、西区・第 8 層下位層・舌状地形堆積物の試料 No.5(PLD-48282)、西区・第 10-1 層・作土層の試料 No.7(PLD-48285)、西区・土壌化層・第 11-1 層の試料



No.10 (PLD-48286)、西区・第 10-2 層・客土層の試料 No.8 (PLD-48287) の 5 試料である(図 32)。 3 つ目の年代グループは、¹⁴C 年代が 2000 BP 前後、較正年代が 50 cal BC ~ 70 cal AD 前後で、紀元前 1 世紀半ばから紀元後 1 世紀後半に相当するグループである。西区・第 11-1 層・土壌化層の試料 No.9 (PLD-48284) の 1 試料のみである。3 つ目の年代グループと 1 つ目と 2 つ目の年代グループの間には、大きな時間的間隙が存在する。

4つ目の年代グループは、 14 C 年代が 2755 BP 前後、較正年代が 2930 \sim 2780 cal BP 前後のグループで、西区・第 13-5 層・土砂流堆積物の試料 No.2(PLD-48279)の 1 試料のみである。

最も古い年代値を示した 5 つ目の年代グループは、 14 C 年代が 3060 \sim 3145 BP 前後、較正年代が 3450 \sim 3180 cal BP 前後のグループで、西区・第 13-13 層・土砂流堆積物の試料 No.12 (PLD-48288)、西区・第 13-9 層・土砂流堆積物の試料 No.11 (PLD-48289)、西区・第 13-18 層・土砂流堆積物の試料 No.13 (PLD-48290) の 3 試料である。

縄文時代の年代観については幡中(2012)、岡田(2012)、小林(2017)、弥生時代については今村・ 設楽(2011)と若林(2018)、弥生時代後期~古墳時代中期については森岡ほか(2016)と春成ほか (2011)、古墳時代以降については児玉編(2018)にもとづき、測定結果をまとめる。

紀元後13世紀前半~後半の1つ目の年代グループは、鎌倉時代に相当する。紀元後11世紀中頃~13世紀後半に2つ目の年代グループは、平安時代中期~鎌倉時代に相当する。紀元前1世紀半ばから紀元後1世紀後半の3つ目の年代グループは、弥生時代後期前半に相当する。較正年代が2930~2780 cal BP 前後の4つ目の年代グループは、縄文時代晩期中葉~後葉に相当する。較正年代が3450~3180 cal BP 前後の5つ目のグループは、縄文時代後期後葉~晩期前葉に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年 輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は、 すべて最終形成年輪の確認できない部位不明の炭化材である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

(2) 今回の発掘調査区の堆積状況

今回の調査トレンチの西側に近接する地点では、平成3・4(1991・1992)年度にかけて発掘調査が実施された越谷遺跡の第2地区が存在する(大塚編、1977)。今回の調査区および第2地区は、開析谷底ないし谷口に発達する沖積錐もしくは小規模扇状地の斜面上に存在する。第2地区は、今回の調査区よりも斜面上部に位置する。今回の調査区および第2地区付近では、都市開発と名神高速道路建設以前に、広く棚田が構築されていた。そのため、第2地区の調査前の地表面の標高は、斜面上部にあたる西側と北側に向かって階段状に高くなっていた。今回の調査トレンチに近い第2地区東縁部では、調査前の地表面の標高がT.P.20.0m 前後を示す。この第2地区では、上下2面の遺構確認面が設定されており、検出された遺構・遺物から、基本層序のIII層上面の第1遺構面で中世後半、IV層上面の第2遺構面で弥生時代後期~古代末頃の遺構が確認されている。遺構確認面の標高は、調査区東半部付近において、第1遺構面がT.P.19.5m 前後、第2遺構面がT.P.18.7m 前後である。なお、遺構確認面を構成するIII層、IV層は、ともに淘汰不良の砂礫混じりの泥層を主体とする構成層からなる。さらにIII層は、中世中頃の遺物を下限年代とする遺物包含層となっている。

弥生時代~中世の遺構・遺物が検出される第2地区では、第2遺構面の下位において、更新統の大阪層群を侵食して形成された開析谷が検出されている。深掘トレンチ調査により、第2遺構面の構成層であるIV層の下位には、最深部で層厚2.0m前後ある、開析谷を埋積する砂礫層のV層の堆積が確認された。さらに、V層の基底部では、直下の砂礫層のVII層に挟まれて、T.P.17.5m前後に谷底で形成された湿性の土壌化層準と考えられる層厚0.5m前後の黒色粘土層のVI層の挟在も捉えられた。このVI層からは、縄文時代後期前葉の北白川上層式1期および2期の土器がまとまって検出された。

越谷遺跡の周辺では、今回の調査トレンチの北東に位置する地点において、令和 2・3(2020・2021)年度にかけて発掘調査が実施された尾山遺跡が存在する(後川編、2022)。尾山遺跡は、沖積錐もしくは小規模扇状地の斜面の下部に位置する。尾山遺跡の調査範囲における調査前の地表面の標高は、相対的に高い場所で T.P.11.5~12.0m 前後、低い場所で 10.0~10.5m 前後である。発掘調査では、深部まで調査が実施されており、基底部の T.P.8.0~8.5m 前後の土壌化した泥層の第 7a 層から、縄文時代後期中葉の土器が出土している。なお、第 7a 層の下位には、砂礫層の第 7b 層が 3m 以上連続して堆積しており、深掘調査でも砂礫の基底は確認されなかった。

第7a層の直上には、縄文時代晩期~弥生時代前期の土壌化した泥層の第6a層が堆積する。第7a層と第6a層は、縄文時代後期中葉から弥生時代前期に堆積的に発達した泥質の土壌化層準と考えられる。第6a層の上部には、弥生時代前期以降から弥生時代中期の砂層である第5b層が、ローブ状の微高地をなして層厚1.0m前後の厚さで堆積する。第5b層の表層には、弥生時代中期に形成された泥質の土壌化層準である第5a層がのる。第5b層~第5a層段階に発達した微高地は、調査範囲の中央付近に形成され、その周囲が微低地となる。微高地の周囲の微低地では、弥生時代後期~古墳時代前期にかけて、最大層厚1.0m以上の砂礫層第4-2b層を主体とする第4層が堆積する。第4層の砂礫層は、挟在する泥層の第4-2a層により、第4-2b層と第4-1b層の上下2つの堆積層に区分される。上部の砂礫

層である第 4-1b 層の表層部には、弥生時代後期~古墳時代初頭もしくは古墳時代前期の泥層である第 4-1a 層がのる。また、第 4-2a 層段階において相対的に地形が低い領域には、古墳時代前期~中期の砂礫層である第 3-2b 層が堆積する。

なお、尾山遺跡で記載された堆積柱状図からは、古墳時代前期以降から古代もしくは中世前半にかけて土砂流出が静穏化した状況が読み取れる。土砂流出が再び活発化するのは、調査範囲の南側に主に分布する、13世紀以降の泥層の第 3-2a 層と、砂礫層からなる 13~14世紀代の第 3-1b 層の堆積時期である。砂礫層の第 3-1b 層直上には、14世紀以降の泥層である第 3-1a 層がのる。堆積柱状図からは、近世の第 2 層、現代の第 1 層の耕作土が、調査区全域を薄く被覆する状況が確認できる。よって、第 3-1a 層の 14世紀以降になると、尾山遺跡では土砂流出がかなり静穏化したと考えられる。

(3) 今回の調査区で得られた年代値と周辺調査区の層序について

1) 越谷遺跡

今回の発掘調査で採取された測定試料は、平安時代~鎌倉時代、弥生時代後期、縄文時代後期後葉 ~晩期後葉の大きく3つの年代グループに大別できる。

越谷遺跡の西側に近接する第2地区の開析谷内からは、北白川上層式1期および2期の縄文時代後期前葉の土器が出土している(大塚編、1997)。土器の検出層準は、開析谷の埋積層である砂礫層のV層基底部に堆積する黒色泥層のVI層である。VI層を被覆するV層からは、遺物は検出されず、堆積時期は不明である。ただし、V層の上部に堆積した淘汰不良の砂礫混じり泥層のIV層では、堆積層上面で設定された第2遺構面において、古い時期の遺構として弥生時代後期の遺構が検出されている。第2地区での発掘調査結果をふまえると、考古遺物から堆積時期を特定できないV層およびIV層は、縄文時代後期前葉以降から弥生時代後期以前に形成されたと捉えられる。一方で、VI層については、出土土器から堆積時期が推定できる。VI層から出土した北白川上層式1期および2期の土器は、幡中(2012)の縄文土器の放射性炭素年代の検討結果によると、3980~3820 cal BP前後の年代値が示される。よって、出土土器にもとづくVI層の放射性炭素年代としては、3980~3820 cal BP前後を一つの目安として採用できると考えられる。今回の調査区で得られた年代値を参照すると、最も古い年代グループである縄文時代後期後葉~晩期後葉の試料は、3450~2780 cal BP前後の較正年代を示しており、出土土器から推定されるVI層の年代値よりも新しい時期を示す。

以上、既往の発掘調査区である第2地区と今回の調査区の発掘調査結果と放射性炭素年代の関係を述べてきた。この検討結果にもとづくと、今回の調査区で得られた最も古い年代グループである縄文時代後期後葉〜晩期後葉の試料は、第2地区の基本層序のV層およびIV層の上面付近を除く層準に、年代的には対比されると考えられる。なお、縄文時代後期後葉〜晩期後葉の試料は、東区・第13-5層・土砂流堆積物の試料 No.2、西区・第13-9層・土壌化層の試料 No.11、西区・第13-13層・土砂流堆積物の試料 No.12、西区・第13-18層・土砂流堆積物の試料 No.13の4試料である。また、弥生時代後期の年代を示した西区・第11-1層・土壌化層の試料 No.9については、第2遺構面を構成するIV層上面付近と年代的に対比される可能性がある。

第2地区では、弥生時代後期~古代末頃の遺構が検出されるIV層上面の第2遺構面を被覆して、淘汰不良の砂礫混じりの泥層を主体する中世中頃の遺物を包含するIII層が、層厚0.4~0.8m程度堆積する。今回の調査区で得られた年代値を参照すると、平安時代~鎌倉時代の年代を示した試料は、第2

地区のIII層と年代的に対比されると考えられる。平安時代〜鎌倉時代の年代グループの試料は、東区・第 11-1 層・208 土器溜りの試料 No.1、西区・第 8 層(上位層)・舌状地形堆積物の試料 No.3、西区・第 9-2 層(図 23)・土壌化層の試料 No.6、西区・第 8 層(上位層)・舌状地形堆積物の試料 No.4、西区・第 8 層(下位層)・舌状地形堆積物の試料 No.5、西区・第 10-1 層・作土層の試料 No.7、西区・第 11-1 層・土砂流堆積物の試料 No.10、西区・第 10-2 層・客土層の試料 No.8 である。

2) 尾山遺跡

尾山遺跡の基本層序についてみると、現地表面下 3.0 ~ 2.5m 前後の層準では、縄文時代後期中葉の第 7a 層、縄文時代晩期~弥生時代前期の第 6a 層が累重する(後川編、2022)。今回の調査区で得られた年代値を参照すると、最も古い年代グループである縄文時代後期後葉~晩期後葉の試料は、第 7a 層堆積後以降から第 6a 層の形成段階に対比される。

また、弥生時代後期の年代グループは、年代的に弥生時代後期~古墳時代前期の第4層に対比される。平安時代~鎌倉時代の年代グループについては、古墳時代前期~中期の第3-2b層の上部に堆積する13世紀以降の泥層の第3-2a層と13~14世紀代の第3-1b層との対比が考えられる。

(4) 越谷遺跡と尾山遺跡の層序と堆積環境変遷

越谷遺跡の第2地区(大塚編,1997)と尾山遺跡(後川編,2022)の基本層序をふまえると、両遺跡がのる沖積錐もしくは小規模扇状地の斜面では、考古遺物による堆積年代で縄文時代後期前葉~中葉に、土砂流出が静穏化した可能性が捉えられる。当該期の地形面上では、堆積環境の安定化と地表での土壌発達の進行が継続する期間が存在したと推定される。尾山遺跡では、縄文時代後期以降から弥生時代前期頃まで、顕著な土砂流出は認められない。一方で、越谷遺跡では、縄文時代後期前葉以降のある段階に、開析谷の埋積が進行した状況が発掘調査結果から確認できる。埋積された開析谷の上面に位置する第2地区の第2遺構面では、弥生時代後期~古代末頃の遺構が検出されている。よって、開析谷の埋積は、弥生時代後期には既に終息傾向に転じていたと認識されるが、埋積時期の詳細については現状で不明な点が多い。第2地区で、弥生時代後期~古代の第2遺構面を被覆して中世の第1遺構面が形成されている状況から、越谷遺跡では、弥生時代後期以降も何らかの土砂流出の影響を受けていた可能性がうかがえる。弥生時代前期以降の断続的な土砂流出については、尾山遺跡でも確認できる。ただし、尾山遺跡では、古墳時代前期以降から古代もしくは中世前半にかけて、土砂流出がいったん静穏化した可能性がある。越谷遺跡の第2地区のIV層(第2遺構面)とIII層(第1遺構面)で検出された遺構・遺物をふまえると、越谷遺跡では、弥生時代後期以前のある段階から中世中頃もしくは後半以前のある段階まで、背後の開析谷からの土砂流出が比較的少なかった時期が存在した可能性がうかがえる。

以上、本報告では、今回実施した放射性炭素年代と、近傍の既往の発掘調査で得られた層序との関係に関して概略的な検討を試みた。越谷遺跡から尾山遺跡にかけての沖積錐もしくは小規模扇状地の斜面については、今後、より詳細な地質層序や地形発達史の検討を行っていく必要がある。

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・辻 康男

<引用・参考文献>

後川恵太郎編『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』(公財) 大阪府文化財センター、152p、2022 年

Bronk Ramsey,C.「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1) 337-360p、2009年

幡中光輔・関西縄文文化研究会編「西日本縄文時代における遺跡タイポロジー分析の実践と展開」『関西縄文時代研究の新展開 松 尾洋次郎さん追悼論集』関西縄文文化研究会、33-49p、2012 年

春成秀爾・小林謙一・坂本 稔・今村峯雄・尾嵜大真・藤尾慎一郎・西本豊弘「古墳出現期の炭素 14 年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』国立歴史民俗博物館、163、133-176p、2011 年

今村峯雄・設楽博己「炭素 14 年の記録から見た自然環境一弥生中期一」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『弥生時代の考古学 3 多様化する弥生分析』同成社、48-69p、2011 年

小林謙一『縄紋時代の実年代-土器型式編年と炭素 14 年代-』同成社、263p、2017 年

児玉幸多編『標準日本史年表』吉川弘文館、66p、2018年

森岡秀人・三好 玄・田中元浩総括 古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房、335-398p、2016 年

中村俊夫「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の 14 C 年代編集委員会編『日本先史時代の 14 C 年代』日本第四紀学会、 $^{3-20p}$ 、 200 0年

岡田憲一「関西縄文集落の一時的景観と時間的累積-墓地の分析から矢野健一氏の批判に答える-」関西縄文文化研究会編『関西縄文時代研究の新展開: 松尾洋次郎さん追悼論集』関西縄文文化研究会、13-32p、2012 年

大塚 隆編『越谷遺跡他発掘調査報告書: 伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群』名神高速道路内遺跡調査会、78p、1997 年

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, pE.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. 「The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP).」『Radiocarbon』62(4) doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020) 725-757p、2020年

若林邦彦「近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代-石川県八日市地方遺跡の研究成果との対比-」同志社大学考古学研究室編『同志社大学考古学シリーズXII 実証の考古学 松藤和人先生退職記念論文集』同志社大学考古学研究室、119-129p、2018 年

第7章 総 括

前章までで、東区・西区の発掘調査成果及び自然科学分析の成果について報告してきた。本章では、 越谷遺跡の地形環境変遷と土地利用について時代毎に報告し、総括としたい。

第1節 越谷遺跡の時期別消長

ここでは、今回調査のみでは不足する情報を、名神高速道路拡幅工事における前回調査 1 や、隣接する尾山遺跡の令和 $2\cdot 3$ 年度調査 2 や令和 4 年度調査 3 において検出された、遺構と出土遺物についても加え、地形環境の変遷と土地利用について、まとめておきたい。

縄文時代後期

今回調査では、縄文時代の遺構と遺物については、確認できなかった。

前回調査の第2地区第3遺構面の黒褐色粘土層(包含層)からは、縄文時代後期前葉の北白川上層式1・2期の壺・浅鉢・深鉢が、標高約17.5m付近で出土している。縄文時代の包含層があるとすると、第13層の下の次の層に存在していることになるが、今回は確認できなかった。

周辺では、尾山遺跡の微高地南側7区谷地形において、縄文時代後期前葉の縁帯文土器や後期中葉の深鉢等が、標高約9m付近から出土している。広瀬遺跡⁴⁾では、縄文時代後期中葉の元住吉山II式の浅鉢・深鉢が、標高9.6m付近で出土している。

縄文時代後期前葉頃から、淀川及びその支流、あるいはこれらを含む河跡湖や潟湖等の河畔に近い 所では、居住痕跡は未だ見つかってはいないが、漁撈活動等に伴う遺物の出土が確認されている。

縄文時代晚期·弥生時代前期~中期

突帯文土器・弥生時代前期~中期の遺構・遺物については、今回調査も含め越谷遺跡では発見していない。

段丘下の東側に隣接する尾山遺跡の令和 2・3 年度調査では、突帯文土器・弥生時代前期~中期の遺物が出土し、水田遺構(第 5a 層)や遺構も検出している。

弥生時代後期~古墳時代前期初頭

今回調査においても混入ではあるが、東区や西区の第2層~第11層の包含層において、この時期の遺物の小片が出土している。図化し得たものは少ないが、西区第2層で弥生時代後期後半の177壺底部がある。

前回調査の第 2 地区第 2 遺構面では、標高 18.7m 付近において検出された、15 基余りの土坑群の内の土坑 1 (長さ $2.3 \times in 0.7 \times in 2$ の4 m) と土坑 2 (長さ $3.4 \times in 1 \sim 1.4 \times in 2$ 0.8 m) から、墓壙かは不明であるが、弥生時代後期の土器(弥生時代後期後半古段階~中段階) が出土している。しかし、検出された 2 基の土坑以外に、弥生時代~古墳時代前期の遺構は検出されていない。

尾山遺跡の令和 2・3 年度調査では、2 面(第 4-2a 層・第 4-1a 層)の水田遺構の他に、微高地上で

は、五角形に見える大型竪穴建物(直径約 11 m)が、標高 9.5m 付近で検出され、遺物(弥生時代後期後半古段階~中段階)が出土している。

古墳時代前期~古墳時代中期

この時期の越谷遺跡の遺構・遺物は、前回調査においても今回調査でも確認できず、尾山遺跡の令和 2・3 年度調査で、わずかに遺物が出土している以外、集落の動態については不明である。

古墳時代後期~奈良時代前期

この時期の遺構・遺物は、決して多くはない。越谷遺跡や尾山遺跡では古墳時代後期の埴輪破片が 包含層等から出土しているが、遺構は検出していない。

越谷遺跡の周辺に所在していたと考えられる古墳については、その所在ははっきりしないが、尾山遺跡の令和 2・3 年度調査でも円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪が出土し、今回調査も 157 朝顔形埴輪と 158 円筒埴輪が出土している。古墳時代後期の川西編年 V 期にあたる遺物と考えられる 5)。埴輪の出土範囲は、当然ながら段丘面上の越谷遺跡や尾山遺跡西側低位段丘上の 11・12 区での出土量が多く、土砂流によって流されたか、中世以降の土地開発で削平された可能性が高い。

尾山遺跡西側の低位段丘上で発見された御所池瓦窯跡1号窯は、飛鳥寺東南禅院・飛鳥池瓦窯跡と同 范瓦を出す窯で、梶原寺・梶原瓦窯跡、郡家今城遺跡とも同笵瓦が存在する。飛鳥寺東南禅院に住まい した道昭の教化作善活動を行った淀川西岸地域で、同笵瓦の出土することが知られる⁶。窯構造は、ロ ストル式平窯に通じる過渡的な窯である。1号窯の操業期間は、飛鳥III・IV型式から平城II~III型式頃 で、7世紀後葉~8世紀前葉と考えられる。

奈良時代後期~鎌倉時代前期

長岡京期頃から平安時代前期については、この時期の遺構は確認できていないが、今回調査の東区第 2-6 層で、8 世紀末~9 世紀初めの 011 土師器丸底甕や須恵器杯身が、西区第 11-1 層で、9 世紀前半~10 世紀前半の 260 摂津型土師器甕が出土している。

平安時代中期から後期については、今回調査では、東区第 11-1 層の 208 土器溜りで、10 世紀後半の摂津型 148 土師器甕、11 世紀末~12 世紀前半の 149 東播系須恵器甕、10 世紀後半~11 世紀中頃の 150 越州窯系青磁鉢、12 世紀中頃~後半の 151・152 福建省系白磁碗が、西区第 8 層舌状地形堆積物で、10 世紀後半の II -2 型式 213 三河型甕、12 世紀後葉の楠葉型 II -3 型式 214・215 瓦器椀が、東区第 2-6 層で、12 世紀中頃~後半の 012 龍泉窯系青磁皿が、西区第 2-1~9 層で、11 世紀後半~ 12 世紀前半の 178 広東省・福建省系白磁碗が、西区第 2-10 層で、12 世紀中葉の楠葉型 II -2 型式 180 瓦器椀が出土している。

平安時代末~鎌倉時代前期については、今回調査では、東区第 11-1 層の 208 土器溜りで、13 世紀前葉の楠葉型III -2 型式 137・138 瓦器椀と、13 世紀初~前半の 153 龍泉窯系青磁碗が出土している。この時期の遺構は検出されておらず、この時期の尾山遺跡でも確実な遺構は無く、両遺跡ともに出土遺物量も極めて少ない。

鎌倉時代中期~南北朝時代

鎌倉時代中期から南北朝時代になると、これまでのような遺物のみの出土ではなく、遺構・遺物と もに増加する。

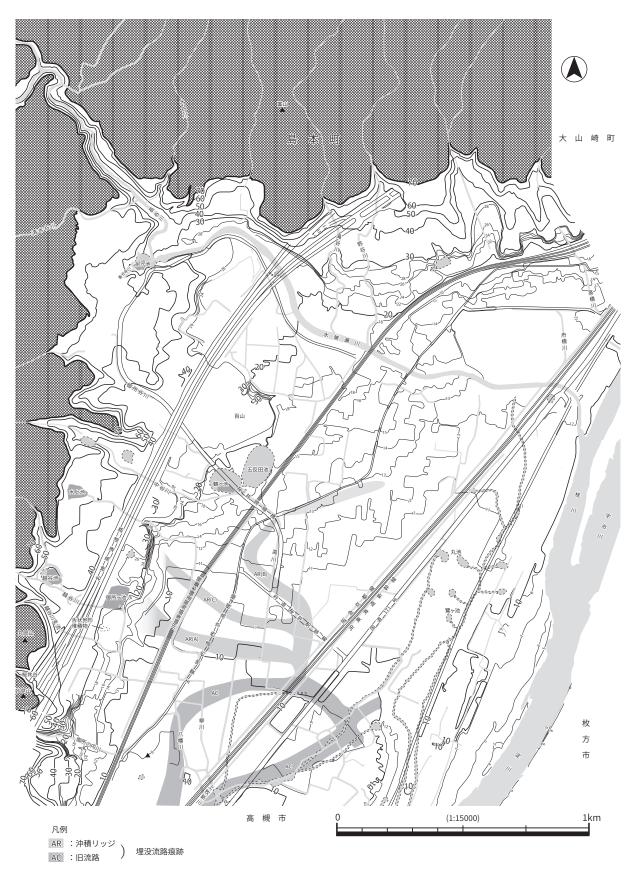
今回調査においては、東区第 2 遺構面では 101 溝、102・105 土坑、103・104 耕作穴、106 畦等が、東区第 3 遺構面では 201 溝、202 土坑、203・204 耕作穴、207 谷状地、208 土器溜り等の遺構が、西区の舌状地形堆積物(第 8 層)、西区第 2 遺構面では 201・202 窪、203~206 柱穴、第 10-2 客土層が、西区第 3 遺構面では第 11-1 層包含層がある。東区第 3 遺構面 208 土器溜りは、最終時期が 6C 段階の13 世紀中葉頃に、西区舌状地形堆積物(第 8 層)は最終時期が 6C 段階に近い 7A 段階の13 世紀後葉頃と考えられた。

前回調査では、第2地区第1遺構面の包含層と土坑1・2・19・20・23~25が、第2遺構面の井戸1がある。包含層では多くの土師器皿とともに、13世紀前半~中頃の福建省系白磁四耳壺(III-2類)、13世紀後半の備後系吉備型土師器椀⁷⁾が出土している。比較的出土土器の量が多かった土坑2では、多くの13世紀後葉の7A段階の土師器皿と、13世紀中頃の備後系吉備型土師器椀、13世紀後半~14世紀初頭の東播系須恵器片口鉢(III-3類)、13世紀中葉の楠葉型III-3型式の瓦器椀、丸瓦が出土している。第2遺構面の井戸1では、13世紀後葉の7A段階の土師器皿と、13世紀初~前半の龍泉窯系片彫り蓮華文青磁碗(IIa類)等が出土している。他の遺構についても、出土土器の時期は7A段階で大きく変わらない。

尾山遺跡の令和 2・3 年度調査では、2 区の中央部が近世には削平されていたため、深い遺構以外は残存していない。このため、遺構が残るのは1・2 区の東側水田畔と西側の山側のみである。1 区・2 区の遺構には、167 池泉と一連の装置である 211 平坦面、131・132 井戸、それに掘立柱建物 1 と掘立柱建物 3 とされた 2 棟がある。3 区の 271 土坑がある。大部分の遺構の時期は、図 8 の平尾編年の6C・7A ~ 7C 段階(1230 ~ 1350 年頃)の鎌倉時代中期~南北朝時代の範囲で、一部、8A 段階(1350 ~ 1380 年頃)の南北朝合体の頃までの土器を含む。

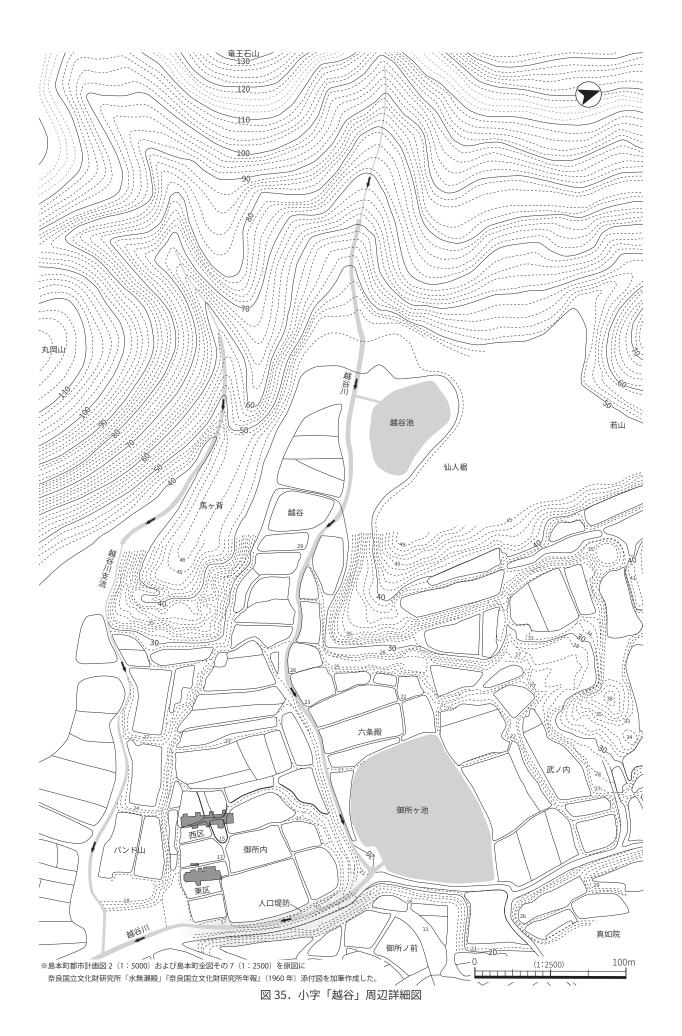
図 34 は、昭和 62 年測量島本町全図を原図に、この図の等高線と主要な道路・鉄道に、昭和 5 年測量図の河道と池を追加し、空中写真判読による埋没旧河道(暗色網掛)と沖積リッジ(明色網掛)⁸⁾を重ねた図である。図 35 は、昭和 62 年測量島本町全図を原図に、名神高速道路建設以前の昭和 34 年測量奈良文化財研究所測図 ⁹⁾を重ね、調査地が所在する越谷周辺の棚田、水路・池、小字名、調査区、水路名等を加えた図である。

図 35 より、越谷川の源流部を見てみる。小字「越谷」の谷を流れる越谷川の水は、竜王石山東麓に源をもち、東側に約 600 m流れて、現在は一旦、溜池である御所池に貯水される。この間、谷が大きく開けた標高 40 m付近から標高 15 m付近までの、延長約 350 m、谷口で幅約 120 mに広がる範囲に、谷水田がみられた。谷が大きく開けた標高 40 m付近の北側には、谷水田にとって大切な、水温調節の機能をもつ越谷池がある。稲は水が必要な時期に不足すると、障害を受けやすい植物であるとともに、日中の水温が 25° C を下ると、出穂の遅れや不稔の発生が生じるといわれる 10)。谷水田にとって溜池は、重要な施設である。この越谷池に流入する水路は、他にも図 34 からは、小字「仙人裾」北西の中谷からも越谷池に流入している。御所池に貯水された水は、水量を調整して、東進していた越谷川を90°南に折れ曲がり、越谷を横断して小字「馬ケ背」から小字「バンド山」へと続く細尾根を横断する。



※島本町発行(昭和 62 年測量 平成 23 年修正)「島本町全図 1:2,500」を原図に作成した。

図 34. 島本町内等高線図



この間の延長約130 m、基底幅16~20 m、上幅5~7 m、高さは西側が1~2 mで東側は4~5 m の人工堤防を造り、この上を灌漑水路と道としている。御所池が作られる以前の越谷川は、真っすぐ東側に流れていたようで、その旧河道痕跡が水田区画として残っている。尾山遺跡の令和2・3 年度調査の11・12 区で確認された埋没旧流路は、越谷川の旧流路痕跡であって、土砂流堆積物の高まり(AR;沖積リッジ)や谷地形(AC;旧流路)として痕跡を残す。図34の沖積リッジ AR(A)は、越谷川が造った大規模な沖積リッジである。人工堤防を南に過ぎ、小字「バンド山」の尾根を越えたところで、竜王石山と丸岡山の間を源流とする越谷川支流が合流する。流路はさらに御所池から約270 m南に延びた小字「柳原」、丸岡山と妙見山の間の桜井谷を源流とする既存の八幡川に合流して東に流れ、さらに柳川が分離して、高浜方面に流れる。この溜池や水路網による灌漑範囲は、図2の北から小字の「六条殿」「御所内」「越谷」「御所内」「バンド山」「御所ノ前」「平井垣内」「南山田」「五反田」「ミドロ」で、「尾山」は南側傾斜の地形であることから、微高地を含む丘陵側の一部と考えられる。

この開発は、今回の東区第3遺構面の207谷状地(開析谷)を埋めているのが、第11-1層堆積後であることから、208土器溜り以降の時期であることは確実である。さらに、西区第2遺構面の客土層第10-2層に含まれる遺物の時期以降である。その時期とは、6C段階の13世紀中葉以降で、開発領主¹¹⁾による開発であったと考えられる。

しかし、14世紀後半には遺物量も減り、尾山遺跡の微高地上の遺構群も消滅する。

室町時代以降

室町時代になると、越谷遺跡では、出土遺物も土師器の小皿が少量出土する程度で、殆ど出土しなくなる。その後の越谷遺跡の景観は、畑や水田などの耕作地となったようで、洪水による堆積は時折みられるが、近世以降大きく変わらなかったようである。

<註・引用文献>

- 1) 大塚 隆・川端博明ほか『越谷遺跡他発掘調査報告書-伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群-』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2集、1997年
- 2) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第43集・(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第316集、2022年
- 3) 木村友紀・辻 広志・日紫喜勝重ほか『島本町文化財調査報告書-尾山遺跡発掘調査報告書-』島本町文化財調査報告書第 48 集、2022 年
- 4) 久保直子・木村友紀・大西晃靖『大藪浄水場送水施設整備 (土木・建築)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-広瀬遺跡発掘 調査報告書-』島本町文化財調査報告書第 24 集、2013 年
- 5) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、1978年
- 6) 網伸也「畿内の古代寺院と道昭」『古代山崎の架橋と造寺』2019年奈良文化財研究所編『飛鳥池遺跡発掘調査報告書』奈良文化財研究所学報第71冊、2021年
- 7) 鈴木康之「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 V』 広島県教育委員会、1996 年
- 8) 辻康男「広瀬遺跡の自然科学分析」島本町文化財調査報告書第24集、21-26p、2013年
- 9) 森 蘊「水無瀬離宮跡並に伝桜井御所跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報』1960年
- 10) 角田公正「水温と稲の生育・収量との関係に関する実験的研究」『農業技術研究所報告』11 号、農林省農業技術研究所、75-

174p、1964年

11) 戸田芳美『日本領主制成立史の研究』岩波書店、1967年 大山喬平『日本中世農村史の研究』岩波書店、1978年

第2節 舌状地形堆積物の堆積時期

1. 放射性炭素年代測定による堆積年代

舌状地形堆積物が堆積した時期については、堆積物である第8層より出土した3点の炭化物について加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施し、調査成果を第6章に報告した。この結果、西区西壁第8層上位層より採取した No.3 は、2 σの較正年代が1223~1273 cal AD、西区西壁第8層上位層より採取した No.4 は、2 σの較正年代が1154~1220 cal AD、西区東壁第8層下位層より採取した No.5 は、2 σの較正年代が1157~1230 cal AD であった。つまり、第8層で採取した炭化物試料は、No.4・5が12世紀後半~13世紀前葉の2点、No.3が13世紀中葉の1点であったということである。ここでは、最も新しい13世紀中葉が、第8層の堆積年代に近いことが考えられる。深掘り調査最下層の土石流・土砂流堆積物である第13層は、東区西壁第13-5層より採取した No.2は、2 σの較正年代が934~830 cal BC、西区東壁第13-9層より採取した No.11は、2 σの較正年代が

は、 2σ の較正年代が $934\sim830$ cal BC、西区東壁第13-9 層より採取した No.11 は、 2σ の較正年代が $1465\sim1385$ cal BC、西区東壁第13-13 層より採取した No.12 は、 2σ の較正年代が $1438\sim1369$ cal BC、西区東壁第3-18 層より採取した No.13 は、 2σ の較正年代が $1407\sim1260$ cal BC であった。この様に、第13 層で採取した炭化物試料は、No.11 ~13 が縄文時代後期後葉~晩期前葉、No.2 が縄文時代晩期中葉~後葉に相当し、前回調査 11 の成果とも一致する。

第8層の下層で第13層までの第9~11層については、西区東壁第9-3層より採取したNo.6は、2のの較正年代が1225~1279 cal AD、西区東壁第10-1層より採取したNo.7は、2のの較正年代が1167~1261 cal AD、西区東壁第10-2層(客土層)より採取したNo.8は、2のの較正年代が1164~1233 cal AD、西区東壁第11-1層より採取したNo.9は、2のの較正年代が46 cal BC - 71 cal AD、西区東壁第11-2層より採取したNo.10は、2のの較正年代が1210~1269 cal ADであった。この内、No.9は弥生時代後期に相当し、前回調査第2遺構面の炭化物が混入したと考えられる。No.7とNo.8は、12世紀後半~13世紀前半に相当し、No.6とNo.10は、13世紀前葉~13世紀中葉に相当する。ここでも、新しい13世紀中葉が、第9~11層の堆積年代に近いことが考えられる。

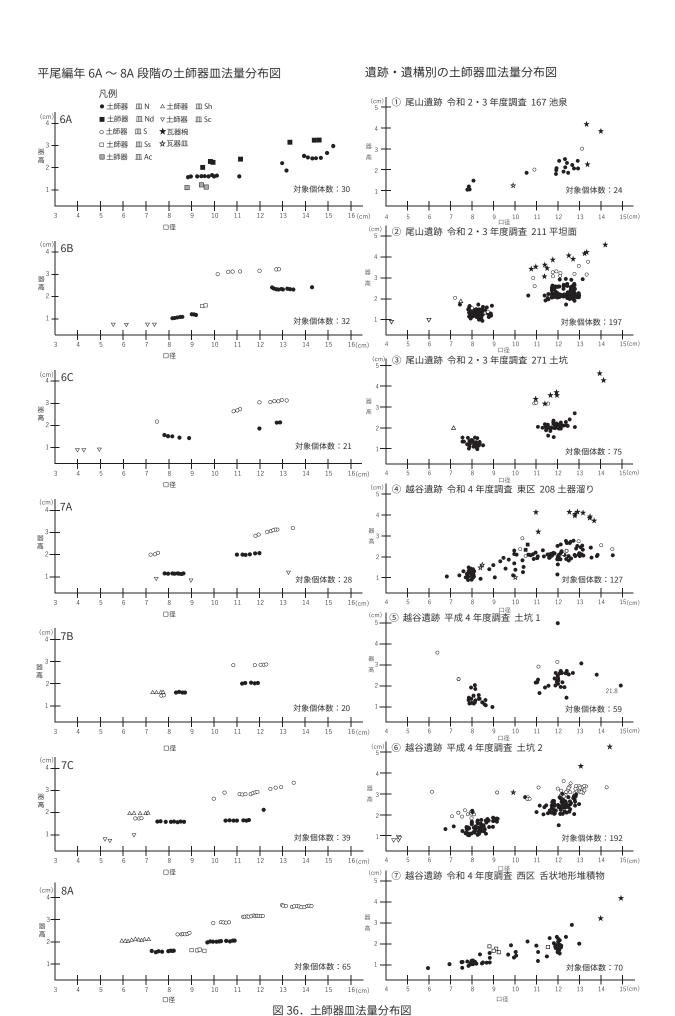
2. 出土土器による堆積年代

次に舌状地形堆積物の第8層より出土した遺物、特に消耗の早い土師器皿・椀について、図8の平 尾編年²⁾を用いてその位置付けを行う。

図 36 は、土師器皿法量分布図である。縦 2 段の内の左段は、平尾編年の 6A ~ 8A 段階(1170 ~ 1380 年頃)の標識資料の法量分布図である。器種については、凡例に記した。縦 2 段の内の右段は、越谷遺跡の前回調査(土坑 1・2)と今回調査(東区 208 土器溜り、西区舌状地形堆積物)、尾山遺跡の令和 2・3 年度調査 ³⁾ で検出した主要な遺構(167 池泉、211 平坦面、271 土坑)において出土した、土師器皿に瓦器椀・瓦器皿も含めて法量分布図を作成した。対象個体数は、各右下に記載した。

①~③は尾山遺跡の令和 2・3 年度調査の遺構で、①は 167 池泉、②は 211 平坦面、③は 271 土坑である。⑤・⑥は越谷遺跡の前回調査の遺構で、第 1 遺構面の土器集積土坑である⑤は土坑 1、⑥は土坑 2 である。④・⑦は越谷遺跡の今回調査の遺構で、④は東区 208 土器溜り、⑦は西区舌状地形堆積物である。

⑦舌状地形堆積物出土遺物は、N 系列の口径が 6 ~ 13 cmで、6 cm、7.5 ~ 9 cm、10 cm、11 ~ 13 cm



に集積がみられ、 $11 \sim 12$ cmと $7.5 \sim 9$ cmにピークがみられる。これを平尾編年と見比べると、今回出土品にへそ皿(Sh)が無いこと、ピークと口径の範囲が、平尾編年の 7A 段階とほぼ一致することが明らかである。

前回調査第1遺構面の⑤土坑1、⑥土坑2とも、ほぼ重なっていることが見て取れる。⑦舌状地形堆積物の器高がやや低いのは、前回調査の土坑1・土坑2に皿Sが多く含まれるためであるが、舌状地形堆積物にはこれほどの皿Sは含まれていない。土坑1・土坑2が、土器集積土坑という性格に関わる現象であろうか。第2遺構面の井戸1については、個体数が少なく、法量分布図を作成していないが、口径が12~13 cmにあり、6C 段階に近い古い様相を持つ。

次に今回調査の④東区 208 土器溜りを見てみると、N 系列の口径が $6.8 \sim 14.5$ cmと横に長く延びるが、 $6.8 \sim 8.4$ cm、 $8.5 \sim 10.4$ cm、 $10.5 \sim 14.5$ cmに集積がみられ、出土数が多い部分は $7.6 \sim 8.4$ cm と $12 \sim 13$ cmにピークがみられる。これを平尾編年と見比べると、今回出土品にへそ皿(Sh)が無いこと、ピークと口径の範囲が、平尾編年の 6C 段階とほぼ一致する。これを⑦舌状地形堆積物と比べると、④東区 208 土器溜りの方が、口径 12 cmを超えるものが多く、7A 段階とは様相を異にしている。

尾山遺跡の令和 $2\cdot 3$ 年度調査の 3 遺構と比較してみる。これらの遺構は、いずれも時間幅をもつ遺構であるが、その傾向を窺うことはできる。① 167 池泉では N 系列の $7.8 \sim 8.1$ cm、 $12 \sim 13$ cmに集積が、② 211 平坦面では N 系列の $7.8 \sim 9$ cm、 $11.2 \sim 13$ cmに集積が見られ、6C 段階に始まる遺構であることを示す。③ 271 土坑は、① 167 池泉や② 211 平坦面と見比べても、ピークの範囲が 0.5 cmほど小さくなっているのが分かる。これらは 7A 段階に始まる遺構と判断される。この③ 271 土坑は、へそ皿(Sh)を含むもので、その点が⑦舌状地形堆積物とは異なるが、ほぼ同時期と考えられる。へそ皿(Sh)は、この 7A 段階に始まるとされる器種である。この差が 7A 段階内での時間差なのか、遺構の性格によるものかは、不明である。

これまで述べてきたように、舌状地形堆積物は、越谷遺跡の今回調査東区 208 土器溜りの 6C 段階よりも新しく、前回調査第 1 遺構面と同じ 7A 段階の遺物群であること、尾山遺跡の令和 $2\cdot 3$ 年度調査の微高地上遺構では、167 池泉や 211 平坦面よりも、やや遅れる 271 土坑に近い時期の遺構であると指摘することができた。これを略年代でいうと、13 世紀後葉の $1260\sim 1290$ 年頃となる。

3. 舌状地形堆積物(第8層)の堆積年代

この様に舌状地形堆積物(第 8 層)の堆積年代を、加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定による、No.3 試料の 2σ の較正年代値 $1223\sim1273$ cal AD か、平尾編年の 7A 段階の $1260\sim1290$ 年頃と絞ることができた。いずれにしても土石流・土砂流が発生したのは、鎌倉時代中期の 13世紀後葉以降での出来事であったと結論できそうである。

<註・引用文献>

- 1) 大塚 隆・川端博明ほか『越谷遺跡他発掘調査報告書-伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群-』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第2集、1997年
- 2) 平尾政幸「土師器再考」『史洛 研究紀要』第12号、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、2019年
- 3) 後川恵太郎『尾山遺跡・御所池瓦窯跡』島本町文化財調査報告書第 43 集・(公財) 大阪府文化財センター調査報告書第 316 集、2022 年

第3節 舌状地形堆積物 (第8層) と土石流・土砂流堆積物の成因

1. 土石流・土砂流の成因

今回の調査において、東区と西区の壁面に残されていた土石流・土砂流堆積物の痕跡は、舌状地形堆積物である第8層ばかりではない。括弧書きの土壌化層(a')も含めると、西区では、下層から第13層、第11-2層、第9-4層、(第9-3層)、第9-1層、第8層、(第3層)、第2-10層、第2-8層、第2-5層が少なくとも該当する。この内、第13層は縄文時代後期後葉~晩期前葉、縄文時代晩期中葉~後葉に相当する。第11-2層・第9-4層・(第9-3層)・第9-1層は、6C段階の鎌倉時代中期の13世紀中葉に相当する。第8層は前節で検討したように、7A段階の鎌倉時代中期の13世紀後葉に相当する。(第3層)は土壌化(a')が進む土砂流堆積物で、中世と考えられる。第2-10層は、戦国期の16世紀末頃の堆積と考えられる。第2-8層と第2-5層については、江戸時代の土砂流と考えられる。

これまでの研究による土石流・土砂流の成因は、大雨や地震時などによって、渓流や山腹斜面等の 堆積物が不安定化し、濁流として流れ下る現象とされる。流下過程では、基盤岩の一部、樹木、さらに 堆積物(岩屑、作土層、包含層)などを、根こそぎ巻き込むといわれる。以下には、本町に係る特徴的 な地質、地震調査研究の成果、関連する文献史料を掲げ、舌状地形堆積物の堆積時期を考古学以外の分 野からも探ってみる。

なお、土石流・土砂流の成因となった、大雨や地震の記録は、主に貴族や僧侶の日記であり、京都での記載を中心としていて、他国の記載はほぼ無いのが実状であるが、摂津に係るものを中心に分析してみた。

2. 周辺の地質構造と堆積物 1・2)

本町を含む西南日本内帯の東部は、大きく見て三つの地質構造区に分かれている。北から飛騨変成岩類の分布する飛騨帯、その南には非変成の古生層を主とした花崗岩に貫かれている丹波帯、さらにその南に花崗岩と古生層の変成岩が分布する領家帯の3構造区が帯状に分布している。

本町は南東部の市街地の低地部、桜井一山崎の丘陵部、水無瀬川上流尺代一大沢の山地部からなっている。丹波層群の古生層からなる基盤岩類が山地部に分布し、丘陵部には大阪層群および崖錐が見られる。水無瀬川両岸には、小規模な河岸段丘が分布する。低地部は小河川が作る扇状地と沖積層からなり、淀川河岸では淀川の堆積物が厚く堆積する。

丹波層群(古生層)には、出灰層と高槻層とが分布し、この二つの地層の境界は出灰層の輝緑凝灰岩が上限と考えられる。出灰層は釈迦岳一尺代一大山崎間に分布し、神内断層によって東西に二分される。岩相は主として頁岩、砂岩、およびそれらの互層からなり、数枚のチャート、輝緑凝灰岩を伴っている。高槻層は神内断層以西では水無瀬川の南北約1.7kmにわたり分布し、その南限は天王山断層によりたたれている。神内断層以西の本層は桜井一原をとおる向斜構造をなしているが、その南翼部は狭い。本町に分布する高槻層は砂岩および砂岩の互層からなり頁岩の発達は少ない。またチャート・輝緑凝灰岩の発達は認められない。これらの古生層は一般に東西性ないし北北西一南南東の走向を示すが、傾斜は中角度の北傾斜を示す。しかしこれもすぐ南の背斜構造により南傾斜に戻る。神内断層により西側の古生層は東側の古生層に対し高角度で衝上する。神内断層東部は山崎、東大寺の北で天王山断層によって中角度で大阪層群の上に衝上する。

大阪層群は、山崎、桜井北の丘陵地域に分布する。岩相は粘土、シルト、砂、礫層で、僅かに炭化物を含むシルト層や非連続な火山灰層がある。砂層は一般に中粒で、小礫を含むことがある。砂層の底面にはしばしば流痕や偽層が観察される。粘土層は淡水~汽水性で、その中から淡水性の二枚貝やヒシの化石が発見されることがある。天王山トンネルの崖の粘土層中には5~7㎝の厚さの非連続の白っぱい火山灰層が見られる。基底部の礫層は水無瀬採石場および神内西に見られ、ここでは海抜120~130mの山頂部に分布し、古生層を不整合に被覆している。礫種は砂岩、チャートが多い。

河岸段丘堆積物は、水無瀬川に沿って小分布する。厚さは4m以下で、礫種は古生層の砂岩、 チャートの亜角礫である。

崖錐堆積物は山地部と丘陵部の接する部分に分布し、古生層、大阪層群を被覆し、さらにそれは神内 断層、天王山断層をも被覆している。崖錐の基質の団結度は高く、砂岩、チャートの角礫が含まれる。

岩脈は小規模の貫入として見られる。釈迦岳頂上、尺代の南西、川久保に分布している。厚さは一般に 1m 前後である。角閃石玢岩からなり暗灰色で細粒緻密な岩石である。風化すると灰白色ないし淡褐色を呈する。

近畿の地形は、北西区、中央区、南区の三つに区分できる。本町は北西区の東南端が中央区に接する境に位置するので、北側の山地(西山山地を構成するポンポン山山地と天王山山地)、南部の淀川低地、さらに両者の間に幅狭く介在する丘陵台地の三つに分けることができる。こうした地形の配列は、隆起と沈降が大きな褶曲運動とそれに伴う断層の結果生じたものとされている。北西区は中国高原の延長として一般に山であるが、準平原状地形であるため平均高度は標高 600m 前後で、とくに高峻な山地はない。

北摂山地の東を占めるポンポン山山地は、東側を西山丘陵に臨む急傾斜面によって限られ、西側は安威川とその支流の仁科川に及ぶ。周りの天王山山地等に比べ、明瞭な線で一段高くなっている。山地の大部分は、古生層の砂岩・頁岩やチャートからなるが、中央を北から南へ流れる芥川の谷で東西に分かれる。

本町北部はこのポンポン山山地の東部にあたるが、小塩山(標高 641 m)、ポンポン山(標高 678.9 m)から釈迦岳(標高 631.4 m)にかけて、定高性のある山陵が南北に連なり、本町域における最高所となっている。釈迦岳南方の谷底平野は、勾配が緩やかで水田に利用されている。

天王山山地はポンポン山山地の東南側に、一段低く階段状に突き出した山地で、高度が標高 250 ~ 300 mの定高性が極めて著しい。淀川低地と京都盆地に対して、直線的な比高 200 ~ 250 mの急斜面で臨んでいる。構成する地質は、古生層の砂岩、頁岩である。

天王山山地の西側と南側の山麓には、丘陵地形が分布する。天王山西側では善峰川の南、小畑川を東の分布限界として、洪積段丘中位面と下位面が広く分布している。これらは西山丘陵と呼ばれ、角礫・円礫が上にのり、下部に大阪層群の砂・粘土・シルトの互層が見られ、低地との間は明瞭な段丘崖が認められる。この西山丘陵に対比して、天王山山地南側の島本町域では丘陵・台地は局地的にしか見られず、発達は極めて幅狭い範囲に限定される。

3. 調査地周辺の断層と被害地震

次に本町周辺の断層を、図37により見てみる。

神内断層 ³⁾ は、神内から尺代を通るほぼ南北性の断層で、地形的にもよく現れている。地蔵山宅地

造成地の西端崖の露頭では古生層が著しく破砕され、数本の N20 $\sim 40^\circ$ W、 $50 \sim 80^\circ$ W を示す断層 と数帯の断層粘土が見られる。とくに頁岩、輝緑凝灰岩の破砕は著しく頁岩は黒色粘土化し、凝灰岩は 緑色粘土化している。ここでは砂岩、頁岩、凝灰岩層が露岩し、各岩層の境界部は断層による滑り面を 持っている。

天王山断層は、名神高速道路沿に観察される。水無瀬川東方では、名神高速道路北側の採石場跡で観察される。ここでは断層の北側にある高槻層が N50 ~ 60° E の走向で、南に 60 ~ 70°の急傾斜をもつ断層によって大阪層群の上に衝上している。古生層の砂岩は約 4m の幅で著しく破砕され、黒色粘土化、角礫化されている。これと接する大阪層群は、背斜構造をなし、背斜の南翼が西側の崖で急傾斜しているのが観察される。この断層の西の延長部は、水無瀬川西方のイロコケ山の中学校用地(現在の町立第二中学校)で観察される。

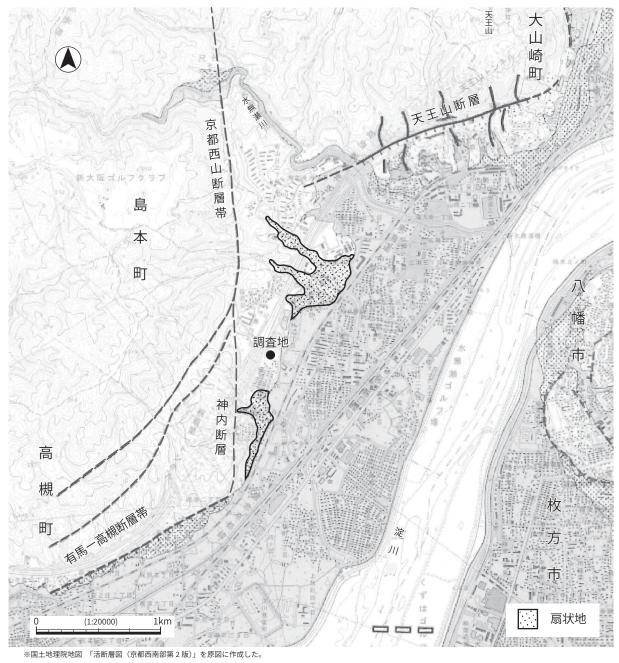


図37. 島本町周辺の断層図

有馬-高槻断層帯 4) は、北摂山地と大阪平野・六甲山地の境界部にほぼ東北東から西南西に延びる長さ約55 kmの活断層帯である。この断層帯は、中・古生代の地層(丹波層群、有馬層群)と白亜紀の花崗岩との境界を、部分的に並走、分岐しながら断続する大小多数の断層からなるが、東部では2つの断層が並走して地溝帯を形成していることが多い。活動度の高い(A~B級)右ずれ北側隆起の逆断層であり、少なくとも東部(宝塚-高槻)では過去3千年間に3回活動しているといわれる。最新の活動は、文禄5年(1596)の文禄伏見地震(慶長伏見地震)であり、そのずれは3m程度であったと推定される。

以下には、山城・摂津地域に被害のあった縄文時代晩期以降の大きな地震を、文献 ⁵⁾ と断層試掘調査の ¹⁴C 年代試料が整合するものについて、以下に記す。

- ・縄文時代晩期の紀元前 1,000 年頃の地震※
- ・天長4年(827)〔山城〕※
- · 天延 4 年 (976) [山城・近江]
- ・元暦2年(1185)〔山城・大和・近江・美濃・伯耆〕
- · 文安 6 年 (1449) [山城・大和]
- ・天正7年(1579)〔摂津〕※
- ・文禄5年(1596)「文禄伏見地震」(慶長伏見地震)〔畿内全域〕※
- ・寛文2年(1662)「寛文地震」〔近江・若狭・山城・摂津・大和・河内・和泉・丹後ほか〕

※は、有馬-高槻断層による地震。

縄文時代晩期の地震については、放射性炭素年代測定試料 No.2(較正年代 934 \sim 830 cal BC)の東区西壁第 13-5 層が、この地震により堆積した可能性がある。第 13 層の中では第 13-4 層とともに水平方向に堆積し、最も上層の土石流・土砂流堆積物である。おそらく、東区西壁第 13-1 \sim 5 層が縄文時代晩期の堆積物と考えられる。

天長 4 年 (976) と元暦 2 年 (1185) の地震に該当する堆積層は、今回調査の範囲内では確認できていない。

舌状地形堆積物(第 8 層)は、前節による西区西壁第 8 層の放射性炭素年代測定試料 No.3(較正年代 1223~1273 cal AD)の結果から、13 世紀中葉が堆積年代と考えた。また出土土器からは、平尾編年 7A 段階の 13 世紀後葉の 1260~1290 年頃と考えられた。この時期の京都で記された地震には、寛元 2 年(1244)、正嘉元年(1257)、正元元年(1259)、文永 5 年(1268)、弘安 11 年(1288)、正応 5 年(1292)、永仁元年(1293)、正安 5 年(1302)がある。また鴨川の洪水記録には、正嘉 2 年(1258)、弘安 9・10 年(1286・1287)、正安 5 年(1302)等がある。これらの中から堆積時期を決定することはできないが、この内の地震と大雨・洪水のどれかが関わって、舌状地形堆積物(第 8 層)が堆積したものと推測される。

文安6年(1449)と天正7年(1579)の地震に該当する堆積層は、今回調査の範囲内では確認できていない。なお、天正7年(1579)の地震は、摂津を中心としたものであり、大きな被害が予想されるが、地震に対応する堆積層は確認できなかった。

豊臣秀吉の伏見指月城天守が倒壊したことで知られる、文禄 5 年(1596)の「文禄伏見地震」(慶長伏見地震)により、西区第 3 層・東区第 3-1 層が、堆積した可能性がある。これについては、第 3 層堆積後の第 2-6 層出土遺物の年代観から、推測することが可能である。また、この時期は前年の文禄 4 年

から慶長20年(1615)頃まで、毎年のように大雨による洪水が起きており、蓋然性が高い。

寛文 2 年(1662)の「寛文地震」は、近畿全域から三河・駿河・信濃にまで被害が及んだもので、 西区第 2-8 層・東区第 2-5 層が、この地震により堆積した可能性がある。この寛文の前の萬治 3 年 (1660) から寛文 3 年(1663)頃においても、大雨や洪水が頻発している。

このように、地震と大雨は、土石流・土砂流堆積物にとっては、大きな成因となっているといえる。

<註・引用参考文献>

- 1) 島本町史編さん委員会編『島本町史』本文篇・史料篇、島本町役場、1975・1976年
- 2) 宮地良典・楠 利夫・武蔵野實・田結庄良昭・井本伸広『京都西南部地域の地質』地域地質研究報告京都(11)第 39 号、独立行 政法人産業技術総合研究所・地質調査総合センター、2005 年
- 3) 植村善博「京都盆地西縁の変動地形と第四紀テクトニクス」『立命館地理学』第2号、37-56p、1990年
- 4) 地震調査研究推進本部・地震調査委員会編『有馬-高槻断層帯の評価』2001年 谷美由起・小松原琢・岡田篤正・野原壮「有馬-高槻断層帯・坊島断層の断層露頭」『活断層研究』24、167-173p、2004年 岡田篤正「天正地震とこれを引き起こした活断層」『活断層研究』35号、1-13p、2011年 西山昭仁・原田智也「1596年文禄伏見地震に関する地震像の検討」『京都歴史災害研究』第23号、15-28p、2022年 小松原琢「寛文二年(1662)近江・若狭地震の地震像と被災地区の歴史地理的考察」『京都歴史災害研究』第5号、21-38p、2006年
- 5) 立命館大学歴史都市防災研究所編「京都歴史災害年表」『京都歴史災害研究』第6号、2006年

第4節 調査成果の意義

今回の発掘調査は、東区と西区に分けての小面積の調査であったが、主に中世の遺構と遺物を検出した。今回調査の成果について、簡単にまとめておく。

- ・越谷遺跡では、開析谷の埋積が弥生時代後期後半には収束を見せ始め、その後も土石流・土砂流に よる埋積を受けていたが、古墳時代後期から古代末には次第に土砂の堆積も静穏化し、中世前期に は大規模な土地開発が始まった。
- ・鎌倉時代中期の13世紀中葉以降に始まる土地開発は、客土により開析谷を埋め、棚田を造り、天井川や溜池を造るなどの大規模なものであったと考えられる。開発間もない時期には、今日まで残る舌状地形を残す土石流・土砂流が発生するなど、土砂流災害を何度も受けながらも、耕作は今日まで継続して営まれてきた。

													※()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
001	東	表採	軒丸瓦			瓦当径 (15.0)		瓦当厚 3.0	瓦当部 1/3	中房蓮子1+8 複弁8葉蓮華文 珠文残存25(復元56)	10YR8/2 灰白	粗	平安時代
002	東	1面 包含層 2-4·5層	土師器	Ш	∭.N 6C•7A	(9.1)	1.3	6.0		内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	5YR7/6 橙	密良	
003	東	1面 包含層 2-4·5層	土師器	Ш	∭Ss 6C	(9.0)				内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/2 灰自	密良	
004	東	1面 包含層 2-4·5層	土師器	Ш	∭S 6C	(11.8)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 体部下部未調整	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
005	東	1面 包含層 2-6層	土師器	Ш	∭N 11A•B	(6.0)			口縁部~ 体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
006	東	1面 包含層 2-6層	土師器	Ш	∭.N 7A	(7.4)	1.1	(6.0)		内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
007	東	1面 包含層 2-6層	土師器	Ш	∭.N 7A	(9.9)	1.1			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
008	東	1面 包含層 2-6層	土師器	Ш	III.N 6C	(8.8)	1.8		口縁部~ 体部1/6	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
009	東	1面 包含層 2-6層	土師器	▥	∭N 7A	(12.9)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
010	東	1面 包含層 2-6層	土師器	Ш	∭N 7A	(15.5)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
011	東	1面 包含層 2-6層	土師器	蓰	丸底甕				口縁部 1/8以下	内面口唇部ヨコナデ、口縁部〜 頸部板ナデ 外面口縁部ヨコナデ、頸部ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	密良	8c末
012	東	1面 包含層 2-6層	青磁	Ш	龍泉窯系 D期 I -1C	(10.1)				内面ロクロ成形→(櫛目文・刻劃 文)→施釉 外面ロクロ成形→施釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	密良	12c中葉~後半
013	東	1面 包含層 2-6層	平瓦					厚 1.3~ 1.9		凹面布目 凸面縄目タタキ→ハナレ砂 端面へラ切り	N4/0 灰	良	摩滅
014	東	1面 包含層 2-6層	平瓦					厚 2.3	極小	凹面タテ板ナデ 凸面コビキB→ヨコナデ 側面へラ切り、凹面端部面トリ	N5/0 灰	良	
015	東	1面 包含層 2-6層	平瓦					厚 1.4~ 1.8	極小	凹面コビキB 凸面タテ縄目タタキ→ヨコナデ 端面へラ切り	10YR1/6 褐灰	良	
016	東	1面 包含層 2-6層	丸瓦					厚 1~1.2		凹面コビキAB→布目圧痕 凸面コビキAB→タテ縄目タタキ →ヨコナデ 側面ヘラ切り、凹面端部面トリ	5Y7/1 灰自	良	
017	東	1面 包含層 2-6層	平瓦					厚 2.0		凹面コビキAB→タテナデ→ハナレ砂 凸面タテ縄目タタキ→ハナレ砂	N6/0 灰	良	
018	東	1面 包含層 2-6層	丸瓦					厚 1.05		凹面布圧痕→ナデ 凸面タテ縄目タタキ→ヨコナデ 側面2面ヘラ切り	10YR1/6 褐灰	良	摩滅
019	東	1面 包含層 2-6層	鉄製品	釘カ				厚 0.5					先端を欠く
020	東	004 耕作溝 2-6層	平瓦					厚 1.85	極小	凹面コビキAB 凸面コビキAB→タテ縄目タタキ	N5/0 灰	良	16c末以降

							表	6-2.	遺物観察	表		*	(()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	□径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
021	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(7.6)	1.3			内面口縁部~体部ョコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ョコナデ、底 部ユビオサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
022	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(6.8)	1.1		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
023	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(7.0)	1.1		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
024	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(7.7)	1.1		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	
025	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(7.4)	1.1	(4.4)	口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
026	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(7.8)	0.9		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
027	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(7.8)	1.5			内面口縁部~体部ョコナデ 、底部ユビオサエ→ナデ 外面口縁部~体部ョコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/6 橙	粗良	
028	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(7.8)	1.0	(6.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/6 橙	粗良	
029	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(7.8)	1.2		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ が一口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	密良	
030	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш.	∭N 6C	(7.9)	1.3		口縁部~ 体部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	粗 不良	
031	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(7.9)	1.4		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
032	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш.	∭N 6C	(8.0)	1.3		口縁部~ 体部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	粗 不良	
033	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(8.0)	1.2		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
034	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.0)	1.1		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	密良	
035	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.0)	0.9		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ、体部〜底部ナデ、体部〜底部ナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
036	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш.	∭N 6C	(8.0)	1.1		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	

								,				*	()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
037	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.0)	1.2	(7.2)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
038	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.0)	1.4		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
039	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.0)	1.4		口縁部~ 底部1/2	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR6/6 橙	密良	
040	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.0)	1.2		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ が一口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
041	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.0)	1.4		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ が面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR6/6 橙	密良	
042	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.0)	1.4	(5.2)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部工具によるナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
043	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.1)	1.1	(6.1)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	
044	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(8.2)	1.3		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
045	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(8.4)	0.9	(7.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	粗良	
046	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(8.8)	1.4	(4.7)	底部3/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ユビオサエ→ナデ	5YR6/4 にぶい橙	密良	
047	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(9.0)	1.6	(5.0)		内面口縁部~体部ョコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ョコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
048	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(9.1)	1.0	(8.1)		内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	5YR7/6 橙	粗良	
049	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(9.6)	1.4		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
050	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(9.9)	1.1		底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ が面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR6/7 橙	粗良	
051	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(10.1)	1.3		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
052	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(10.4)	1.5			内面口縁部ヨコナデ、体部工具 によるナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	

							12	0-4.	包彻既乐	11		*	(()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名地層名	器種	器形	分類 段階区分	□径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
053	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(9.3)	1.7	(6.6)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
054	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(9.5)	1.9	(7.3)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
055	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(9.7)	1.8	(7.2)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
056	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(10.0)	1.7	(7.4)	口縁部~ 底部1/6	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
057	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(10.0)	2.1	(7.6)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
058	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(10.0)	2.3	(8.0)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
059	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(10.1)	2.1	(8.5)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
060	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(10.4)	1.2	(7.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR6/6 橙	密良	
061	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭Nd 6C	(10.5)	2.3	(6.7)		内面口縁部~体部ョコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ョコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
062	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭Nd 6C	(10.6)	2.6	(8.0)		内面口縁部〜体部ョコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
063	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(10.7)	2.1	(9.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
064	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭Nd 6C	(10.7)	2.1	(7.6)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ユビオサエ→ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	10YR8/3 浅黄橙	密良	
065	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(10.9)	1.9	(6.8)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
066	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(11.0)	2.2	(8.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	密良	
067	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(11.1)	2.0	(7.2)		内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	
068	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(11.1)	1.9	(7.5)		内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部ユビオサエ→ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	

							10	0-J. J	包彻既宗	±X		>>	※()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
069	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	.1111.	∭N 6C	(11.3)	2.0	(8.1)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ユビオサエ→ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	密良	
070	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(11.3)	2.3			内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
071	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(11.4)		(8.4)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
072	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(11.5)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
073	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(11.6)	2.1	(9.0)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	粗良	
074	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(11.6)	1.9			内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
075	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(11.7)				内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ→ナデ	7.5YR7/6 橙	粗良	
076	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(11.7)	2.2			内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
077	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(11.8)	2.2			内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ナデ	10YR8/4 浅黄橙	密良	
078	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(11.8)		(8.5)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
079	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(11.8)		(9.9)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユビオサエ→ナデ	10YR7/4 にぶい橙	粗良	
080	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(11.8)	2.2	(9.2)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	密良	
081	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(12.0)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/3 浅黄橙	密良	
082	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(12.0)	2.0	(8.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	10YR8/3 浅黄橙	密良	
083	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(12.0)	1.2	(10.4)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
084	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.0)	2.0	(9.0)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
085	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.0)	2.1	(9.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	

							12	0-0.	总彻既尔	11		*	(()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	□径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
086	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.0)	2.5	(8.1)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ナデ	5YR7/6 橙	密良	
087	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.0)	1.9	(9.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
088	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.1)	1.9	(8.8)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	10YR8/3 浅黄橙	密良	
089	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.1)	1.9	(9.1)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
090	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	III.N 6C	(12.2)	2.3	(9.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	密良	
091	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(12.2)	2.1	(9.6)		内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	
092	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭S 6C	(12.2)	2.2	(7.3)		内面口縁部ヨコナデ底部ナデ、 体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ユビオサエ→ナデ	5YR7/6 橙	粗良	
093	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.2)	2.6	(6.2)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部未調整	5YR7/6 橙	密良	
094	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.3)	2.0			内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
095	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭.N 6C	(12.3)	2.1	(9.2)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
096	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.4)	2.4	(9.4)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ユビオサエ→ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	10YR8/3 浅黄橙	密良	
097	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	III.N 6C	(12.4)				内面口縁部〜体部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
098	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.4)	2.7	(8.5)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
099	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭S 6C	(12.4)	2.7	(7.5)		内面口縁部ヨコナデ底部ナデ、 体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ	5YR6/6 橙	密良	
100	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.4)	2.3	(9.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
101	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	III.N 6C	(12.5)	2.0	(8.5)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	密良	

												*	()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
102	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(12.5)	1.9	(9.5)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
103	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(12.7)	2.0	(8.8)	口縁部~ 底部1/6	内面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユピオサエ→ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	密良	
104	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		III.N 6C	(12.8)	2.1	(6.8)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
105	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	▥	∭.N 6C	(12.8)	2.8			内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
106	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		III.N 6C	(12.9)	2.5			内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部コビオサエ→ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
107	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	III.N 6C	(12.9)				内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	密良	
108	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	III.N 6C	(12.9)	2.4	(6.2)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	密良	
109	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		III.N 6C	(13.0)	2.1	(8.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	10YR8/3 浅黄橙	密良	
110	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	III.N 6C	(13.0)	2.1	(9.6)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	
111	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(13.0)	2.1	(8.9)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
112	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭.N 6C	(13.0)				内面口縁部~体部ョコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
113	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	III.N 6C	(13.0)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ→ナデ		密良	
114	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		III.N 6C	(13.0)	2.1	(10.4)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユビオサエ→ナデ	5YR7/6 橙	密良	
115	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	1111	∭N 6C	(13.1)	2.1	(8.7)	口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	
116	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(13.2)	2.1	(8.2)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ	10YR8/3 浅黄橙	粗良	
117	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	▥	∭N 6C	(13.2)	2.3	(8.0)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	

												*	()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	□径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
118	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(13.2)	2.5			内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部~底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
119	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(13.6)	1.9			内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
120	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(13.8)	2.2	(11.1)		内面口縁部~体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部工具によるナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
121	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(13.8)	2.0	(10.2)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
122	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(14.0)	2.0	(11.0)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
123	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(14.6)	2.1	(11.2)		内面口縁部〜体部ヨコナデ 、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
124	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(12.6)	2.7	(8.0)		内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ→底部ナデ	10YR8/2 灰自	密良	
125	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭N 6C	(13.0)	2.7	(8.7)	口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	10YR8/2 灰白	密良	
126	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(14.0)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/2 灰白	密良	
127	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭N 6C	(14.7)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	2.5Y8/2 灰白	密良	
128	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭S 6C	(8.0)	1.3	(6.0)	口縁部~ 底部1/6	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	10YR8/2 灰自	密良	
129	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭S 6C	(9.2)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/2 灰白	密良	
130	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭S 6C	(10.3)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/3 浅黄橙	密良	
131	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭S 6C	(10.3)	2.8	(4.7)		内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/2 灰白	密良	
132	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	Ш	∭S 6C	(10.6)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR8/2 灰白	密良	
133	東	208土器溜り 第11-1層	土師器		∭S 6C	(11.0)			口縁部~ 体部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	2.5Y8/2 灰白	密良	
134	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器			(8.4)	1.5			内面ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5Y3/1 オリーブ黒	密良	

													※()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	□径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
135	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	Ш		(8.5)	1.6		口縁部~ 底部3/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	10Y4/1 灰	密不良	
136	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	Ш		(10.0)	1.0			内面ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	N3/0 暗灰	密良	
137	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-2	(11.0)	4.1	(3.6)		内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ、摩滅 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	2.5Y8/2 灰白	密不良	摩滅
138	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-2	(13.2)	4.1	(4.1)		内面ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	N5/0 灰	密 不良	摩滅
139	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-3	(13.3)				内面ミガキ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	N6/0 灰	密 不良	
140	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-3	(13.4)				内面ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5Y4/1 灰	密良	
141	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-3	(13.4)				内面ミガキ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ→ナデ	5Y4/1 灰	密良	摩滅
142	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-3	(13.5)	3.9	(4.5)		内面ミガキヵ 底部貼り付け高台	2.5Y8/2 灰白	密 不良	
143	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-3	(13.8)				内面摩滅 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5Y5/1 灰	密 不良	
144	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 IV-1	(11.1)	3.2	(4.6)		内面ナデ→ミガキ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ユビオサエ→ナデ 貼り付け高台	7.5Y5/1 灰	密良	
145	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 IV-1	(12.6)	4.1	(4.8)	口縁部~ 底部1/4	内面口縁部〜底部ミガキ 外面 貼り付け高台	10YR7/2 にぶい黄橙	密 不良	摩滅
146	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 IV-1	(12.8)	4.0	4.3		内面ミガキ 外面ナデ 貼り付け高台	N6/0 灰	密 不良	摩滅
147	東	208土器溜り 第11-1層	瓦器	椀	楠葉型 IV-1	(12.8)	4.0	(3.3)	口縁部~ 底部1/4	内面口縁部〜底部ミガキ 外面 貼り付け高台	7.5YR7/2 明褐灰	密 不良	摩滅
148	東	208土器溜り 第11-1層	土師器	鍋		(20.0)			鍔部1/8	内面ナデ 外面ヨコナデ	10YR6/3 にぶい橙		10c後半 摂津型、摩滅
149	東	208土器溜り 第11-1層	東播系須恵器	甕		(27.3)				内面口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、頭部~肩 部タタキ	10YR8/1 灰白	粗良	11c末~12c前半
150	東	208土器溜り 第11-1層	青磁	碗	越州窯系 B期 I -2エ			(7.6)	脚部~底 部1/8	内面底部ロクロ成形→施釉(貫入 あり) 外面体部ロクロ成形→施釉(貫入 あり)、底部露胎 ケズリ出し高台、高台内側施釉	10YR6/3 にぶい黄橙	密良	10c後半~11c中 頃
151	東	208土器溜り 第11-1層	白磁	碗	福建省系 D期 Ⅷ-3	(16.0)				内面ロクロ成形→沈線1条→施釉 外面ロクロ成形→施釉	5Y7/1灰白	密良	12c中葉~後半

													※()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
152	東	208土器溜り 第11-1層	白磁	碗	福建省系 D期 V-4b			(6.8)		内面ロクロ成形→施釉、蛇の目釉 ハギ、砂付着 外面ロクロ成形、体部施釉、ケズ リ出し高台、露胎	10YR7/3 にぶい黄橙	密良	12c中頃~後半
153	東	208土器溜り 第11-1層	青磁	碗	龍泉窯系 E期 Ⅱb	(14.8)				内面底部ロクロ成形→施釉 外面体部ロクロ成形→連弁文→ 施釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	密良	13c初頭~前半
154	東	208土器溜り 第11-1層	平瓦			長さ 7.4	幅 5.1	厚み 1.5		凹面布目痕、ハナレ砂 側面ヘラ切り 凸面ナデ	N5/0 灰	不良	摩滅
155	東	208土器溜り 第11-1層	丸瓦			長さ 7.9	幅 3.7	厚み 1.7		凹面布目痕 側面へラ切り、内面面トリ 凸面タテ縄目タタキ→ヨコナデ	N7/0 灰白	良	
156	東	208土器溜り 第11-1層	丸瓦			長さ 4,9	幅 4.1	厚み 1.2		凹面布目痕→綴ヒモ痕 凸面タテ縄目タタキ→ヨコナデ→ ハナレ砂	N4/0 灰	良	摩滅
157	東	208土器溜り 第11-1層	埴輪	朝顔形埴輪					口縁部 1/8以下	内面ナデ 外面ハケ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗 不良	摩滅
158	東	208土器溜り 第11-1層	埴輪	(円筒) 埴輪				(19.6)		内面ハケ5本/cm 外面ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	摩滅
159	東	208土器溜り 第11-1層	金属	鉄滓		長さ 3.6	幅 3.6	厚み 1.5					
160	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.0)	1.1	(6.2)	口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
161	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.4)	1.3		口縁部~ 底部1/8		7.5YR7/3 にぶい橙	密良	
162	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.5)	1.2	(5.9)	口縁部~ 底部1/8 以下		7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
163	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭N 6C	(9.4)	1.5			内面体部〜底部ナデ 外面体部〜底部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
164	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(9.8)	13.5		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
165	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(9.9)	1.4		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密不良	
166	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.1)	1.3		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	密良	
167	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(9.7)	1.6		底部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
168	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(9.9)	1.9		底部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部コビオサエ→ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	密良	

掲	≞m							c A	E#				※()内は復元値
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	備考
169	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器		∭N 6C	(11.0)	1.7		口縁部~ 底部1/8 以下		7.5YR8/3 浅黄橙	密良	摩滅
170	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器		∭N 6C	(11.8)	2.2		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
171	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.0)	1.6		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
172	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.0)	1.7		底部1/8	内面口縁部〜底部工具によるナ デ 外面口縁部〜底部工具によるナ デ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
173	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.0)	2.0		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	密良	
174	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭N 7A	(13.4)	2.2		口縁部~ 底部1/5		7.5YR7/2 明褐灰	密良	
175	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	土師器	Ш	∭N 7A	(14.0)	2.1		口縁部~ 底部1/8		7.5YR7/3 浅黄	密良	
176	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	瓦器	椀	楠棄型 IV-1	(12.0)			口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ケズリ、体部ナデ→ミ ガキ 外面口縁部ヨコナデ、体部ユビオ サエ→ナデ		密良	13c後葉
177	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	弥生土器	壺	弥生後期 後葉ヵ			3.7	底部1/5	内面底部ハケ目(11条/cm) 外面ハケ目(6条/cm)畳付に植物 痕、高台内側ナデ	5YR6/4 にぶい橙	密良	
178	西	1面 包含層 (表土掘削) 2-1~9層	白磁	碗	広東省・ 福建省系 C期 IV-1a	(15.0)				内面口縁部~体部ロクロ成形→ 施釉、口縁部釉二度掛け 外面口縁部~体部ロクロ成形→ 口縁部下ヘラケズリ、体部へラに よる面取り、口縁部~体部施釉、 体部下部露胎	5Y7/2 灰白	密良	11c後半~12c 半
179	西	1面 包含層 2-2層	陶器	蓋物鉢	信楽 5期	(11.6)			口縁部 1/8以下	内面ロクロ成形 外面ロクロ成形 焼き締め	7.5YR4/1 褐灰	密良	19c中頃~後
180	西	1面 包含層 2-10層	瓦器	Ш	楠葉型 Ⅱ-2	(8.3)	1.3		底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ヨコナデ→ミガキ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、体部〜底部ナデ→わずかにミガキ あり	7.5Y5/1 灰	密良	12c中葉
181	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(7.0)	1.0		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/4にぶ い橙	密不良	
182	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭N 7A	(7.1)	0.8	(4.0)	底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ、体部〜底部ナデ、体部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
183	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭N 7A	(7.5)	1.1	(6.8)		内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/3 にぶい橙	密良	

		文 V 12. 及 IX 即 I X X X										※()内は復元値		
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考	
184	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(7.6)	1.1	(6.4)	口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR6/4 にぶい橙	密良		
185	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(7.8)	1.2		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良		
186	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(7.9)	1.0		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良		
187	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(8.0)	1.1		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	摩滅	
188	西	8層 上位層	土師器		∭N 7A	(8.0)	1.0		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良		
189	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(8.7)	1.1		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部~体部ョコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ョコナデ、底部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	摩滅	
190	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(9.7)	1.5		底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ユビオサエ→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良		
191	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(11.5)	1.4	(8.6)	口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	摩滅	
192	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(8.0)			口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	密良		
193	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(8.8)	1.3		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良		
194	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(8.8)	1.6	(5.5)	口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底 部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良		
195	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(10.6)	2.1		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密不良		
196	西	8層 上位層	土師器		∭.N 7A	(11.2)	1.6		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ、体面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良		
197	西	8層 上位層	土師器	Ш.	∭.N 7A	(11.8)	2.0		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良		
198	西	8層 上位層	土師器	Ш.	∭.N 7A	(9.8)	1.9		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良		
199	西	8層 上位層	土師器		∭N 7A	(12.1)	1.9		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/6 橙	密不良	摩滅	

掲	=8			·				c /o	4-3				
載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備
200	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(9.0)			体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	7.5YR8/2 灰白	密良	
201	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(9.3)	1.6		体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、体部下部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/6 橙	密良	
202	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(10.0)				内面口縁部〜体部ヨコナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ	5YR7/6 橙	密良	
203	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(11.6)				内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ	10YR8/2 灰白	密良	
204	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(11.8)			体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、体部下部ナデ 外面口縁部~体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
205	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(13.7)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	摩滅
206	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭N 7A	(9.2)			体部1/8	内面口縁部〜体部ヨコナデ 外面口縁部〜体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	5YR7/6 橙	密良	
207	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(11.7)	2.3		体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
208	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.0)	2.1		口縁部~ 底部1/8 以下		7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
209	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭N 7A	(13.0)			口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	密良	
210	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(13.0)	2.0		体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	5YR6/6 橙	密良	
211	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(13.0)			体部1/8	内面口縁部〜体部ヨコナデ 外面口縁部〜体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	5YR7/4 橙	密良	
212	西	8層 上位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.7)	2.9		体部1/8	内面口縁部〜体部ヨコナデ 外面口縁部〜体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	5YR6/6 橙	密良	
213	西	8層 上位層	土師器	甕	三河型甕 Ⅱ-2 (Ⅰ類)	(23.2)				内面口縁部ヨコナデ、頸部板ナ デ、スス付着 外面口縁部ヨコナデ、頸部板ナ デ	2.5YR4/3 にぶい赤褐		10c後半 清郷型錦
214	西	8層 上位層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅱ-3	(14.9)				内面口縁部~体部ナデ→ミガキ 外面口縁部~体部ナデ→ミガキ		密良	
215	西	8層 上位層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅱ-3			(4.0)	底部1/8	内面底部ナデ 外面底部ナデ 貼り付け高台	2.5Y8/2 灰自	密不良	摩滅

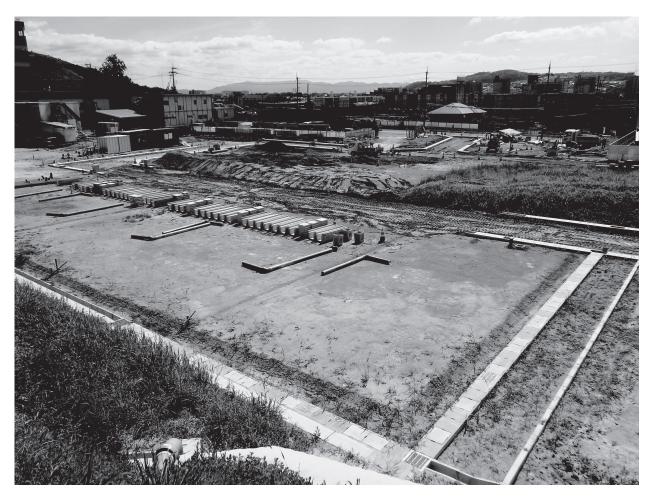
		文 V I I 及 I D B I D I D I D I D I D I D I D I D I							*	(()内は復元値			
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	□径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
216	西	8層 上位層	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-3	(14.0)				内面口縁部ヨコナデ、体部ミガキ 外面口縁部~体部上部ヨコナ デ、体部下部ナデ	N6/0 灰	密良	
217	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭N 7A	(6.0)	0.8			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
218	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(7.8)	0.9		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
219	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.0)	1.1			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
220	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.1)	1.1			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
221	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.2)	1.2			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	密不良	
222	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.2)	1.1			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密 不良	
223	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.5)	1.1			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
224	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭N 7A	(8.6)	1.1	(6.6)		内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
225	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.8)	1.1			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密不良	
226	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(8.0)	1.2		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 内外口縁部にスス付着	5YR7/6 橙	密良	
227	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(11.1)	1.2		底部1/8	内面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	
228	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭N 7A	(8.8)	1.8		口縁部~ 底部3/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、体部下部〜底部ナデ	7.5YR7/6 橙	密良	
229	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.0)	2.3		口縁部~ 底部1/4	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
230	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(8.4)	1.5		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
231	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(10.0)	1.4		口縁部~ 底部1/8 以下	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密不良	

掲													※()内は復元値
載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土 焼成	備考
232	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(10.1)	1.6			内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
233	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(11.9)			体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ、底部ナデ、底部ナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密不良	摩滅
234	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(12.0)	1.9		底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	密良	摩滅
235	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(12.0)	1.6		底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密不良	
236	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(12.1)	1.9	(10.2)	口縁部~ 底部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
237	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(11.0)	1.9		底部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ		密 不良	
238	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭N 7A	(12.0)	1.9		底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	密 不良	
239	西	8層 下位層	土師器	Ш.	∭.N 7A	(12.4)	2.3		底部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、体 部下部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	密良	
240	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(11.9)	1.8		体部1/8	内面口縁部〜体部ヨコナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、体 部下部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
241	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(12.0)				内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ		密良	
242	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(12.0)	1.6		体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、体 部下部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、体 部下部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
243	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(12.0)	1.7	(9.4)	体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	粗良	
244	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭N 7A	(10.6)				内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙		内外口縁部パ スス付着
245	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(11.9)			体部1/8		5YR7/4 にぶい橙	密良	
246	西	8層 下位層	土師器		∭.N 7A	(11.9)			体部1/8	内面口縁部~体部ョコナデ 外面口縁部~体部ョコナデ、底 部ナデ	5YR6/6 橙	密良	
247	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(11.9)				内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、体 部下部ナデ	5YR7/6 橙	密良	

表 6-16. 遺物観察表

	衣 0-10.										※()内は復元値		
掲載番号	調査区	遺構名 地層名	器種	器形	分類 段階区分	口径 cm	器高 cm	底径 台径 cm	残 存 率	成形調整の特徴	外色調	胎土焼成	備考
248	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.0)			口縁部~ 体部1/8 以下		7.5YR7/4 にぶい橙	粗良	
249	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.0)			体部1/8	内面口縁部~体部ヨコナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、体 部下部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
250	西	8層 下位層	土師器	Ш	∭.N 7A	(12.0)				内面口縁部~体部ョコナデ 外面口縁部~体部ョコナデ、底 部ナデ	5YR6/4 にぶい橙	密 不良	
251	西	2面 盛土層 10-2層	土師器		∭N 6C	8.9	1.3		口縁部~ 底部5/8	内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	摩滅
252	西	2面 盛土層 10-2層	土師器	Ш	∭N 6C	(8.1)	1.3			内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
253	西	2面 盛土層 10-2層	土師器	Ш	∭N 6C	(9.2)	1.9		口縁部~ 底部3/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
254	西	2面 盛土層 10-2層	土師器	Ш	∭N 6C	(12.6)	1.9		口縁部~ 底部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部コビオサエ→ナデ	5YR7/4 にぶい橙	密良	
255	西	2面 盛土層 10-2層	土師器		∭N 6C	13.9	2.7		完形	内面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底 部ユビオサエ→ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	密良	
256	西	10-2層 盛土層 西壁	土師器	Ш	∭N 6C	8.9	1.6			内面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ 外面口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密不良	
257	西	10-2層 盛土層 西壁	土師器	Ш	∭N 6C	(9.3)	1.5		口縁部~ 底部3/8	内面口縁部ヨコナデ、体部〜底部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底部コビオサエ→ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	密良	
258	西	10-2層 盛土層 西壁	土師器	Ш	∭N 6C	(8.9)	1.5		体部1/8	内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ 外面口縁部〜体部ヨコナデ、底 部ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	密良	
259	西	10-2層 盛土層 西壁	瓦器	椀	楠葉型 Ⅲ-3			(4.0)		: 内面体部〜底部ミガキ 外面体部〜底部ナデ 貼り付け高台	2.5Y6/1 黄灰	密良	13c中葉
260	西	3面 包含層 11-1層	土師器	鍋		(22.2)				内面ナデ 外面ヨコナデ、突起部下に沈線1 条	5YR7/4 にぶい橙		9c前半~10c前半 摂津型

写 真 図 版



調査前の調査地全景<左上が天王山丘陵、右上が男山丘陵、中央奥が醍醐山地>(南西から)



1-1. 調査地周辺航空写真(昭和 30 年撮影)



2-1. 東区第1遺構面完掘全景(南から)



3-1. 東区第1遺構面遺構検出状況(南から)



3-2. 東区第1遺構面耕作溝、耕作穴等(南から)



4-1. 東区第1遺構面完掘全景(北から)



5-1. 東区第1遺構面遺構検出状況(北から)



5-2. 東区第1遺構面耕作溝、耕作穴等(北から)



6-1. 東区第2遺構面完掘全景(北から)



7-1. 東区第2遺構面遺構完掘状況(北から)



7-2. 東区第2遺構面101溝、102土坑、103・104耕作穴等(北から)



8-1. 東区第2遺構面完掘全景(南から)



9-1. 東区第2遺構面105土坑、108耕作地・平場、109谷埋立地等(南から)



9-2. 東区第2遺構面105土坑(東から)



10-1. 東区第3遺構面完掘全景(北から)



11-1. 東区第3遺構面遺構検出状況(南から)



11-2. 東区深掘り調査全景(北東から)



-----12-1.西区 第 1 遺構面 完掘全景(南から)



12-2. 西区第1遺構面完掘全景(北から)



13-1. 西区第1遺構面耕作溝(北東から)



13-2. 西区第1遺構面耕作溝(東から)



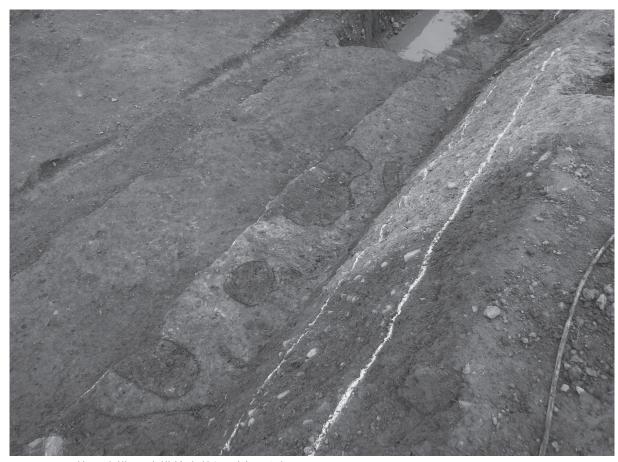
13-4. 西区第1遺構面耕作溝(東から)



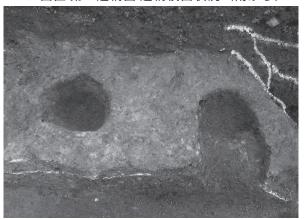
13-3. 西区第1遺構面耕作溝(東から)

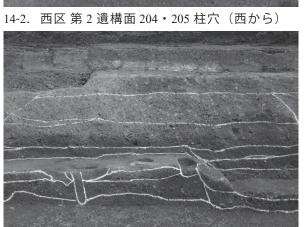


13-5. 西区第1遺構面耕作溝(東から)



14-1. 西区第2遺構面遺構検出状況(南から)

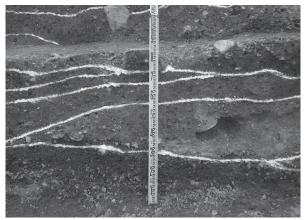




14-4. 西区第2遺構面検出壁面(西から)



14-3. 西区第2遺構面 202 土坑、203・206 柱穴 (西から)



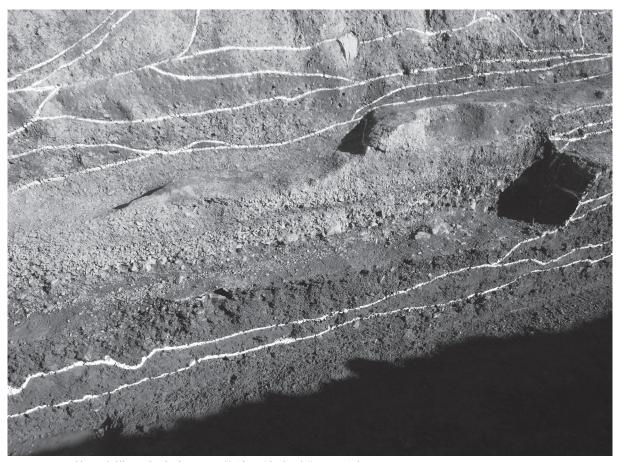
14-5. 西区第2遺構面 10-2 層遺物出土状況(西から)



15-1. 西区第3遺構面301~305土砂流下部抉込痕(北東から)



15-2. 西区第3遺構面301~305土砂流下部抉込痕(北西から)

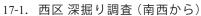


16-1. 西区第3遺構面東壁壁面306後流の流路(北西から)



16-2. 西区第3遺構面北壁壁面306後流の流路(南から)







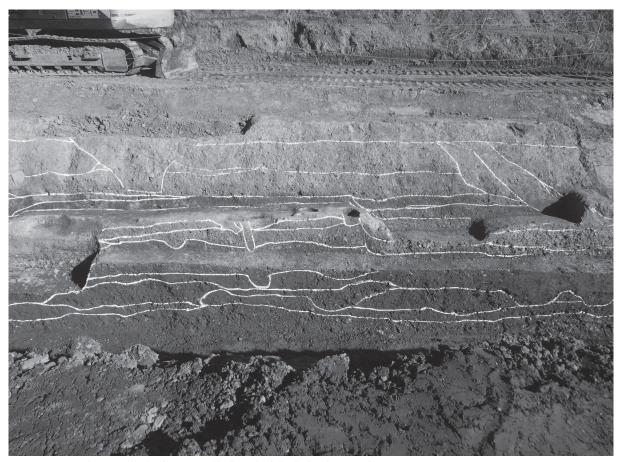
17-2. 西区深掘り調査(北から)



17-3. 西区深掘り調査(北西から)



17-4. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物全景(西から)



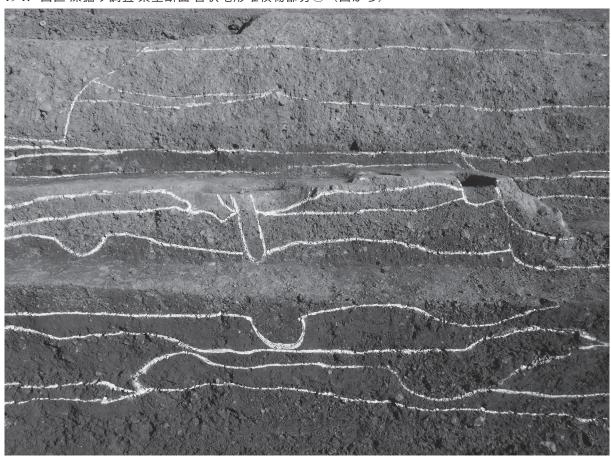
18-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物南半 (西から)



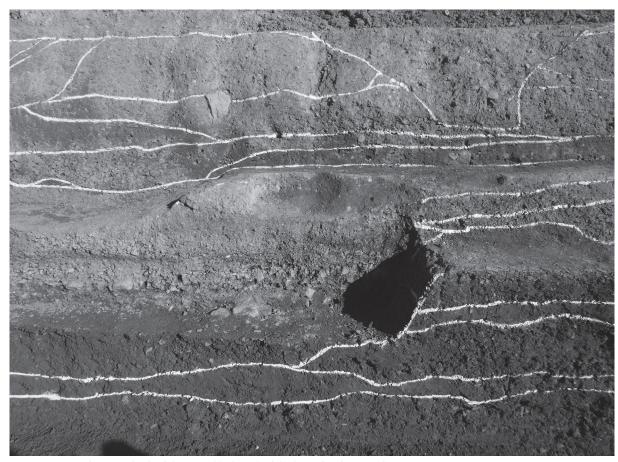
18-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分①(西から)



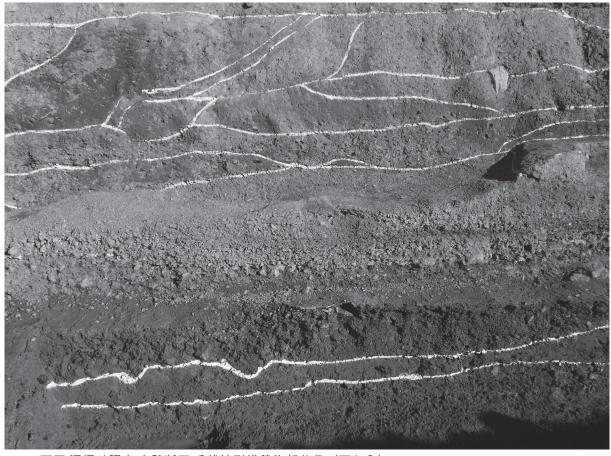
19-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分②(西から)



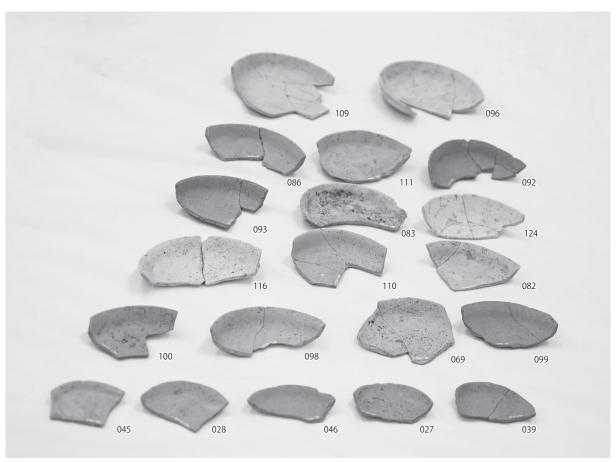
19-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分③(西から)



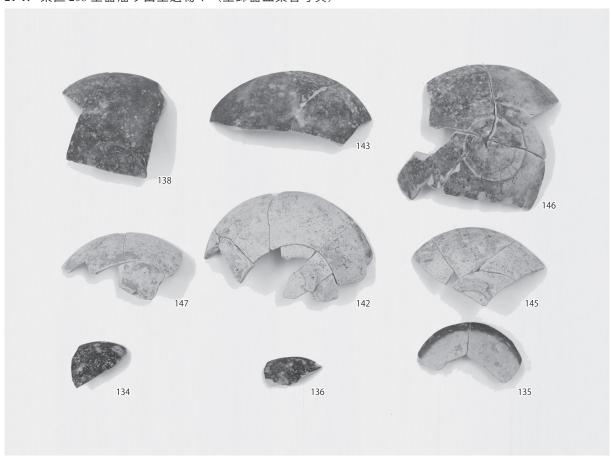
20-1. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分④(西から)



20-2. 西区 深掘り調査 東壁断面 舌状地形堆積物部分⑤ (西から)



21-1. 東区 208 土器溜り出土遺物 1 (土師器皿集合写真)



21-2. 東区 208 土器溜り出土遺物 2 (瓦器椀)

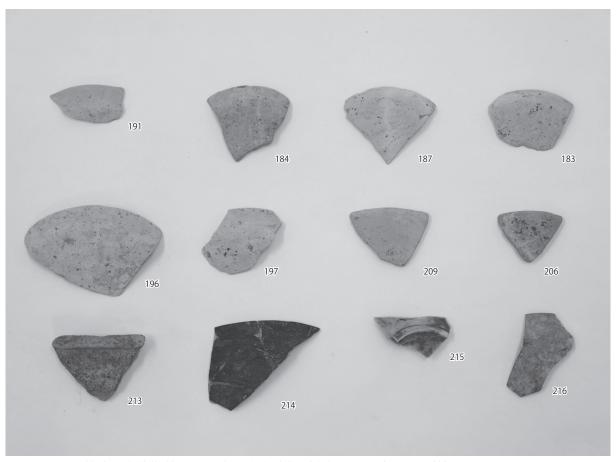


22-1. 東区表採遺物(複弁8葉蓮華文軒丸瓦)

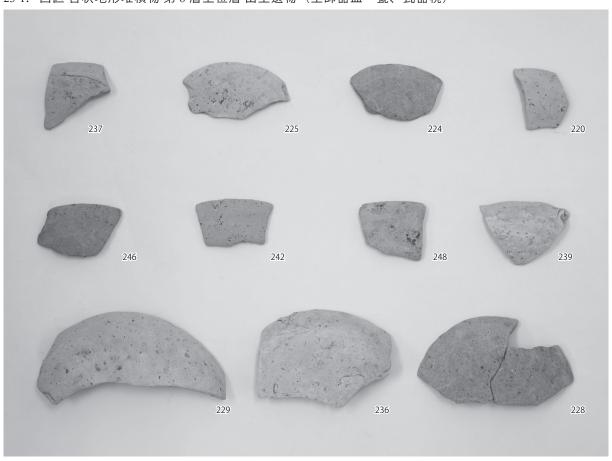
22-3. 東区 208 土器溜り出土遺物 4 (須恵器甕)



22-4. 東区 208 土器溜り出土遺物 5 (貿易陶磁器)



23-1. 西区 舌状地形堆積物 第8層上位層 出土遺物 (土師器皿・甕、瓦器椀)



23-2. 西区 舌状地形堆積物 第 8 層下位層 出土遺物(土師器皿)



24-1. 西区第2-1~10層・第10-2層・第11-1層出土遺物

報告書抄録

			TIX I									
ふりがな	しき	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ										
書名	島本	島本町文化財調査報告書										
副書名	越名	越谷遺跡 (KT22-1 バンド山) 発掘調査報告書										
シリーズ名	島本	島本町文化財調査報告書										
シリーズ番号	第4	第 49 集										
編著者名		木村友紀・辻 広志(編)・日紫喜勝重・木村靖子・田中羽留香・辻 康男・ パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ										
編集機関	島本	島本町教育委員会、 株式会社 島田組										
所在地	〒 581-0034 大阪府八尾市弓削町南 3 丁目 20 番地 2 TEL072-949-2410											
発行機関	島本	島本町教育委員会										
所在地	〒 618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目 1 番 1 号 TEL075-961-5151											
発行年月日	202	2023年5月31日										
デッッ ボッキ 所収遺跡名		新在地	コード 市町村 遺跡番		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因				
越谷遺跡	些影響 三島郡 四丁目	慧荣前秘并 施芮	27301	8	北緯 34° 52′ 42″ 東経 135° 39′ 30″	2022.06.29 ~ 2022.10.24	372 m²	土地区画整理事業				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な	は遺構		特記事項						
		鎌倉時代	溝・土坑・柱穴		土師器・瓦器・須	鎌倉時代中期の開発 と土砂流						
越谷遺跡	生産	室町時代~江戸時代	耕作溝・ビ土坑	゚ット・水田・	土師器・瓦器・陶器・磁器・瓦							
要約	遺構面は、部分3面の調査で、鎌倉時代、室町時代~江戸時代を主要な時期とする。今回の調査では、鎌倉時代中期に土 要約 地開発が行われ、生産域として利用されていたことが明らかとなった。しかし、この生産域は土砂流により何度も中断す るが、室町時代以降にその一部を再び開発して畑作を、さらに江戸時代になって水田をしていたことが明らかとなった。											

島本町文化財調査報告書第49集

越谷遺跡 (KT22-1 バンド山) 発掘調査報告書

発行年月日 2023年5月31日

編 集 島本町教育委員会

大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号

株式会社 島田組

大阪府八尾市弓削町南3丁目20番地2

発 行 島本町教育委員会 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号

印刷・製本 三星商事印刷株式会社 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町 273 番